

博士論文

論文題目 現代中国語における視覚動詞の文法化

氏名 張 佩茹

目 次

第1章 本研究の対象と目的	1
第2章 視覚表現の「視点明確化機能」	5
2.1 複文にみる視覚表現の「視点明確化機能」	5
2.1.1 「発見」や「原因」を表す視覚表現	5
2.1.2 視覚表現の「視点明確化機能1」と「視点明確化機能2」	6
2.2 視覚表現の「視点明確化機能1」	7
2.2.1 意識的に見ることと自然に目に入ること	7
2.2.2 単一視点の維持	12
2.3 視覚表現の「視点明確化機能2」	14
2.3.1 原因マーカーへの意味的・文法的拡張	14
2.3.2 “看”と“看见”の置き換え許容度	21
2.3.3 英語との比較	26
2.4 まとめ	28
第3章 “只见”の「注視点明確化機能」	31
3.1 一語化した“只见”	31
3.1.1 現代中国語における“只见”の用法	31
3.1.2 先行研究の検討	33
3.2 〈看见〉と“只见”の比較	34
3.2.1 核心的意味機能：視点明確化機能 vs. 注視点明確化機能	34
3.2.2 複文における役割：単一視点の維持 vs. 新たな事態の割り込み	41
3.2.3 主観性について：客観～主観 vs. 客観	45
3.2.4 接続詞的な用法にみる視覚以外の感覚への拡張	46
3.3 “只见”の接続機能	49
3.3.1 接続機能その1：視覚的実存化機能	50
3.3.2 接続機能その2：後件焦点化機能	53
3.4 まとめ	56

第4章	《見究めの“看”》と《試みの“看”》	59
4.1	〈見究め〉を表す“看”と〈試み〉を表す“看”	59
4.1.1	《試みの“看”》の拡張プロセス	60
4.1.2	先行研究の問題点	61
4.2	《見究めの“看”》と《試みの“看”》の異同	62
4.2.1	《見究めの“看”》と《試みの“看”》の共通点	62
4.2.2	相違点その1：“看”の品詞	65
4.2.3	相違点その2：〈手段〉動詞の形	66
4.2.4	相違点その3：〈手段〉動詞の意味	67
4.2.5	相違点その4：平叙文における制限	69
4.3	《見究めの“看”》と《試みの“看”》にみる形式と意味の関連性	- 72
4.3.1	焦点化について	72
4.3.2	形式上の距離と意味上の距離	72
4.3.3	形式と意味の相関性	75
4.4	まとめ	76
第5章	〈試み〉表現“VP 试试”について	77
5.1	“试试”は〈試み〉の新しいマーカ―か否か	77
5.1.1	“VV 看”の衰退と“VP 试试”の出現	77
5.1.2	“VP 试试”の先行研究とその問題点	80
5.2	連動構造におけるVP ₂ “试试”の文法化	80
5.2.1	“VP 试试”の“试试”が文法化した要因	81
5.2.2	“VP 试试”の下位分類	82
5.2.3	連動構造の典型性その1——継起的時間関係	84
5.2.4	連動構造の典型性その2——“来/去”や“了 ₁ ”との共起状況	86
5.2.5	命令文や意志表明文にみるE類“VP 试试”の特殊性	89
5.2.6	“VP 试试”と“试试VP”の違い	91
5.2.7	言語類型論からみる“VP 试试”の文法化	93
5.3	“试试”の文法化の度合い	94
5.3.1	既然のD類とE類の“VP 试试”	94
5.3.2	“VP 试试”のVPに関する形の制限	97
5.3.3	意味や音節数との関連性	100
5.4	まとめ	101

第6章 現代中国語の〈試み〉表現	103
6.1 “试试”と“看”の違い	103
6.1.1 共起する動詞の広がり	103
6.1.2 “VP 试试”にみられる脅迫の語気	106
6.2 動詞の重ね型VV、“VV看”と“VP 试试”が表す〈試み〉	107
6.2.1 動詞の重ね型と〈試み〉	108
6.2.2 “VV看”と〈試み〉	113
6.2.3 “VP 试试”と〈試み〉	115
6.3 台湾国語の“看看”	119
6.3.1 台湾語における〈試み〉に関連する“看”の用法	119
6.3.2 台湾語の影響を受けた台湾国語の“V(P)看看”	122
6.3.3 “V(P)看看”と“VP 试试”について	124
6.4 まとめ	125
 第7章 本研究のまとめと今後の課題	 127
謝辞	130
参考文献一覧	131

本論文で用いる記号について

ASP	aspect	アスペクトマーカ
CL	classifier	量詞／類別詞
CON	conjunction	接続詞
NEG	negative	否定辞
PART	particle	助詞
SF	sentence final particle	文末助詞

第1章 本研究の対象と目的

本研究は、現代中国語において視覚動詞の一部の用法が、本来の動詞性を喪失し、接続詞や助詞などへ文法化していることについて考察をおこなうものである。本研究では、“普通话”と呼ばれる中国語の共通語における視覚動詞の文法化を主な考察対象とし、視覚動詞が文法化の過程を経て獲得したいくつかの機能のうち、複文における接続詞的用法と〈試み〉の語気助詞としての用法に着目し、構文論および機能論の観点から考察をおこなう。また、共通語における〈試み〉の表現の全体像をつかむために、〈試み〉の意味を表す他の文法的マーカーや形式をも考察の射程に入れる。

通言語的にみると、文法化しやすい動詞はその言語の基礎語彙に属するものが多く、かつ語彙的意味が一般的なものである。たとえば、英語において近未来を表す助動詞 *be going to/be gonna* の主要動詞 *go* は、話し手から離れていく様々な様態の動作のすべてを代表できる動詞である(Hopper and Traugott 1993/2003:3)。現代中国語の共通語も例外ではない。視覚感知を表す動詞のうち、文法化が見られるのは、“望(眺める)”“盯(見つめる)”“瞪(じろりと見る)”のような特定の様態が含まれる動詞ではなく、“看(みる)”“见(見える)”“看见(見える)”“看到(見える)”といった最も一般的な意味をもつ動詞や動補構造である。

中国語は、特に三人称の文体においては、複文の構造においてしばしば視覚感知の動詞や動補構造が使用される。つまり誰の視覚感知であるかを明示する傾向がある。それに加えて、視覚感知の内容には客観的なものから、視覚感知した主体の判断に基づく主観的な内容まで多様なものが存在する。本研究では、中国語がなぜ複文においてこれほど視覚感知の動詞を多用するのか、その原因を明らかにすることを第1の目的とする。次に、書き言葉で物語の進行にしばしば使用される“只见”は本来、「ただ～が見える」という意味であったが、現代中国語においてその前に主語が現れないことや、後続する成分が文形式の目的語に限られることから、動詞の用法から逸脱していることが分かる。“只见”は複文において接続詞として機能すると考えられるが、その接続機能を明らかにすることが本研究の第2の目的である。最後に、“看(みる)”にはほかの動詞に後続し、「～してみる」という〈試み〉の意味を表す語気助詞の用法がある。従来の研究においては、〈試み〉のマーカーとしての“看”は、複文の後件に使われ、〈見究め〉を意味する動詞の“看”と同一視されることが多いが、本稿では両者は決して同様のものではないことを論証する。さらに、“看”以外に〈試み〉の意味を表す際に使用される“试试”や動詞の重ね型をも考察の対

象とし、現代中国語の〈試み〉の表現の全体像を解明する。これが第3の目的である。

本研究は以下のように構成される。まず、第2章では“看”“見”“看见”“看到”などの視覚表現が複文に用いられるときの機能について考察する。複文にこれらの視覚表現が使われる場合は「誰からそう見えているか」を明示することが主な機能となる、ということ踏まえたうえで、「誰からそう見えているか」の「誰から」を「視点」として定義し、複文における視覚表現の機能を「視点明確化機能1」と「視点明確化機能2」とに分けて捉え直す。「視点明確化機能1」とは、後件に使われる場合の〈看见〉の機能を指し、文を一貫した視点で語る場合に用いられる。「視点明確化機能1」の主たる表現機能が「単一視点の維持」という点にあることを、視覚表現が使用されていない複文との比較を通じて論証する。加えて、「視点明確化機能1」からの拡張として「視点明確化機能2」が生じることが指摘する。「視点明確化機能2」とは、視覚表現を複文の前件に用い、前件に生起する視覚感知の対象（もの・こと）を後件の動作行為の〈契機〉もしくは〈原因〉として明示する機能である。とりわけ〈原因〉をマークする際に、視覚表現に後続する内容は、意味的に、本来の「目に見える、客観的な視覚感知内容」から「(ある行動を引き起こす) 心に見える、主観的な判断」に変わることになる。〈看见〉などの視覚表現がこうした「目に見える」ことから「心に見える」ことへの意味的拡張にともなって、機能的にも動詞から〈原因〉を表す接続詞に近い性質を獲得していることを論証する。これらの機能は連続性をなすものであり、すなわち「視点明確化機能1」から「視点明確化機能2〈契機〉」と「視点明確化機能2〈原因〉」へと用法が拡張していくにつれ、視覚表現の動詞性が弱化し、かつ接続詞的性質が色濃くなる傾向が確認できる。一方で、〈原因〉をマークする用法においても、中国語の視覚表現にはなお動詞性が残っており、英語の“seeing that/as”とは異なって、なお完全な接続詞になり切っていないという事実を明らかにする。最後に、中国語の小説で因果関係を表すのに視覚表現を多く用いる傾向について、文構造の観点から本研究の見解を示す。

続く第3章では、〈看见〉との比較を手がかりに、“只见”の接続機能について考察する。とくに「視点明確化機能」と「注視点明確化機能」の対比を通じて、両者の違いを明らかにしていく。第2章で論じた〈看见〉は「単一視点の維持」という表現機能を担うものであり、そこでは「見る主体」が強く意識されるため、視覚表現に視点人物の主観的な判断が後続する用法、すなわち「視点明確化機能2〈原因〉」にまで拡張する。それとは対照的に、“只见”では「ただ～が見える」という本来の意味の影響により、客観的な「見える対

象」が前景化し、それと呼応して「見る主体」が影を潜める結果となるということを、“只见”の直前に主語が現れないという統語的事象に基づいて証明する。また、現代中国語において“只见”に後続する成分が文形式の目的語に限られることや、“只见”の前に否定詞をつけられないこと、“了”が後続しないことなどを根拠に、“只见”は動詞性を失い、文と文をつなげる接続詞の機能を獲得していることを論証する。“只见”の接続機能については、先行研究の論考を踏まえたうえで、さらに“只见”が視覚的実存化機能や後続部分の事象を新たな焦点として登場させる機能を併せ持つことも明らかにする。

第4章では、〈見究め〉の意味をもつ動詞“看”と〈試み〉の語気助詞である“看”の共通点と相違点を明らかにする。現代中国語における“看”の用法を論じる従来の研究では、《試みの“看”》は《見究めの“看”》に由来し、両者は相互に置き換えられるという見解を示すものが多いが、通時的な考察で明らかにされているように、《試みの“看”》は《見究めの“看”》に由来する用法ではない。本稿では、両者には、何らかの動作を手段とし、ある未知の事柄を究明する、という点において共通性が見られるということを示したうえで、なお相違点も少なくないことを指摘する。相違点に関しては、小説やコーパスのデータに基づき、“看”の品詞、〈手段〉動詞の形、〈手段〉動詞の意味、平叙文における制限といった四つの項目に分けて考察を進める。〈手段〉動詞が単音節の場合、確かに《見究めの“看”》と《試みの“看”》は相互に置き換えられることが多いが、〈手段〉動詞の性質によっては置き換えが制限される場合もある。その一例として“猜（当てる）”を取り上げる。未知の事柄が“猜”という〈手段〉動作の実行で直接究明できるか否かが、《試みの“看”》と《見究めの“看”》のどちらが選択されるかの決め手となることを示し、そこに形式と意味の相関性が見られることを明らかにする。

第5章では、〈試み〉のマーカ―としてはまだ広く容認されていないが、一部の用法に〈試み〉を表す文法的マーカ―としての機能が確認できる“试试（少し試す）”について考察する。“VP 试试”をVPの形式およびVPと“试试”の間の意味関係に基づき、A類からE類の5つに分類し、連動構造VP₁VP₂の典型性という観点から各類の違いについて分析をおこなう。A類における“试试”はなお実質的な動詞であるのに対し、E類にまで至ると“试试”はもはや独立した動詞ではなくなり、前方のVPに「試しにやる」という〈試み〉の意味を加える文法的マーカ―の性質を獲得するようになるということを示す。

続く第6章では、“看”や“试试”、動詞の重ね型が共通語において〈試み〉を表す際に、どのような特徴があるのかを整理し、現代中国語の〈試み〉の表現の全体像を解明する。

まず、文法化の過程において、“看”と“试试”は相反する拡張方向を見せていることを指摘する。“看”は最初に探求義のある動詞と共起し、「見る」から「確かめる」へと意味変化が起こり、やがて探求義のない動詞と共起するようになることで、〈試み〉のマーカールとしての機能が確立する。一方、“试试”は探求義のない動詞との共起が文法化の始まりとなる。また、“试试”の用法にはしばしば脅迫の語気が含意されるが、これもまた探求義のない動詞との共起に起因する可能性があることを指摘する。次に、先行研究の論考を踏まえたうえで、動詞の重ね型 VV や“VV 看”、“VP 试试”が表す〈試み〉の意味について考察する。重ね型という形式で明確な〈試み〉の意味を表せる動詞は、本来探求義を持つものに限られるため、VV の形にしても必ずしも〈試み〉の意味が付与されるわけではないということを確認する。それに対し、“VV 看”の“看”や“VP 试试”の“试试”は〈試み〉の語気助詞として前方の動詞（句）に〈試み〉の意味を付与する強力なマーカールではあるが、“VV 看”の V は単音節の動詞に限られるため、使用範囲は限定的である。一方、“VP 试试”に関しては、『人民日報』から採った約 66 年分のデータに基づき、数量的に広がり認められないものの、VP という動詞句に数量表現が伴わない“V(O)试试”の用法の増加に伴い、使用範囲が広がりつつあることを示す。最後に閩南方言における〈試み〉のマーカール“看”の用法を取り上げ、それらの用法が台湾の共通語である台湾国語へ及ぼした影響について分析する。加えて、台湾国語における“V(P)看看”と現代中国語の共通語における“VP 试试”の用法を対照させ、〈試み〉を表す文法的なマーカールには二音節化する傾向があることを指摘する。

最後の第 7 章では、本研究の内容をまとめたうえで、今後の研究課題を提示する。

第2章 視覚表現の「視点明確化機能」

まず、この章では複文における視覚表現の機能を考察することを通じて、中国語で視覚表現が多用される要因について考える。特に興味深いのは、視覚表現は前件で使われるときに意味拡張が起り、それに伴い動詞から原因を表す接続詞的な用法に文法化するということである。このように、視覚感知の動詞が原因を表す接続詞へと文法化する現象は通言語的に確認されているが、ここでは文法化に程度の差が見られることを中国語の観察と分析を通して明らかにする¹。

2.1 複文にみる視覚表現の「視点明確化機能」

2.1.1 「発見」や「原因」を表す視覚表現

複文において「発見」や「原因」を表すとき、中国語ではしばしば以下(1)や(2)のように視覚表現を用いる。「視覚表現」とは“看”“见”“看见”“看到”といった、視覚を表す動詞や動補構造が含まれた表現のことを指すものとする。“看”と“见”は多義語だが、本論では主に“看”の「動作主が意識して何かを見る」という意味、“见”の動作“看”の結果「何かが見える」という意味のみを考察の対象とする。

(1) 他刚刚走到街角，就 看 见 她从银行里出来。（巴金《寒夜》1）

すぐ見る 見える 彼女 から 銀行 中 出る 来る

（彼が通りの角まで歩いていくと、彼女が銀行から出てくるのが見えた。）

(2) 现在，老伴 见 他从多年的苦闷里找到一种精神的寄托，

連れ合い 見える 彼 から 多い年 PART 苦悶 中 探す 着く 1 種 精神 PART 託す

心中深感安慰。（冯骥才《雕花烟斗》2）

（今、彼が長年の苦悶の中から精神的なよりどころを見つけたのを見て、連れ合いは深いやすらぎを感じた。）

(1)の“看见”は本義の「見える」の例で、“她从银行里出来”は「彼」による発見を含意するが、(2)の“见”は単なる視覚による感知だけではなく、“见”の内容を後続の“心中深感安慰”の〈原因〉として取り上げる意図も含まれている。(1)の“他看见她从银行里出来。”は単文として成立するが、(2)の“?老伴见他从多年的苦闷里找到一种精神的寄托。”

¹ 本章の以下の議論は張佩茹 2005 をもとに、加筆、修正をおこなったものである。

は単文としての座りが悪い。後に“心中深感安慰”のような〈結果〉をつけることによって、初めてこの文は完全な意味を成す。このことから(2)の“見”は広義に原因を表す機能を担っていると見られる。ここでの“見”には「目に見える」ことから「心に見える」ことへの意味的拡張が見られるほか、〈原因〉を表す接続詞的機能への文法的拡張も確認できると考えられる。

本稿では、(1)と(2)における視覚表現の働きは視覚表現の「視点明確化機能」から生じたものである、と考える。「視点」という言葉は宮崎、上野 1985:3 によると、一般に二つの意味で用いられる。一つは「どこから」見ているかの「どこ」、もう一つは「どこを」見ているかの「どこ」である。本論は宮崎、上野 1985 にならって、「視点」を「どこから見ているか」の「どこ」と定義する。また、「視点人物」とは、文の視点を有する人物のことを指すものとする。視点を明確にすることによって、誰からそう見えているかが明白になるので、それがゆえに視覚表現が視点人物の「発見」や動作行為の「原因」を表現することと密接な関連性を持っている、と考えられるのである。

複文における視覚表現の役割は、中国語の文構造の特徴を理解するための、一つの重要な手がかりになる。単文なら視点が分かりやすいものの、複文になると、特に複数の登場人物が現れた場合、特定の登場人物の視点が中心になっているか、それとも複数の人物の視点が平等に扱われているかが問題になってくる。管見の限り、中国語の複文に関する先行研究で視覚表現を取り上げたものは僅かしかない(原田 1997a & b を参照)。原田 1997b は複文に見られる中国語の視覚表現の用法について、興味深い言語事実を掘り起こしている。しかし、その分析にはまだいくつかの問題点が残っている。それらの問題点を踏まえながら、本稿は「視点」という観点から複文における視覚表現の「視点明確化機能」を検証して行きたい。

2.1.2 視覚表現の「視点明確化機能1」と「視点明確化機能2」

原田 1997b は、知覚表現が複文の前半と後半のどちらに位置するかによって、「前件型」と「後件型」に分けて考察を行っている。その考察の結果、「前件型」知覚表現の最も重要な役割は原因を表すことで、「後件型」は前件の主語に当たる人物の知覚を明示することに重点があるという結論を示している。知覚表現というと、視覚、聴覚、嗅覚などが含まれるが、実際には視覚表現が最も頻繁に用いられており、そのことは原田 1997b で取り上げられた 21 例のうち、視覚表現が 16 例を占めているという事実からもうかがうことができ

る。本稿は考察の範囲を視覚表現に絞ることにする。

本稿では原田 1997b の「後件型」にあたる視覚表現の機能を「視点明確化機能1」、そして「前件型」にあたる視覚表現の機能を「視点明確化機能2」と、それぞれ改めて呼び直すことにする。なぜなら、「前件型」にせよ、「後件型」にせよ、視覚による感知というところに共通点が見られるからである。視覚表現を用いることによって、誰からそう見えているかが明確になる、つまり視点人物の確立ができる。その点に着目して「視点明確化」という呼び方で捉えなおしたい。また、単に見えることを表す「視点明確化機能1」と、見えることから原因を表すようになる「視点明確化機能2」の間には、連続性を読み取ることができるが、本章で「1」と「2」という呼び方を採用するのは、その連続性を強調する狙いがあることである。

本稿の分類に従うと、冒頭にある(1)の“看见”が「視点明確化機能1」を持つ表現で、(2)の“见”が「視点明確化機能2」を持つ表現である。(1)も(2)も単一人物の視点が文全体で貫かれていることに注目されたい。以下、「視点明確化機能1」と「視点明確化機能2」を詳しく考察する。

2.2 視覚表現の「視点明確化機能1」

複文の後件に使われる視覚表現が表す意味は「何かが見えてきたこと」であり、そのため、見る動作“看”ではなく、「見える」や「見かける」などを意味する“见”“看见”“看到”が用いられる（以降、“见”“看见”“看到”の性質をまとめて論じるとき、〈看见〉という言い方をする）。この「見えなかったもの・ことが見えてきた」という意味は、ある特定の視点人物による発見を表すことにつながる。

2.2.1 意識的に見ることと自然に目に入ること

まず、下の二例を参照されたい。

- (3) 他 忽然 警觉 地 回头 去 看, 仍旧 只 看到 那 不
 彼 突然 油断がない PART 振り返る 行く 見る 依然として ただ 見る 着く その NEG
 很 浓密 的 黑暗。 (巴金《寒夜》1)
 とても 濃密だ PART 暗い
 (彼が突然何かを察知して振り返って見ると、あいかわらず薄暗がりがあるだけだった。)

(4) 我 跨 过 门槛, 就 看 见 横 在 门廊 尽处 的

私 またぐ 過ぎる 敷居 すぐ 見る 見える 横たわる ある 歩廊 終わるところ PART

石 栏杆, 和 栏 外 的 假山、树木、花草, 同时也听见一片吵闹声。

石 欄干 CON 欄干 外 PART 築山 樹木 草花 (巴金《憩園》3)

(敷居をまたぐと、すぐ歩廊のつきあたりに横向きの石の欄干と欄干の向こう側にある築山や樹木、草花が見え、それと同時に騒がしい声も聞こえてきた。)

(3)と(4)で確認できるように、視覚表現が持つ「視点明確化機能1」が用いられる場面において、何かが見えるに至る前段階として通常二つの状況が考えられる。つまり、(3)のような「動作主が意識して見ようとする」状況と(4)のような「場所の転換や今まで遮られた視界がひらけてくる」状況である。二つの状況があるということについては、既に先行研究(原田 1997b, 費燕 2000)が指摘しているが、本稿では更に詳しく検証したい。

「視点明確化機能1」を持つ視覚表現を用いる動機は明確である。それは、「動作主が意識して見ようとする」と「場所の転換や今まで遮られた視界がひらけてくる」といった、まさに視覚に結びついている状況が存在するからにはかならない。まず、動作主の意識が働いている用例を見てみよう。この構文の特徴は複文の前件に“看”が現れることである。

(5) 编辑部主任兼代经理周××忽然在主任室里 抬 起 头 来, 朝 外面 看,

上げる 起きる 頭 来る 向ける 外 見る

看 见 了 他, 也不说什么话, 却露出一一种轻视的表情。(巴金《寒夜》1)

見る 見える ASP 彼

(編集部長兼社長代理周某が突然、部長室で頭を上げて外に目をやり、彼を見かけても、何も言うどころか、軽蔑の表情をあらわにした。)

(6) 我 转 脸 看 许立宇, 看 到 他 脸上 浮 起 颇为

私 (方向を)変える 顔 見る 人名 見る 着く 彼 顔 上 浮かぶ 起きる すこぶる

得意 颇为 自负 的 神情。 (王朔《许爷》)

満足する すこぶる 自負する PART 表情

(顔を横に向けて許立宇を見ると、彼の顔にはすこぶる満足げで自信にあふれた表情が浮かんでいた。)

前件の“看”にあわせて、後件にはしばしば“看见”“看到”、つまり“看”の結果を表す動補構造が用いられる。特に、後件に体詞性成分しかない場合は、通常“看见”“看到”が

必要になる。(3)の“……回头去看，仍旧只看到那不很浓密的黑暗。”と(5)の“……朝外面看，看见了他……”はその例である。この二つの例文を少し書き換えて、日本語と比較してみれば、この特徴がなお明らかになる。

- (7) 他回头去看，仍旧只看到那不很浓密的黑暗。
- (8) 彼が振り返ってみると、あいかわらず薄暗がりがあるだけだった。
- (9) 编辑部主任抬起头来，朝外面看，看见了他。
- (10) 編集部長が頭を上げて外に目をやると、彼がいた。

日本語の場合、「と」を使って後件が前件の主語による感知対象であることを表現するとき、「～だ(った)」や「～がいた」のようにコピュラ文や存在文のかたちで対象の存在を表現するだけで、「前件の主語による感知」ということが暗示されるが、中国語では〈看见〉を用い、誰からそう見えているかを明示する傾向が強い。

次に、「場所の転換」や「今まで遮られた視界がひらけてくる」といった状況に使う視覚表現の意味特徴を考察する。これらの用例は「動作主が意識して見ようとする」用例に比べて明らかに多く見られる。

- (11) 我 刚 从 石 栏杆 转 进 门廊，就 看 见 周 嫂
私 するやいなや から 石 欄干 (方向を)変える 入る 歩廊 すぐ 見る 見える 周 ねえさん
给 我 送 晚饭 来，……。(巴金《憩园》10)

あげる 私 届ける 夕食 来る

(石の欄干から歩廊に入ると、私に夕食を届けに来た周ねえさんが見えた。)

- (12) 我 连忙 跑 进 婴儿 室，看 到 百 伦 正 双手 叉 腰 站 在
私 急いで 走る 入る 赤ちゃん 部屋 見る 着く 人名 まさに 両手 あてる 腰 立つ いる
栏杆 已 被 砸 坏 的 婴儿 床 前，俯视着刚满六个月的尖声
手すり すでに される 打つ 壊れる PART 赤ちゃん ベッド 前
啼哭的儿子。(严君玲《落叶归根》18)

(急いで走って赤ちゃんの部屋に入ると、目に映ったのは、百倫が両手を腰に当てて、手すりがすでに壊された乳児用ベッドの前に立ち、六ヶ月になったばかりで大声で泣いている息子を見下ろしている光景であった。)

- (13) 我在我家那站地铁下了车，一 下 车 就 看 见 站 台 对 面
すると 下りる 車 すぐ 見る 見える プラットホーム 向かい

一 张 椅 子 上 坐 着 一 个 男 人 在 望 着 我。(王朔《玩的就是心跳》)

1 CL 椅子 上 座る ASP 1 CL 男 いる 眺める ASP 私

(家の最寄り駅で地下鉄を降りた。電車を降りると、男の人がプラットホームの向かいの椅子に座って私を眺めているのが目に入った。)

(14) 睡不着，我到门外去散散步。轻轻 的 开 开 门，我 看 见 一

そっと PART 開ける 開ける ドア 私 見る 見える 1

个人 紧 靠 着 槐 树 立 着 呢!

CL 人 ぴったりくっついている もたれる ASP エンジュ 立つ ASP SF

(老舍《四世同堂》11)

(私は眠れなくて、外へ散歩に出かけた。そっとドアを開けると、エンジュの木に寄りかかって立っている人の姿を目にした。)

(15) 他侧过脸去，看 见 一 团 黑影 蹲 在 那儿。(巴金《寒夜》1)

見る 見える 1 CL 黑影 しゃがむ いる そこ

(顔を横に向けると、そこに黒い影がしゃがんでいた。)

(16) 一天放学回家，一 推 开 门，见 一 个 农村 打扮 的 女孩子 坐 在

すると 押す 開く ドア 見える 1 CL 農村 装い PART 女の子 座る いる

沙发 上，睁大眼睛怯生生地望着我。(史铁生《爱情的命运》)

ソファ 上

(ある日、学校が終わって家に帰り、ドアを開けると農村出身の装いの女の子がソファに座って目を大きく見開いておどおどした様子で私を見ていた。)

ある空間を離れ、別の空間に入ったときや、体の動きなどにより今までの視界に入らなかったものが目に入ったときに、視覚表現が重要になってくる。この構文には以下の三つの特徴がある。

第一に、事象と事象の間の密接な時間的継起を示す標識がしばしば用いられる。(11)と(13)の“就”がまさにそれに該当する。

第二に、(11)から(16)までの例文がすべてそうであるように、“看见”“看到”の内容は主語の人物にとって予想できなかった光景である。

第三に、(12)、(13)、(14)、(16)のように、視覚表現に続く部分に「事件が実現中である」ということを示す標識がしばしば用いられる。(12)には“正双手叉腰”と“俯视着”、(13)には“在望着”、(14)には“立着”、そして(16)にはまた“望着”という表現がある。

以上の事実をまとめてみると、これらの複文の後件で使われる“看见”“看到”は「空間の移動や視界の移動により、あるものや実現中の事柄が不意に目に入った」ことを表していると言える。つまり、「不意の発見」を表しているということである。この「不意の発見」という意味は〈看见〉が非意志動詞であることに関連していると考えられる。

前述したように、実際の用例では「空間の移動・視界の移動」に伴った視覚表現のほうが「意識して見ようとする」表現よりもはるかに多く検出される。それはわれわれの日常経験と関係があると言えよう。普段のわれわれの生活の中では、移動中は通常「意識して何かを見る」より、「不意に何かが見えてくる」ことのほうが多いはずである。次の用例でこのことを検証したい。

(14) “睡不着,我到门外去散散步。轻轻的开门一看,我看见一个人紧靠着槐树立着呢!”

(私は眠れなくて、外へ散歩に出かけた。そっとドアを開けてみると、エンジュの木に寄りかかって立っている人の姿を目にした。)

(16) 一天放学回家,推开门一看,见一个农村打扮的女孩子坐在沙发上……。

(ある日、放課後に家に着いたとき、ドアを開けみると、ソファに……農村出身の装いの女の子が座っていた。)

(14)と(16)に“看”を加えた(14)と(16)は非文ではないが、文脈との間にギャップを感じる。(14)では外へ出て散歩することがドアを開ける目的であり、ドアを開けて何かを見て確かめることが目的ではないので、“轻轻的开门一看”という表現がやや不適切になるのである。また、(16)では放課後、家に着いてドアを開けるのは家に入るためであって、何かを見るためではないので、“推开门一看”という、奇妙な表現になってしまう。場所や視界の転換と共に動作主が意識して見ようとするには、何らかのきっかけになるものが必要である。例えば、(17)のようにドアをノックしている人がいるなどしてはじめて、「見る」という動作が適切になるわけである。

(17) 事过两个多月的一天晚饭后,有人敲着门。我出门一

ある人ノックする ASP ドア 私出る ドアすると

看,从没有点灯的走廊的晦暗中,透出一张苍白、无表情的脸。

見る

(冯骥才《我这个笨蛋》4)

(二ヶ月あまり過ぎたある日の夕食後、誰かがドアをノックしている。外に出てみると、電気がついていない廊下の暗がりから、青白い無表情の顔が現れた。)

以上、視覚表現による「視点明確化機能1」の構文の構造的及び意味的特徴を観察した。次に視覚表現を用いない複文と比較しながら、視覚表現の「視点明確化機能1」による視点人物の確立という役割について考えてみたい。

2.2.2 単一視点の維持

視覚表現を用いて視覚の感知を明示することは、「誰からそう見えているか」ということを明示することにほかならず、そのことは、同一人物の視点を維持することにもつながる。逆にいうと、視覚表現を用いなければ、同一人物の視点を語っているとは読み取りにくく、特に三人称の文体においては、複数の登場人物の行動を単純に相対的な時間関係で述べているものと解釈されかねない。次の用例を参照されたい。

- (18) 丁二狗 神 清 气 爽 地 从 茅房 走 回 家, 母亲
人名 精神 澄んでいる 気持ち すがすがしい PART から 便所 歩く 帰る 家 母親
王桂花 已经 做 好 饭 一 个人 开始 吃 了。(丁新征《追杀丁二狗》)
人名 すでに 作る よい ご飯 1 CL 人 始める 食べる SF
(丁二狗がさっぱりして便所から家に帰ってきたところ、母親の王桂花はすでにご飯を作り終えて、一人で食べ始めていた。)

- (19) 他 走 进 公司, 两 个 同事 坐 在 楼下 办公桌 前 看 报。
彼 歩く 入る 会社 2 CL 同僚 座る いる 階下 事務机 前 読む 新聞
“怎么啦, 老汪? 你今天气色不好……” 那个姓潘的年轻人带着讽刺的调子说。
(巴金《寒夜》1)
(彼が会社に入ったら、同僚二人が階下の事務机の前に座って新聞を読んでいた。
「どうしたの、汪さん? 今日あまり顔色がよくないな……」 潘という若者が皮肉を込めて言った。)

- (20) 丧胆游魂的, 他 走 到 小 羊圈 的 口 上, 街 上 忽然 乱
彼 歩く 着く 小さい ヒツジ小屋 PART 入り口 上 道路 上 突然 乱れる
响 起来, 拉车的都急忙把车拉入胡同里去, 铺户都忙着上板子……。
鳴る ~しはじめる (老舍《四世同堂》8)
(肝をつぶして放心状態のまま、彼が小さなヒツジ小屋の入り口まで歩いていくと、街中のあちこちで音が鳴り始め、車夫は車を胡同の奥へ引っ張っていき、商店の者は慌ただしく板戸をはめて店じまいをしていた……)

(18) (19) (20)では最初の登場人物がある場所に着くときを参照点にして、他の人物を登場させている。これらの例では、特定の人物の視点を表しているとは読み取りにくく、いわゆる「神の視点」から複数の事象を単に時間の流れに沿って描写しているものと考えられる。(18)では“丁二狗”が家に着いたら、お母さんが既に食事を始めていたこと、(19)では彼が会社に入ったら、二人の同僚が新聞を読んでいたこと、そして(20)では彼が“小羊圈”の入り口に着いたら、通りで突然騒ぎが起こったことを描写している。(20)では“忽然”を使うことにより、「突然性」を明確にしているが、(18)と(19)では後文が特に「予想外の事柄」として描かれてはいない。これは先に述べた〈看见〉がもたらす「不意の発見」の意味とは性質が異なる。

また、(19)では“他走进公司，两个同事坐在楼下办公桌前看报”の次の文が“姓潘的年轻人”の発言であることから、書き手が“他”の視点に密着していないことがうかがわれる。“姓潘的年轻人”は“两个同事”のうちの一人である。もしも“他”、つまり“老汪”と呼ばれる人物の視点から描くなら、例えば(21)のように〈看见〉を用い、さらに後続の文も“老汪”を主語に立てるのが最も自然であろう²。

(21) 他(=“老汪”)走进公司，看见两个同事坐在楼下办公桌前看报。他(=“老汪”)向他们打了声招呼。

(彼が会社に入ると、同僚二人が階下の事務机の前に座って新聞を読んでいるのが見えた。彼らに挨拶をした。)

視覚表現を用いないタイプの複文のなかには、このほかに、明白に時間を表現する“时(とき)”を用いるものもある。以下の(22)を見られたい。

(22) 马青 身心 交瘁 地 回到公司 办公室 时，于观 正 被

人名 体心 疲れ果てる PART 帰る 着く 会社 オフィス とき 人名 まさに ~される

那 汉子 揪 着 脖领子 在 办公室里 拖 来 拖 去。

あの 男 掴む ASP 首回り いる オフィス 中 引っ張る 来る 引っ張る 行く

(王朔《顽主》1)

(馬青が心身ともに疲れ果てた状態で会社のオフィスに戻ってきたとき、于観はちょうどあの男に首回りを掴まれてオフィス中引きずり回されていた。)

² しかし、一般的にみると、文と文とが必ずしも密接な関係で結ばれているとは限らないので、この説明は厳守すべき規則というより、傾向と見たほうが適切であろう。

(22)で確認できるように、視覚表現を用いない場合は、時間的参照点を示すことで、前件と後件が緊密に結びつくのである。しかし、この場合も(18)から(20)までと同様に、後件が前件の主語の視覚感知の内容であるかどうかについては、関心が示されていない。

なお、一人称小説では、語り手（書き手）の視点がつねに一人称主語と同化するという特殊事情のため、視覚表現を用いなくても、一人称主語の視点が複数の文にわたって貫かれるということが少なくない。(23)と(23')を比較されたい。

(23) 我 来 到 隔 壁 屋, 那 对 新 人 忙 站 起 来, 倒 还
私 来 着 着 く と な り 部 屋 あ の ペ ア 新 婚 カ ッ プ ル 急 ぐ 立 つ 起 き る 来 る 意 外 と ま だ
不 是 邈 邈 人, 都 有 点 南 方 式 的 细 致 ……。
NEG である 汚い人 みんな ある 少し 南方 スタイル PART 緻密だ
(王朔《玩的就是心跳》)

(私が隣の部屋にやって来ると、あの新婚カップルが急いで立ち上がった。特にだらしない人でもなく、二人とも少し南方スタイルの緻密さがあった……。)

(23') *小王来到隔壁屋, 那对新人忙站起来, 倒还不是邈邈人, 都有点南方式的细致……。

(23)で分かるように、一人称の語りなら動作主を提示しなくても“倒还不是邈邈人, 都有点南方式的细致”といった評価を下すことが可能であるが、(23')のような三人称の文では不適切である。

以上、視覚表現を用いない複文と比較して確認できたのは、特に三人称の場合、視覚表現は「視点明確化機能1」によって、視点人物の存在を確立することにより、同一人物による単一の視点を維持することが可能になるということである。次に「視点明確化機能2」について考察する。

2.3 視覚表現の「視点明確化機能2」

複文の後件に使われる視覚表現は、ある特定の登場人物による視覚感知を明示し、そのため視点人物の確立に寄与する。この「視点明確化機能1」から発展して、「見えたもの・ことに何らかの影響を受ける」ことを表すようになったものが、以下に論じる視覚表現の「視点明確化機能2」である。

2.3.1 原因マーカ―への意味的・文法的拡張

「視点明確化機能2」とは、視覚表現を用いて、視点人物の行動や心理状態に影響をも

たらず原因を示す機能である。日本語のシテ形接続を考察した仁田 1995 は、従属節の内容が知覚・認知の場合、それによって得られた情報・現象は主節を導き出す刺激だと解釈した上で、このような従属節と主節の間の関係を〈契機〉と見なし、さらに〈契機〉を〈時間的継起〉と〈起因的継起〉の中間に位置づけている。つまり完全な因果関係とは認めがたい性質があるということである。中国語においては、「視点明確化機能2」を持つ視覚表現に〈契機〉の性質が見られるが、〈原因〉を明確にする例も少なくない。まず、〈契機〉を担う視覚表現の例を見てみよう。

- (24) 谭丽 脸蛋 红扑扑 地 从窗 外 走 过，看 见 我，敲
 人名 頬 赤みを帯びる PART から 窓 そと 歩く 過ぎる 見る 見える 私 叩く
 玻璃 嘴 贴 着 玻璃 喊 什么。 (王朔《玩的就是心跳》)
 ガラス 口 くつつく ASP ガラス 叫ぶ 何
 (譚麗が頬を赤くしながら窓の外を通り過ぎるときに私を見かけると、ガラスを叩き、口をガラスにくっつけるようにして何かを叫んだ。)
- (25) 她一路喘着气，看 见 他 站 在 那儿， 向 他 打 个 招呼，就
 見る 見える 彼 立つ いる あそこ に向かって 彼 やる CL 挨拶 すぐ
 一直 走 到 她 丈夫 的 身边。 (巴金《寒夜》1)
 まっすぐに 歩く 着く 彼女 夫 PART 体の近く
 (彼女は息を切らせながらやってきて、彼がそこに立っているのを見かけると、軽く挨拶を済ませた後、まっすぐに彼女の夫のそばに行った。)
- (26) 我走过大仙祠门前，看 见 门 掩 着， 便 站 住 推 一下，
 見る 見える ドア しまる ASP すぐ 立つ 止まる 押す ちょっと
 门开了半扇，里面没有一个人。 (巴金《憩园》19)
 (大仙の祠の前を通り過ぎるときに、ドアが閉まっているのが見えたので、立ち留まって少し押してみたら、ドアが片方開いたが、中にはだれもいなかった。)

ここでの“看见”の内容は、主語の人物がその次を取る行動と密接な関係があるが、因果関係とは言いにくい。そのことは、原因を尋ねる疑問詞“为什么(どうして)”を使った(24')、(25')、(26')がいずれも不自然であるという事実からも明らかである。

- (24') 谭丽为什么敲玻璃? —— ?因为我。
 (譚麗はどうしてガラスを叩いたのか。——私だから。)

(25) 她为什么向他打招呼? —— ?因为他站在那儿³。

(彼女は どうして 彼に 挨拶をしたのか。 —— 彼がそこに立っていたから。)

(26) 你为什么推了门? —— ?因为门掩着。

(あなたは どうして ドアを押したのか。 —— ドアが閉まっていたから。)

このことから、(24)から(26)までは“看见”に後続する内容とその後の事象の間に因果関係があるとは考えにくい。それよりも、むしろ“看见”の内容が、後続する行為の〈契機〉を表していると見たほうが妥当であると思われる⁴。(24)、(25)、(26)の三例とも主語の人物が場所移動したのちに何かを見かけ、それによってある行動を取っているという点に注目されたい。

一方、“看见”に続く内容が〈原因〉を表すと考えられるケースも存在する。

(27) 我 看见 旁边 没有 别人, 决定 趁 这个 机会 向 他
私 見る 見える そば ない 他の人 決める に乗じて これ CL 機会 に向かって 彼
打听 杨家 小孩的 事。 (巴金《憩园》10)

尋ねる 楊家 子供 PART 事

(周りに他の人がいなかったのので、この機会を利用して彼に楊家の子供のことを尋ねることにした。)

(27) 你为什么决定向他打听杨家小孩的事? —— 因为旁边没有别人。

(どうして彼に楊家の子供のことを尋ねることにしたのか。 —— 周りに他の人がいなかったから。)

(27)の“为什么”を使ったテストからも明らかなように、(27)の“看见”に後続する“旁边没有别人”は“向他打听杨家小孩的事”という決定に踏み切った原因を表していると考えられる⁵。〈契機〉よりも強い因果関係が見られる。

³ 知り合いを見かけたら挨拶するのは一般的な常識なので、この二つの事象間に因果関係があるとは言いにくい。白川 1995 では、「12時になったから、ご飯にしよう」の「12時になる」と「ご飯にする」には「12時になったら、ご飯にする」という条件文があらかじめ存在するので、ここの「から」は理由を表さないと分析している。(25)の因果関係の不自然さを説明するときにも、この分析はあてはまると考えられる。

⁴ 先行研究(原田 1997b, 費燕 2000)では、前件に視覚表現が用いられる複文においては、前件と後件に因果関係があると指摘されているが、因果関係の強弱の差については言及されていない。

⁵ 普通、「誰もいない」ことを表現するとき、わざわざ“看见没有人”とは言わない。例えば、「我站起来，走到门口往外看，走廊里没人。(私は立ち上がり、入口まで行って外を見たが、廊下には誰もいなかった。)」(王朔《玩的就是心跳》)

また、通常、単文だと〈看见〉などと結びつきにくい文でも、ある結果を引き起こす原因として扱う場合には、〈看见〉との共起が自然になる。

- (28) 张莉 丈夫 见 我 非 要 走 就 叫 张莉 送 送
 人名 夫 見える 私 どうしても したい 去る ~ならば~だ 呼ぶ 人名 見送る 見送る
 我关切地对我说“不行别硬撑着”。 (王朔《玩的就是心跳》)

私

(私がどうしても帰ろうとするので、張莉の夫は張莉に私を見送るように言い、私には「だめだったら、無理するなよ」と気遣うことばをかけた。)

- (28') *张莉丈夫看见我非要走。(張莉の夫は私がどうしても帰ろうとするのを見た。)

- (29) 师姐 见 我 自愿 找 上 门 来 和 她 合作, 眼睛
 女性の先輩 見える 私 自ら志願する 訪ねる 上がる 門 来る CON 彼女 協力する 目
 都 喜 得 眯 成 了 一 条 缝……。

みんな 喜ぶ PART 目を細める なる ASP 1 CL 裂け目

(袁冬霖《我说爱情应该是个变量》)

(私が自ら進んで彼女と協力するために訪ねてきたので、先輩は喜んで、目を細めた。)

- (29') *师姐看见我自愿找上门来和她合作。

(先輩は私が自ら進んで彼女と協力するために訪ねてきたのを見た。)

- (30) 老姚 看 见 我 不 答话, 便 伸 出 左手 在 孩子 的
 姚さん 見る 見える 私 NEG 返事する ~ならば~だ 伸ばす 出す 左手 いる 子供 PART
 背 上 推 一 下, 说: “你走过去一点, 让黎叔叔看清楚!” (巴金《憩园》7)

背中 上 押す 1 CL

(私が返事をしなかったので、姚さんは左手を差し出して子どもの背中を押して、「黎おじさんによく見てもらえるように、もう少しそっちに行きなさい。」と言った。)

- (30') *老姚看见我不答话。

(姚さんは私が返事をしなかったのを見た。)

- (31) 小顺儿的 妈……看 到 大家 都 快活, 她 便 加倍
 人名 PART 母 見る 着く みんな 全部 楽しい 彼女 ~ならば~だ 一段と
 用力 的 工作……。 (老舍《四世同堂》10)

力を入れる PART 仕事する

(みんなが楽しそうなので、小順児のお母さんは一段と仕事に精を出した。)

(31) *小顺儿的妈看到大家都快活。

(小順児のお母さんはみんなが楽しそうにしているのを見た。)

これら視覚表現が述語となる節は、単独では文として成り立ちにくい。それに対して、(24)から得られる“潭丽看见了我”や(26)から得られる“我看见门掩着”は単独でも完全な文になりうる。どこが違うかという、(28)から(31)が、視点人物にある行動を取らせる或いはある感情を持たせる原因となる自覚的な事柄を取り上げているのに対して、(24)から(26)は無自覚的に目に入ってくる物事の静的・動的的存在を述べている。後者に比べて、前者のほうが主観性が強いと言えよう。目に見える物事の意味を読み取り、それに応じて次の行動を取るといった、視点人物の主観的参加が見られる。例えば、(28)の“非要(どうしても)”や(29)の“自愿(自ら志願する)”などには、視点人物の「判断」が含意されている。

以下の(32)から(37)までの例に見て取れるように、単純な視覚感知を表す場合の視覚表現は、“清清楚楚地(はっきりと)”や“模模糊糊地(ぼんやりと)”など、どう見えているかを修飾する副詞成分と共起することが可能であるのに対して、視点人物の主観的な理解が絡んでいる場合の視覚表現は、これらの副詞とは共起しにくい、もしくは共起しない。なお、(34)から(37)の文は単文としての座りが悪いため、後件に何かが続くという設定である。

(32) 我清清楚楚地看见了她。(私のはっきりと彼女を見かけた。)

(33) 我模模糊糊地看见门掩着。(私のはぼんやりとドアが閉まっているのを見た。)

(34) ?我清清楚楚地看见她的神色不大对，……。

(私のはっきりと彼女の表情が変だったので、……。)

(35) ?我模模糊糊地看见旁边没有别人，……。

(私のはぼんやりと周りに他の人がいないので、……。)

(36) *他清清楚楚地看见我非要走，……。

(彼のはっきりと私がどうしても帰ろうとするので、……。)

(37) *他模模糊糊地看见我不答话，……。

(彼のはぼんやりと私が返事しないので、……。)

このような「はっきり」や「ぼんやり」を意味する副詞成分との共起可能性の程度差から〈看见〉に後続する内容には、単なる視覚による感知を表すものと、視点人物の理解もしくは判断の内容を表すものといった、連続性のある二種類の内容があるということがうか

がえる。すなわち、実際に見えたことから主体的に判断されたことまでの連続性である。視点人物の理解や判断が要求される「抽象的に見える」ことであれば、単文としては成立しがたく、かつ〈原因〉として用いられる傾向が強くなる。この時の視覚表現は原因を表す接続詞的機能を獲得していると言えよう。「視点明確化機能1」を担う視覚表現が最も動詞性の強い用法で、「視点明確化機能2」になると、〈契機〉を表すときにはまだ動詞性が強いと言えるが、〈原因〉を表すときには、視覚表現の動詞性が弱まっている。以上の議論は、下のように図式することができる。

「視点明確化機能1」 > 「視点明確化機能2 〈契機〉」 > 「視点明確化機能2 〈原因〉」
 動詞性強 ←—————→ 接続詞性強

このように「視点明確化機能2」は、特定の人物が何らかの契機もしくは原因によってある行動を取る、或いはある感情を持つことを表すための視覚表現であり、その人物の視点を複数の文にわたって一貫させるという点で、複文の構成上きわめて重要な連結機能を担っている。先の(25)、(27)、(31)から下線部の視覚表現を落とした(25'')、(27'')、(31'')は明らかに不自然である。

(25) 她一路喘着气，看见他站在那儿，向他打个招呼，就一直走到她丈夫的身边。

(25'') *她一路喘着气，他站在那儿，向他打个招呼，就一直走到她丈夫的身边。

(27) 我看见旁边没有别人，决定趁这个机会向他打听杨家小孩的事。

(27'') *旁边没有别人，我决定趁这个机会向他打听杨家小孩的事。

(31) 小顺儿的妈……看到大家都快活，她便加倍用力的工作……。

(31'') *大家都快活，小顺儿的妈便加倍用力的工作……。

因果関係を表現するには視覚表現のほかに、(27'')のように接続詞“因为(だから)”を使用することも可能である。

(27'') 因为旁边没有别人，我决定趁这个机会向他打听杨家小孩的事。

だが、大河内 1967 でも既に指摘されているように、中国語では論説や論文の類なら関係詞(接続詞と連接関係を表す副詞)を用いるが、小説ではあまり見かけない。实例を見ると、(27'')ならまだ自然な文であるが、(31)の用例の場合、“因为”で書き換えることができない。

(31'') *因为大家都快活，小顺儿的妈便加倍用力的工作……。

“小顺儿的妈”がいつにも増して仕事に励むのは“看到大家都快活”だからであり、“大家都快活”ということが彼女の目に映ったということを表示してこそはじめて、そのことが彼女の行動の引き金になっているという読みが可能になる。

また、“因为”や“所以（したがって）”を使って表される因果関係とは、「誰による判断なのか」ということを考えてみると、それは書き手や語り手による判断であることに気が付く。“因为”や“所以”を使うと、その場での出来事というより、事件の後に書き手が前後の因果関係を加えて書いたように理解されてしまう。あらゆる事件があたかも実況中継的に描かれる小説においては、書き手による判断の混入は不適切に感じられる場合が多い。中国語の複文において視覚表現が頻出する原因はそこにある、と考えられる。關聯詞を使わずに事象と事象の因果関係を表現するには、基本的に「何かが見えた」、そして派生的に「何かを感じ取って理解する」という意味を持つ視覚表現こそが相応しいと言えよう。次の(38)では〈原因〉をマークする視覚表現の後に長い文が続いても、その全体が視覚表現により〈原因〉として一つのまとまりになっている。単一視点の維持において、視覚表現がいかに重要なかがうかがえる。

(38) 他的火气是逐步上升的，开始还较为克制，没有十分用力，但他 看 到 马锐

見る 着く 人名

就是 不 肯 服软， 始终 挺 身 站 在 那 儿，

絶対に NEG すすんで～する 負けを認める 終始 まっすぐに伸ばす 体 立つ いる あそこ

不管 他 怎么 打 不 动 也 不 吭声， 甚至 连 哭 都 不

であろうと 彼 どう 殴る NEG 動く も NEG 声を出す すら さえ 泣く 全部 NEG

哭， 凝 视 着 他 的 眼 睛 里 流 露 出 毫 不 掩 饰 的 轻 蔑，

泣く 凝視する ASP 彼 PART 目 中 現れる 出る ちっとも NEG 隠す PART 軽蔑

便被一点点彻底激怒了。 (王朔《我是你爸爸》4)

(彼の怒りは徐々にエスカレートしたもので、最初はまだ抑えることができ、あまり力が入ることはなかったが、馬銳がどうしても負けを認めたがらず、終始まっすぐに体を伸ばしてそこに立ったまま、どんなに殴っても動こうとせず声も出さず、泣くことさえせずに彼を見つめる目に隠そうともしない軽蔑の気持ちが現れているので、しだいに怒りを爆発させることになった。)

以上の論点をまとめてみると、「視点明確化機能2」、つまり「見えたもの・ことに何らかの影響を受ける」というのは、同一視点を維持することにより、視点人物の行動や心理

状態に影響を及ぼす物事とその結果を明示することであると言える。視覚表現に後続する成分は、単純な視覚による非自主な感知の内容もあれば、視点人物の理解や判断が加わるものもある。視覚表現が用いられた前件は後件にとって、一種の〈契機〉を表し、視点人物の判断が入って因果関係のより強い場合は〈原因〉を表していると考えられる。

2.3.2 “看”と“看见”の置き換え許容度

単文においては、“看”は「見る動作」を、“看见”は「何かが目に入ることや見る動作による結果」を表し、両者は明確に使い分けがなされる。以下の用例を見られたい。

(39) 张三 昨天 看 了一部 电影。

人名 昨日 見る ASP 1 CL 映画 (張三は昨日映画を観た。)

(39)*张三昨天看见了一部电影。

(40) 李四 看见 前面 站 着 一 个人。

人名 見る 見える 前 立つ ASP 1 CL 人 (李四は前に一人が立っているのを見た。)

(40)*李四看前面站着一个人。

だが、「視点明確化機能2」の構文においては、“看见”を“看”で置き換えることが可能である。「視点明確化機能2」とは「見えたもの・こと」に何らかの影響を受けることで、この「見えた」に相当する表現は“看见”のはずだが、実際の用例を見てみると、“看”を用いている文も少なくない。“看”は“看见”より自主性が強く、“看”を使うことで主観性が強まると考えられる。「視点明確化機能2」を果たす視覚表現が単なる〈契機〉から意味的・文法的拡張を経て〈原因〉をマークするようになるという点においても、主観性の増強が見られるので、“看”が用いられる条件が整っていると言えよう。以下、「視点明確化機能2」を担う視覚表現が含まれた複文において、“看”と“看见”の置き換えが可能であるという現象について論じる。

「視点明確化機能2」の構文において、視覚表現に後続する部分が明らかに主観性の強い評価や個人の判断を表す用例がある。

(41) “爹起初不肯，后来我 看见 爹 实在 很 累， 就 把他

私 見る 見える 父 本当にとっても 疲れる ~ならば~だ を 彼

拉 进 屋 去 了。”

(巴金《憩园》27)

引っ張る 入る 部屋 行く SF

(父は最初は入ろうとしなかったが、あとで父があまりにも疲れているのを見て、父を引っ張って部屋に入っていった。)

- (42) 直到一点, 我 看 贾玲 实在 困 了, 也 没 情绪 再 下,
私 見る 人名 本当に 眠くなる SF も ない 意欲 さらに (将棋を) 指す
就 让 她 走了。 (王朔《过把瘾就死》)

～ならば～だ させる 彼女 去る SF

(夜中 1 時になって、賈玲が本当に眠くなったのを見て、私も中国将棋を続ける気がしなくなったので、彼女を帰らせた。)

- (43) “我 看 他 做事 忠心, 也 不 忍心 多 责备 他。”

私 見る 彼 仕事をする 忠実だ も NEG 心を鬼にする 多い 責める 彼

(巴金《憩园》5)

(「彼はしっかりと仕事をするので、それ以上彼を責めることはできなかった。」)

- (44) ……那帮男的没一个凑趣的, 都挺冷淡, 我 看 没戏 就 自己

私 見る 見込みがない ～ならば～だ 自分

给 自己 找了个 台阶 下来 走开⁶。(王朔《玩的就是心跳》)

あげる 自分 探す ASP CL 逃げ道 下りる 来る 行く 開く

(あの男どもは面白いやつが一人もいなくて、みんな無愛想だった。何も見込みがないと思って、自分に逃げ道を作ってその場を後にした。)

視覚表現に後続する部分の主観性が高まれば、〈原因〉を表す機能も強まるということは既に前節で論じた。主観性が高いがゆえに、意思動詞“看”と結びつきやすくなると考えられる⁷。

(41)では“看见”が使われているが、(42)で“看”が使われているのと比べて、(41)のほ

⁶ 厳密にいうと、“我看没戏就自己给自己找了个台阶下来走开”は複文とは言えず、複文の意味を表す単文になる。いわゆる緊縮文である。しかし、“我看没戏, 就自己给自己找了个台阶下来走开”のように、読点を入れることも可能なので、ここではあえて例としてあげることにする。

⁷ “看”の主観性について、《现代汉语八百词》(呂叔湘編 1999)によれば、“看”には「思う」の意味があり、この“看”は陳述文なら主語が一人称に限り、疑問文なら主語が二人称に限る。同書には“我看不会下雨, 你看呢?”“我看, 老袁的建议很好”のような例が挙げられている。つまり、この“看”は一般に会話の場面において、主観的に発言するときや、相手の意見を聞くときに使われる。また、“我看”や“你看”は挿入語ともされている(劉月華ら 1996:371)。「視点明確化機能2」を担う“看”は二つの点において、挿入語に使われる“看”と異なる性質を見せている。まず、挿入語に用いる“看”には人称の制限があるが、複文で〈原因〉をマークする“看”は三人称でも使える。また、挿入語の場合は“我看, 老袁的建议很好”のように、間にポーズを入れることがしばしばあるが、複文の場合はポーズを置かない。

うが自主性が若干弱く感じられる。逆にいえば、“看”を使うと、視点人物の自主性が強調される。自主性の程度こそ変わるが、(41)の“看见”は“看”に置き換えることができる。同じように、(42)の“看”を“看见”に置き換えることも可能である。他の例を見てみると、(43)の“我看他做事忠心”は“我看见他做事忠心”に置き換えることも可能であるが、前者が判断をする意味を伴っているのに対し、後者は“他做事忠心”を事実として受け取るというニュアンスが強くなる。だが、(44)の“我看没戏就自己给自己找了个台阶下来走开”の場合、“没戏”は個人の判断であり、決して何かを視覚的に見たということではないので、“*我看见没戏……”と置き換えると不適切に感じられる。ここに(44)の主観性の強さがうかがわれる。

(41)から(44)までは主語が一人称の例文を挙げているが、三人称が主語の場合でも原因を表す“看”の使用が可能である。

(45) 这时候，学校当局们 看 上海的战事 既 打 得 很 好，
 学校 当局 たち 見る 上海 PART 戦況 のうえに～だ 打つ PART とても よい
 而 日本人 又 没 派 出 教育 负责人 来，都想马上开学，好使教员与
 かつ 日本人 また NEG 派遣する 出す 教育 責任者 来る
 学生们都不至于精神涣散。 (老舍《四世同堂》13)

(そのとき、学校当局は上海の戦況がよく、日本人も教育の責任者を派遣してきていないことから、教員や学生の気持ちがだらける前にすぐにでも学校を再開したいと思った。)

(46) 今天，看 瑞宣 的 神色 不 大 对，他 很 快 的 闭
 見る 人名 PART 表情 NEG あまり 正しい 彼 とても 早く PART 閉じる
 上 了 嘴。 (老舍《四世同堂》8)
 上がる ASP 口

(今日は、瑞宣の表情が普段とちょっと違うので、彼はすぐ口を閉じた。)

(47) 祖父说完了，看 我 还 是 不 很 高兴，他 又 赶 快 说……。
 見る 私 依然として NEG とても 嬉しい 彼 また 急いで 言う
 (萧红《呼兰河传》3)

(祖父は話し終わったあと、私がやはり嬉しそうではないと見て、また急いで口を開いた……。)

これらはいずれも三人称が主語である例文だが、“打得很好”、“不大对”、“不很高兴”などに見られる「評価」や「判断」の意味において、主語の主観性が意志動詞“看”によって

際立っている。

上述したように、因果関係で結ばれている複文において、“看”と“看见”の間で置き換えの許容度が高くなっている。ただし、“看”は視点人物の自主性に焦点を当て、“看见”は物事を事実として受け入れるというところに差異がある。このような“看”と“看见”の置き換え可能性については、「評価」や「判断」が後続する“看”のほか、「見える」ことが後続する“看”にも類似現象が見られる。単文なら必ず“看见”を使うところを、複文では“看”の使用が許容されるという例が存在する。(48)と(49)の用例を参照されたい。

(48) 她心情愉快地回到自己的房间，看 两个小孩正拿着笛子发呆，
見る 2 CL 子ども まさに 持つ ASP 笛 ぼんやりする
便 说：“再吹一遍，刚才那遍我没听清。” (王朔《无人喝彩》)
～ならば～だ 言う

(彼女が愉快的気持ちで自分の部屋に戻ると、ちょうど子供が二人笛を持ったままぼんやりしていたので、「もう一回吹いてちょうだい。さっきのはあまりはっきり聞こえなかったの」と言った。)

(48) *她看两个小孩正拿着笛子发呆。

(48”) 她看见两个小孩正拿着笛子发呆。

(49) 我 一 看 他 出 去，我 赶 快 的 登 着 箱 子 就
私 すると 見る 彼 出る 行く 私 急いで PART 踏みつける ASP 箱 ～ならば～だ
下 来 了。 (萧红《呼兰河传》6-11)
下りる 来る SF
(彼が出ていくのを見て、私は急いで箱を踏んで下りてきた。)

(49) *我看他出去了。

(49”) 我看见他出去了。

(48)と(49)からも明らかなように、単文なら“看见”など〈看见〉を使うべきところでも、視点人物の次の行動の〈契機〉や〈原因〉として表現する際には“看”の使用が可能である。“看”にも原因をマークする接続詞的な用法が生まれている。

注意すべきは、(48)と(49)で“看”に後続するのが文目的語だということである。あるヒト・モノを見かけたことがきっかけで次の行動に移す、というときのきっかけは〈契機〉に過ぎないが、視点人物の認識対象がヒト・モノの存在だけではなく、その動きや状態も

含めての状況である場合、視点人物の主観的な判断が入りやすく、〈契機〉より〈原因〉の読みが強くなる。このことは〈看见〉に後続する内容が〈原因〉を表す(27)～(31)において、後続部分がいずれも文目的語であることからもうかがえる。また、目的語が文である場合、(48)や(49)で示されているように、特にはっきりした主観的な「判断」や「評価」ではなくても、視点人物がその状況を認識したというだけで“看”の使用が可能になる。このように目的語が文であることは、視覚表現が〈原因〉をマークする接続詞的機能を獲得する要因であると言えよう。

“看”と“看见”が置き換えられる現象は費燕 2000 でも論じられている。そこでは、因果関係のある複文においては“看”と“看见”が置き換え可能になるが、“看”には「意識的」かつ「口語的」、 “看见”には「無意識的」かつ「文語的」という言外の意味が含まれると説明されている。基本的にこの説明は妥当であると思われる。ただし、因果複文の前件に使われる“看见”や“见”などの〈看见〉は完全に「無意識的」だとは言い切れないことに留意したい。視点人物が物事を見て、理解して、さらに相応しい行動を取るという主体的な部分は見落としてはならない。「視点明確化機能2」を担う〈看见〉は単に「見かけた」場合もあるが、「観察」や「判断」を含めている場合も少なくない。

また、「視点明確化機能2」を担う“看”と〈看见〉があらゆる場面で置き換えられるとは限らないことにも注目すべきである。例えば、(44)の“我看没戏就自己给自己找了个台阶下来走开”の“我看”は“我见”に書き換えることができない。なぜなら、“没戏”は極めて主観的な判断なので、自主性の高い“看”でしか相応しくない。逆に、下の(50)の文では“见”を“看”に置き換えると、自然な文ではなくなる。

(50) 老 花农 一 见 这 烟斗, 眼睛 像 一对 灰色 的 小
 年老いた 花農家 すると 見える これ パイプ 目 みたいだ 1 CL 灰色 PART 小さい
 灯泡 亮 了 起 来。 (冯骥才《雕花烟斗》)
 電球 光る ASP 起きる 来る
 (花農家の爺さんはそのパイプを見ると、灰色の一对の小さな電球のように目をきらきら輝かせた。)

(50)?老花农一看这烟斗, 眼睛像一对灰色的小灯泡亮了起来。

“老花农”は自主的にパイプを見たのではなく、見せてもらったことで、目をきらきら輝かせたのである。この状況に相応しいのは“见”である。また、(50)の“见”の目的語は名詞であることも注意されたい。

以上の論点を要約すると、〈契機〉、つまり「あるヒト・モノを目にして、それが動機と なって何かをする」場合、〈看見〉が最も相応しい。そして、強い主観性をそなえる〈原因〉 を表す場合、“看”が最も適切である。その中間にあたる状況において“看”と〈看見〉の 置き換えが可能になるのである。複文の前件に用いられ、「視覚明確化機能」を有する視覚 表現の用法にみる連続性以下の表 I のようにまとめられる。

【表 I】「視覚明確化機能 2」を有する視覚表現の用法

目的語の性質	体詞性目的語	文目的語	
使用可能な視覚表現	〈看見〉	〈看見〉と“看”	“看”
視覚表現の接続機能	〈契機〉	〈契機〉～〈原因〉	主観性の強い〈原因〉

「視点明確化機能 2」にみる“看”と〈看見〉の置き換え許容度はもともと〈看見〉を 使うべきだったところに意思動詞“看”を用いることができるようになったということか ら来ている。この現象からも「視点明確化機能 2」によって〈原因〉をマークする視覚表 現において主観性が増強されていることが確認できる。

2.3.3 英語との比較

他言語をみると、中国語のみならず多数の言語で視覚表現から〈原因〉マーカーへの拡 張が確認されている(Heine et al 1991:201)。その拡張のプロセスは一般的に「視覚感知 (visual perception)>了解(intellectual perception)>原因・理由(cause/reason)」であると まとめられている。中国語の視覚表現もこのプロセスを経て、〈原因〉をマークする機能を 獲得していると言えるが、この拡張は複文という構文においてだけ形成されているという 点は注目に値する。中国語では単文に用いられる〈看見〉は「了解」を表すことが少なく、 英語の“I see”で「なるほど」、「I see what you mean.”で「言いたいことがよく分かった」 のような“see”の用法は中国語の“看見”に直訳できない⁸。このことから複文という構造 が中国語の視覚表現の意味的・文法的拡張に重要な役割を果たしていることが分かる。

その一方で、中国語では〈原因〉をマークする視覚表現の適用範囲に制限がかかってい

⁸ ただし、コーパスでは抽象的な「見る」の用例が見られる。王朔《我是你爸爸》から例をあ げてみると、“马林生看到儿子眼中的不信任和怀疑。(馬林生は息子の目の中に潜んでいる不信や 疑いを見た。)”という文がある。ここで「了解」の意味が帯びているが、この場合でもやはり 視覚による何か感じ取ったという意味が強いので、完全に抽象的な「了解」になり切ってはい ないと思われる。

ることにも注意されたい。〈原因〉をマークしながらも、中国語の視覚表現は依然として強い動詞的性質を保っている。つまり、“因为”のような完全な〈原因〉を表す接続詞になり切っていないということである。具体的にいうと、視覚表現がマークする〈原因〉は視点人物の目で確認できるもの・こと、あるいは視点人物の判断に限られる。あくまでも「見える」や「そう見ている」といった動詞的性質が根強く残っているのである。英語の“seeing that/as”と比較すれば、中国語の視覚表現が〈原因〉をマークするときどのような制限がかかっているかが明らかである。

英語では“seeing that”は接続詞になっており、「理由」(cause)を表す(Quirk et al 1985)。“seeing that” (口語では“seeing as”とも言う)の節に入るものは、「見えるもの・こと」から視覚と関連性の薄い状況まで、連続性が見られる。以下の用例を参照されたい⁹。

(51) Seeing that I was covered with dust, she brought a bowl of hot water.

(私がほこりまみれになっているのを見て、彼女は洗面器一杯のお湯を持ってきてくれた。)

(52) Seeing as you're waiting to take off, I'm going to take you through a few of the safety drills I've picked up on my adventures.

(皆さまが離陸するのを待っておられるので、これから私が冒険の旅で学んできた安全を守るための決め事のいくつかをご紹介します。)

(53) I am just ringing to check everything's OK, seeing that it's Crime Prevention Week.

(今週は犯罪防止週間なので、何か問題がないか確認するためにベルを押しただけです。)

(51)の“seeing that”は中国語で“她看见我全身满是尘土，就捧了一盆热水过来。”と訳せることから、“看见”に対応していると思わせるが、(52)の“seeing that”は“看见”で対訳しにくい。乗客が飛行機の離陸を待っていることは視覚による判断が可能ではあるが、(52)の後件の部分、つまり決め事のいくつかを紹介することは意思表示の内容であり、既成事実ではない。これまでの中国語の用例で取り上げてきた〈原因〉を表す視覚表現は、小説の場合はある人物が過去のことについて語ったり、地の文に使われたりするため、後件はある事実を叙述するものである。また、(53)に至っては“seeing that”に後続する部分は視覚による感知でも判断でもないため、“看见”では対訳できない。ここは“因为(だから)”や“由于(なので)”を使うべきところである。また、“seeing that”は完全な接続形式なの

⁹ (51)と(53)は《Collins Cobuild 英語语法系列: 9.连词》(2000)の例文からの引用であり、(52)は2013年8月ニュージーランド航空の機内安全説明ビデオの一文である。

つまり、「は」と「が」の使い分けで複数の登場人物の関係を明確させることができると言えよう。「は」がついた登場人物の視点は複文全体にかかる。

その一方、中国語には「は」のような明白な標識が存在しないため、主題を表すときは他の手段を用いなければならない。通説では語順がその一つ的手段となる。「主語＋述語＋目的語」が中国語の基本の語順で、「目的語＋主語＋述語」の文の場合、その目的語が主題化されていると言える、ということである。しかし、主語が同時に主題である場合、語順という判断基準だけでは判別できない。文脈や発話状況などを考慮しなくてはならない。

本章の考察対象である中国語の複文において、複文全体の視点を維持するには、何が必要になるのだろうか。複数の人物が登場する場合、それぞれを主語の位置に立たせると、人物の関係が並列や対比になりがちで、単一人物の視点を際立てることが困難になる。このような構文の制限がかかっているため、中国語では視点人物以外の登場人物をなるべく主語に立たせないようにしている、と考えられる。以下、原田 1997b で取り上げた例文(55)と(56)を見てみよう。(55')と(56')はそれぞれ(55)及び(56)を書き換えた文であり、(55)と(55')、そして(56)と(56')の違いが以上の論点を裏付けていると言ってよい。

(55) “呔，你往哪儿逃！”家仆见老太婆在尸体之间连跌带爬地想夺路而逃，便上前挡住去路，开口骂道。 (芥川龍之介《羅生門》)

(「おのれ、どこへ行く。」下人は、老婆が死骸につまずきながら、あわてふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こうののしった。)

(55') 老太婆在尸体之间连跌带爬地想夺路而逃，家仆上前挡住去路，开口骂道“呔，你往哪儿逃！”。

(56) 我看见他用手揩眼睛，觉得心里不痛快，站起来，默默地在屋里走了几步。

(巴金《憩园》)

(彼が手で目をぬぐっているので、私は憂鬱になり、立ち上がって黙って部屋の中を歩いた。)

(56') 他用手揩眼睛，我觉得心里不痛快，站起来，默默地在屋里走了几步。

(55)では下人が複文全体の主語となっており、下人の視点が文の全体を貫いている。下人が主語でもあり、視点人物でもあると言えよう。老婆が逃げようとするのは下人の目を通して表現されている。それと対照的に(55')では老婆も下人も共に主語に立っているため、老婆の視点も下人の視点も全文にかかっていない。下人と老婆の動作をそれぞれ描写した文になっている。また、(56)と(56')の区別は、(56)なら「彼」が目や目をぬぐっていることが

「私」の憂鬱さの原因だと分かるが、(56')のような文は、前件と後件の関連性が明示されていないため、別々の事象だと捉えられがちである。(55)と(55')、そして(56)と(56')を比較して分かるのは、全文を一貫した視点から語るために、中国語では主語を一つに限る必要があるということであろう。この時の主語は視点人物でもある。単一の視点で貫くために、視覚表現を使い、他者が行った動作を視点人物が見たもの、感じ取ったものとして表現するわけである。この特徴は「視点明確化機能1」にも「視点明確化機能2」にも見られるものである。

本章の考察の結果、中国語の複文において視覚表現の「視点明確化機能」は以下のよう
にまとめることができる。

1. 「視点明確化機能1」: 複文において、“看”は「誰が見ているか」、また〈看見〉は「誰からそう見えているか」を明示するので、視点人物の確立や全文を一貫した視点で語る時に欠かせないものである。複文で視覚表現を用いることによって、他者の動作・行為は視点人物が感じ取ったこととして理解されるので、単一視点を維持することや「発見」を表すことができる。

2. 「視点明確化機能2」: 「見えたもの・ことによって、何か行動を取る」といった、〈契機〉と〈行動〉、関連性の強いときは〈原因〉と〈結果〉を表現している。視覚表現は〈契機〉や〈原因〉をマークする機能を担っている。〈原因〉をマークする視覚表現には、〈原因〉マーカーへの文法化という現象が見られるが、なお動詞的性質が強く残っているため、完全な〈原因〉接続詞にはなり切っていない。

中国語でしばしば視覚表現が用いられるということは、視覚表現が多様な機能を持つことを物語っている。そして、その機能的多様性は、意味的・文法的な拡張によってもたらされるものである。意味的拡張は単文において起こるものであるが、文法的拡張は複文の構造で用いられることによってはじめて発生するものだと言えよう。本稿で触れたように、視覚表現の意味的・文法的拡張は、その拡張の方向や文法化の程度差こそあれ、中国語のみならず、他言語でも既に確認されている現象である。

第3章 “只见”の「注視点明確化機能」

第2章では複文における視覚表現の「視点明確化機能」について考察を行ったが、続いて第3章ではそれと対照的とも言える、視覚表現の「注視点明確化機能」を考察する。前者は「見る主体」に焦点を置くのに対し、後者は「見える対象」を前景化する。ここではこの「注視点明確化機能」をもつ視覚表現として主に書き言葉に使われる“只见”を取り上げる¹。

3.1 一語化した“只见”

3.1.1 現代中国語における“只见”の用法

現代中国語小説のなかで用いられる“只见”は、字義通りに見れば“只看见”の意味に近いと思われるが、実際には、“只见”の文法的なふるまいは“只看见”と大きく異なる。例えば次の(1)の“只看见”を“只见”に置き換えた(1')は明らかに不適切な文になる。

- (1) 高身量，长脸，他本应当很有威严，可是他的眼睛太小，一笑便变成一条缝子，于是人们 只看见 他的高大的身躯，而觉不出什么特别可敬畏的地方来。 (老舍《四世同堂》)

人 たち だけ 見る 見える 彼 PART 高くて大きい PART 体格

(背が高くて長い顔をしている彼は、本当なら威厳がありそうだが、目が小さすぎ、笑うと線のようにになってしまうため、人々は彼の大柄な体が目に入るだけで、特に畏敬すべきところを感じとることはない。)

- (1') *……于是人们只见他的高大的身躯，而觉不出什么特别可敬畏的地方来。

(1')の“人们只见他的高大的身躯”の不適切さは、次の二点に原因があると考えられる。一つは、“只见”の前に“人们”という主語が用いられていることである。次の(2)では“一个高大白胖西服革履的男人，庄重地朝她一下下鼓掌”という事態を視覚感知したのは“肖科平”であることが文意から自明であるが、その“肖科平”を“只见”の前に置き換えた(2')は明らかに不自然である。

- (2) 肖科平 循声望去，只见一个高大白胖

人名 たどる 音 遠くを見る 行く だけ 見える 1 CL 高くて大きい 色白で太っている

¹ 本章の以下の議論は張佩茹 2006 をもとに、加筆、修正をおこなったものである。

西服 革履 的 男人， 庄重 地 朝 她 一 下 下 鼓 掌。
スーツ 革靴 PART 男 慎重である PART に向かって 彼女 1 CL CL 拍手する

(王朔《无人喝彩》)

(肖科平が音のする方をたどってみると、背が高く、体が大きく、色白で太ったスーツ姿に革靴の男が、彼女に向かってぱちぱちと拍手を送っていた。)

(2) *循声望去，肖科平只见一个高大白胖西服革履的男人，庄重地朝她一下下鼓掌²。

同じく視覚動詞である“看见”なら、(2)が問題なく成立することとは対照的である。

(2) 循声望去，肖科平看见一个高大白胖西服革履的男人，庄重地朝她一下下鼓掌。

ともに視覚表現であっても“只见”は、“看见”とは対照的に、現代中国語では殆どの場合、主語をとることができないのである。(1)の不適切さの原因の一つはまずここにある。

もう一つの原因は、(1)の“只见”が“他的高大的身躯”という体詞性成分を目的語に伴っている点にある。先の(2)の例でも、“男人”の後に句点を置き、文を終わらせると明らかに不自然になる。

(3) *肖科平循声望去，只见一个高大白胖西服革履的男人。

現代中国語で用いられる“只见”の多くは、先の(2)の“一个高大白胖西服革履的男人，庄重地朝她一下下鼓掌”のように、必ず文形式を伴わなければならない、体詞性成分のみを目的語に取る場合は成立しない³。(1)の例の不適切さのもう一つの原因はここにある。

以上観察した事実——つまり、“只见”は、「副詞+動詞」という構造でありながら、主語をとることもできず、体詞性の成分を目的語に伴うこともできないという事実——は、“只见”という形式が、すでに殆どと言ってよいほど述語動詞としての性質を失っているということを物語っている。さらに、“只见”の後には殆どの場合、文形式が続き、なおかつ、先の(2)の例のように、“只见”の直前の文形式と読点でつながるという事実——つまり“只见”が典型的に“S₁，只见 S₂”のかたちで用いられるという事実——を考え合わせると、そこには、複文に用いられる接続詞の性質に近いものを見て取ることができる。

² 単文の場合は董秀芳 2007:75 で取り上げられた“之洋只见教授白发萧萧，脸上皱纹甚深。(之洋には教授のまばらな白髪と顔にある深いしわだけが見えた。)”のように、まれに“只见”の前方に主語が現れる用例が見られる。しかし、(2)のような複文の用法では殆ど見られない。

³ 否定表現“不见”などと対をなす場合、“只见树木，不见森林 (木を見て森を見ず)”や“只见局部，不见全局 (部分を見て全体を見ず)”のように“只见”に体詞性成分が後続する用例がある。しかし、董秀芳 2007:74 にも指摘があるように、これは古い用法の名残りであるため、本稿では考察の対象外とする。

また、動詞表現から接続詞に近い性質を獲得している“只见”はすでに一語に融合している。文法化の前段階として、語彙化を経ていると考えられる。「副詞+動詞」の統語関係が依然として明確である“只看见”なら、以下の(4)と(5)のように“不”などを使って否定することができ、動詞“看见”にアスペクト助詞“了”を付加することも可能である。

- (4) 小王 在 桌上 不 只 看 见 了 一 封 信, 还 看 见
 王先生 に 机 上 NEG ただ 見る 見える ASP 1 CL 手紙 さらに 見る 見える
 了 一 本 书。
 ASP 1 CL 本

(王先生は机の上に手紙を一通見つけただけでなく、本も一冊見つけた。)

- (5) 小王 没有 看 见 她 的 人, 只 看 见 了 她 的 脚。
 王先生 NEG 見る 見える 彼女 PART 人 だけ 見る 見える ASP 彼女 PART 足
 (王先生は彼女の全身ではなく、彼女の足だけを目にした。)

それとは対照的に“只见”は否定形も成立せず、アスペクト助詞“了”を付加することもできない。“只见”はつねに“只见”の形でしか現れない。このことから、“只见”における“见”は動詞性が消失し、かつ“只见”は一語に融合していると言うことができる。

一語化した“只见”が複文において接続詞的な機能を獲得しているとするれば、その動詞から接続詞へという文法化のプロセスはどのような要因によって動機づけられたのだろうか。また、その“只见”の接続詞的機能とはどのようなものなのだろうか。本章では“只见”の文法化の要因および複文における“只见”の接続詞的機能について考察する。

3.1.2 先行研究の検討

“只见”の意味と機能に関してはすでいくつかの先行研究が見られるが、なお検討すべき問題が少なからず残されている。“只见”の統語的・意味的特徴を解明するために、先行研究では“只见”と同じく視覚感知を意味する動詞である“看见”を“只见”の比較対象として取り上げているが、両者間の差異はまだ十分に明らかにされていない。“只见”と“看见”の比較について、町田 2003:113 では、複文の後件に使われる場合、“见”（“看见”の“见”）にはまだ実質語としての意味が確認できる一方、“只见”の“见”は後件の最初の位置にしか現れず、かつ否定副詞が付加できないことから、既に実質語の意味を失い、文法化していると説明している。だが、意味機能における“只见”と“看见”の差異には触れていない。また、原田 1997a は“只见”の統語的特徴を詳しく考察しているが、

“看见”との相違点を論ずることが殆どなく、“看见”は「“看见”の節をはさんで、主語を共有する節が続くことができる」のに対して、“只见”は「“只见”の前の部分までの主語についての叙述は“只见”の前で途切れ、“只见”以下は新たな描写を引き入れる形になっている」と指摘するに留まっている（原田 1997a: 60-61）。この指摘は示唆に富むものではあるが、十分な記述であるとは言い難い。主語の共有が可能かどうか以外にも、“只见”と“看见”は本義の差異から様々な相違点を備えている、と考えられる。

そこで、本稿は先行研究の成果を踏まえながら、〈看见〉（“看到”“见”をも含める言い方）とのより全面的な比較を手がかりにして、複文における“只见”の機能を明らかにし、その上で、視覚感知に関する動詞表現の文法化の問題について考察を行いたい。詳しくは後述に譲るが、複文において“只见”は接続機能を果たしていると考えられる。注目に値するのは、第2章で考察した〈看见〉にも本義の「見える」から拡張した接続詞的用法があるという事実である。つまり、複文においては“只见”にも〈看见〉にも、動詞性が弱まり接続詞的性質が強まった用法が確認できるということである。接続の意味機能の性質こそ異なるが、“只见”の“见”も〈看见〉もともに視覚表現であり、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚のうち、文法的に拡張している動詞表現が視覚動詞に集中しているという現象はきわめて興味深い⁴。

3.2 〈看见〉と“只见”の比較

前述したように、複文の後件に使われる“只见”の統語的・意味的特徴を明らかにするためには、〈看见〉との比較が重要な手がかりになる。以下、第2章の考察でまとめた複文における〈看见〉の意味機能や主な働き、そして〈看见〉の目的語にあたる事柄の主観性などを軸に“只见”との違いを分析する。

3.2.1 核心的意味機能：視点明確化機能 vs. 注視点明確化機能

第2章では、複文における〈看见〉の機能は「視点明確化機能」とであると特徴付けた。「視点」とは「どこから見ているか」の「どこ」を意味する。これとは異なり、“只见”の機能は「注視点明確化機能」にあると考えられる。「注視点」とは「どこを見ているのか」の「どこ」を指すものである。以下、実際の用例を通じて、〈看见〉と“只见”の差異を比較する。

⁴ 聴覚の表現である“只听”にも“只见”のような接続的性質が見られるが、聴覚表現の適用範囲は視覚表現ほど広範的ではない。

まず、以下の二つの用例で〈看见〉の「視点明確化機能」をもう一度提示しておきたい（(6)は第2章の用例(5)を再掲したものである）。

(6) 编辑部主任兼代经理周××忽然在主任室里抬起头来，朝外面看，看见了他，也不说什么话，却露出一一种轻视的表情。

(7) 离 门口 最近 的 钱康 把 门 打 开，一 对 胖 胖
 離れる 入り口 最も 近い PART 人名 を ドア 開ける 開く 1 ペア 太っている 太っている
 的 夫妇 挽 着手 走 进 来。他们进了门就往屋里走…。(王朔《无人喝彩》)
 PART 夫婦 つなぐ ASP 手 歩く 入る 来る
 (ドアから一番近くにいた錢康がドアを開けると、太った夫婦が手を繋ぎながら入ってきた。彼らは部屋に入ると奥へと歩いていった……。)

(7) 离门口最近的钱康 一 把 门 打 开，就 看 见 一 对 胖
 すると を ドア 開ける 開く すぐ 見る 見える 1 ペア 太っている
 胖 的 夫妇 站 在 门 外。
 太っている PART 夫婦 立つ で ドア 外
 (ドアから一番近くにいた錢康がドアを開けると、太った夫婦がドアの外で立っているのが 目に入った。)

(6)の“看见”は“他”を目的語に取り、「彼を見た」という行為が、周某による視覚感知であることを明示している。“看见”を用いることによって「誰から見えているか」の「誰」、つまり「視点」が明確にされている。三人称の小説では、この種の視覚動詞を欠くと、誰に視点があるかが明確ではなくなる。例えば、(7)では、“一对胖胖的夫妇挽着手走进来”という事象が“钱康”による視覚感知として表現されているのではなく、異なる登場人物の行動が単に時間軸に沿って表現されているに過ぎない。(7)のように“看见”を用いて書き換えると、“一对”以下の事態は“钱康”によって感知されたものとなり、視点が明示的になる⁵。「視点明確化機能」とは〈看见〉のこの種の機能を指すものである。

〈看见〉とは対照的に、“只见”の場合は「誰から見えているか」よりも「何が見えてい

⁵ (7)では異なる登場人物の動作を時間順に並べる文で、物語を進行させるために両方に動きが必要になる。しかし、(7)のように初めて登場する「太った夫婦」の存在が錢康による視覚感知であることを言語化する際には、まずドアを開けた瞬間に錢康の目に映った「ある場所における太った夫婦の存在」を述べるほうが自然である。そのため、(7)は(7)の後件に“看见”を入れるだけではなく、見える人物の動きについての描写も書き換える必要がある。なお、視点人物が不定の人物を見かける場合、〈看见〉の後続部分に場所表現が伴いやすくなる傾向があることは、第2章の(13)～(16)で確認できる。

るか」のほうに重点が置かれる。「ただ～だけが見える」という本義を反映して“只见”は注視点を明確にする機能を担うことになる。そして、「見える対象」が前景化するにつれて、「見る主体」、つまり「視点」は背景化する。背景化の結果、「見る主体」の存在が薄れてしまう。“只见”のこのような機能を、本稿は「注視点明確化機能」と呼ぶ。“只见”の「注視点明確化機能」は、例えば次の(8)のようなコンテキストからも明らかに見て取れる。

(8) 他急忙跑到窗前， 掀 开 窗帘 往 楼下 看 去， 只 见
めくり上げる 開く カーテン に向かって 階下 見る 行く ただ 見える
一 个 围 着 头巾、穿 浅 绿色 棉 外衣 的 女孩子 慌慌张张 地
1 CL 卷く ASP スカーフ 着る 浅い 緑色 綿 上着 PART 女の子 あたふたと PART
跑 出 大门 去。 (冯骥才《铺花的歧路》)
走る 出る 表門 行く

(彼が急いで窓のところに走り寄り、カーテンをめくり上げて下を見ると、スカーフを巻いて、浅い緑色の綿の上着を着た女の子が慌しく表門を走って出ていった。)

この複文においては、“只见”の前に「彼が見ようとする」動作があるため、“只见”に後続する事象を視覚感知する主体が「彼」であることは自明である。そう考えると、“只见”の主語は“他”であるはずなのだが、実際には前述したように、“只见”の直前に主語を置くことは許されず、例(8)の場合では“他”を加えることが文法的に容認されない。“只见”が主語を取ることができない以上、例(8)の“见”が“他”による視覚感知であるかどうかは、言語形式上は確認できない。

(8)のような“只见”の用法について、董秀芳 2007:75 では以下のように分析している。

(9) ……; 有时这个人物(按: 可以实施“看”这一动作的人物)与“只见”处于不同的小句中, “只见”所在的小句承前省略了主语, 但其主语可以补出, 补出之后即与这个人物同指⁶。动词“只见”一般在句中充当谓语, 大致可以用“看见”或“发现”替代, 只是比“看见”等词更具有现场感和动态感。

(「見る」という動作を実行できる人物は“只见”と異なる節に用いられるときもある。その場合、“只见”を含む節は前方の節を受けて主語を省略しているが、主語は補うことが可能であり、補ったあとはその人物と同一の人物を指すことになる。動詞“只见”は文において一般的に述語として使われ、おおよそ“看见(目

⁶ 括弧内の説明は筆者による。

に入る)”や“发现(気づく)”で置き換えることができる。ただし、“看见”などに比べてより臨場感にあふれた、いきいきとした表現になる。)

(9)の内容から分かるように、董秀芳 2007 では“S₁, 只见 S₂”において、S₂が S₁に既出の視点人物による視覚感知の内容である場合、“只见”は動詞であり、かつ“只见”の前に S₁に既出した人物を主語として補うことができると分析している⁷。さらに、この用法での“只见”の語彙化については以下のように述べている(董秀芳 2007:75)。

(10) 在作为动词的“只见”中，“只”原有的意义已淡化，并接近于消失，“见”的意义则保留和凸显。

(動詞としての“只见”においては“只”本来の意味が消えていると言ってもいいほど弱くなっており、一方で“见”は意味を保っており、かつ際立っている。)

S₁に既出した人物を視点人物として、見るという動作や場所の転換などの結果を“只见 S₂”で述べる、ということは、“只见 S₂”における“只见”は確かに“看见(目に入る、見える)”と意味的に類似していることになる。しかしながら、もし“只见”が本当に意味的に“看见”とほぼ変わらず、臨場感の差だけが両者の唯一の違いだとするならば、“只见”がさらに機能拡張し、S₁に具体的な視点人物がない場面にも使われるようになる、という事実について説明することが難しくなる。本稿は、(8)のように S₁に視点人物の存在が確認できる“S₁, 只见 S₂”においても、“只见”の動詞性がすでに失われていると考える。“只见”が一語化した際に“只”の意味が弱くなるのではなく、“只”の意味の影響で“见”本来の「誰から何が見えている」の「誰」、つまり視点人物の存在が重要性を失うこととなり、“只见”の動詞性の喪失が促されるようになるのだと考えられる。この分析の妥当性について、以下の二点により立証する。

まず一つ目に、CCL コーパスで“只见”の用例を検索した結果、最初の 1000 例のうち、“S₁, 只见 S₂”構造をとり、かつ S₂が S₁に既出した人物による視覚感知である用例が 330 例検出された⁸。しかし、このうち、“只见”の前に主語が使われる用例は一例もない。もし董秀芳 2007:75 で説明したように、“只见”は“看见”や“发现”とほぼ同じ意味で使われ、かつ“只见”の前に主語を補うことができるのであれば、(11)の“看见”と“发现”

⁷ 実際は(8)のように、“只见”の前に S₁の主語が複数の節をまたがっていることもある。

⁸ CCL コーパスとは北京大学中国言語学研究センターがウェブ上に公開しているコーパスを指す。古代中国語と現代中国語のデータ両方収集されており、現代中国語に関しては、データ数は 3 億字強である。以降、CCL コーパスより用例を引用する際は、出典は“CCL 语料庫”と記す。

の前に主語が現れるのと同様に、“只见”の前に主語が使われるものがあったとしてもよさそうだが、実際の用例ではそうしたものは見当たらない。

(11) 他 四下里 张望，似乎在寻找自己是否在梦中的依据，他 仍然 发现 那
彼 周り 見回す 彼 やはり 見つける それ

座 新 筑 的 坟 突兀 在 蓝盈盈 的 月光 下， 闪动
CL 新しい 作る PART 墓 そびえ立っている に 青々と輝く PART 月光 下 きらめく
着 凄迷 的 光。当他决定离开这里时，仍然是依恋地回 头
ASP ぼんやりとして寂しい PART 光 回す 頭
望 了 一 眼，他 的确 又 看 见 了 那 个 白色 的 影子
眺める ASP 1 目 彼 疑いない また 見る 見える ASP それ CL 白色 PART 影
在 新 坟 旁边 闪动 了 几 下，然后 又 隐 去 了。
で 新しい 墓 そば きらめく ASP いくつ 回 それから また 隠れる 行く SF

(CCL 语料庫)

(自分が夢の中にいるのかどうかの証拠を探しているかのように、彼があたりを見回すと、やはりあの新しく作られたお墓が青々と輝く月の光の下にそびえ立ち、ぼんやりとした寂しそうな光が煌めいていた。そこを離れると決めた後、やはりあきらめきれずに振り返って見たところ、彼はたしかにまたその白い影が新しいお墓のそばで数回きらめいては消えるのを目にした。)

二つ目に、董秀芳 2007 で取り上げられた用例のうち、 S_1 の主語が視点人物であるものは、確かに“只见”を“看见”や“发现”で置き換えられる場合がある。例えば、(12)と(12')はそうである(囲み部分は視点人物である)。しかしながら、CCL コーパスで検出された“ S_1 , 只见 S_2 ”の用例では、(13)のように S_2 を見た人物が S_1 の主語ではないものもある。(13)において、きれいな電話や置時計を目にしたのは、それらを見せてもらった被使役者“我们”であり、 S_1 の主語であり使役者でもある“他”ではない。この場合、(13')で示されているように、単純に“只见”を“看见”や“发现”に置き換えるだけでは誰にそう見えているかが不明確になるため、意味が取りにくい。適格な文にするためには、“看见”や“发现”の前に視点人物の“我们”を明示する必要がある。

- (12) 女 工程师 接 过 书 一 看, 只 见 书 的 边 缘 画 满
 女 エンジニア 受ける 過ぎる 本 すると 見る ただ 見える 本 PART へり 書く 満ちる
 了 各 种 记号。
 PART 各 種 記号
 (女性のエンジニアが本を受け取って見ると、本のふちに様々な記号がいっぱい書いてあ
 った。)
- (12') 女工程师接过书一看, 看见/发现 书的边缘画满了各种记号。
 (女性のエンジニアが本を受け取って見ると、本のふちに様々な記号がいっぱい書いてあ
 るのが目に入った/に気が付いた。)
- (13) 他 先 让 我们 看 展 室 中 的 展 品, 只 见 电 话、座 钟、
 彼 先に させる 私たち 見る 展示室 中 PART 展示品 ただ 見える 電話 置時計
 办公用具、鸟 兽 等 数 百 件 样 品, 样 样 新 颖 精 美。
 事務用品 鳥 獣 など 数 百 CL サンプル CL CL ユニークである 精巧で美しい
 (彼は先に私たちに展示室内の展示品を見せてくれたが、電話、置時計、事務用品、鳥や獣
 など数百にのぼるサンプルはみな目新しくて精巧で美しかった。)
- (13') 他先让我们看展室中的展品, *看见/*发现/我们看见/我们发现电话、座钟、办公
 用具、鸟兽等数百件样品, 样样新颖精美。

以上の議論から分かるように、董秀芳 2007 の分析は“只见”の用法を十分に説明しき
 れていない。実際の用例では、 S_1 に視点人物の存在が確認できる場合でも、“只见 S_2 ”の
 頭に主語が現れることはない。董秀芳 2007 は「主語を補うことができる」という主張は、
 結局のところ、意味的に誰に S_2 が見えているのかが明確なため、主語を補えそうに見える
 ということにすぎず、実際に主語が補われる用例は一つもないのである。また、 S_1 に視点
 人物が存在しても“ S_1 , 只见 S_2 ”において、“只见”はつねに“看见”や“发现”に置き
 換えられるわけではないという言語事実も、董秀芳 2007 の分析では説明できない。

本稿では“只见”の前に主語が現れないという制約や、(13)と(13')にみる“只见”と“看
 见”の用法の違いは、まさに“只见”の「注視点明確化機能」に関連していると考える。
 まず、前者については“只见”はもっぱら「見える対象」にスポットライトを当てている
 ため、「見る主体」の存在が薄れ、ゆえに“只见”の前方に主語が現れない。後者に関して
 は、“看见”が使われる場合、「見る主体」を特定する必要があるため、その解釈が一義的
 に決まらない場合は、(13')のように“我们”などを明示しなくてはならない。一方、「見

る主体」への関心が薄れている“只见”では、誰にそう見えているかは特定しなくてもよい、ということが考えられる。

前掲の用例で〈看见〉と“只见”を比較すると、〈看见〉は(6)を“朝外面一看，周××看见了”に言い換えられるように、「見る主体」と「見える対象」の両方ともが言語形式上に現れうるのに対して、“只见”の場合は(8)のように、“只见”の直前に主語を置けないため、“只见一个……女孩子慌慌张张地跑出大门去”のように「見える対象」しか言語化されない。そもそも、視覚感知の動詞表現には「見る主体」と「見える対象」が両方とも存在することがむしろデフォルトであるはずである（例えば「誰が何を見る」、「誰に何が見える」など）。“只见”のこの変則的な統語的制限は何を意味するのだろうか。

前述したように、本稿ではこの現象は、視覚動詞としての「動詞性の喪失」によって説明が可能になると考える。字義通りの本来の意味からすれば、もともと「見る主体」が存在したはずの“只见”は「注視点明確化機能」を獲得することによって、「見える対象」の方に焦点が移り、「見る主体」への関心が薄れてしまっている、と考えられる。

“只见”における“見”の元来の動詞性が消失しているとみるもう一つの根拠は、“只见”に後続する「見える対象」がつねに文形式でなくてはならないということである。「見える」を意味するのであれば、“只见”の後に人やものを表す体詞性成分が続いてもよいはずである。“只见”には文形式しか後続できないというこの制限は、“只见”がすでに「見える」という意味から逸脱してしまっていることを示唆する。後続形式が文形式であれば、それは単独でも一つの文をなすことが可能である。先の例(8)から“只见”を削除した(8')は、確かに二つの文の連続として成立する。だとすれば、“只见”は文と文の繋ぎ合わせの機能を果たしていると見てよい。

(8') 他急忙跑到窗前，掀开窗帘往楼下看去。一个围着头巾、穿浅绿色棉外衣的女孩子正慌慌张张地跑出大门去⁹。

現実のテキストでは、“只见”が典型的に“S₁, 只见 S₂”のかたちで用いられ、“只见”の直前の文形式とは読点でつながれるという事実を考え合わせれば、“只见”の接続詞的な性質はいっそう明確になる。

この点においても、“只见”と〈看见〉との相違は明らかである。動詞である〈看见〉は体詞性成分も文形式もどちらも後続することができる。言い換えれば、〈看见〉なら、後に

⁹ “只见”を取り除いた場合、“一个女孩子”の文に“正（まさに、ちょうど）”を加えたほうが、前の文との時間性が明瞭になり、結束性がより強くなる。この点についての議論は後述に譲る。

続く部分が「もの」であっても「こと」であってもよいのに対して、“只见”に後続できるのは、「こと」だけなのである。

以上見てきたように、“只见”は、1)前には主語を置くことができない、2)アスペクト助詞“了”や否定副詞を付加することができない、3)後続部分は文形式に限られる、4)典型的に“S₁, 只见 S₂”のかたちで、読点で結ばれる二つの文形式の間に用いられる。これらの構文的特徴は、“只见”が接続詞的性質を獲得していることを十分にうかがわせる。本稿では、“只见”に見られるこのような接続詞的用法への文法化現象は、“只见”の核心的意味機能である「注視点明確化機能」に動機づけられたものであると考える。

3.2.2 複文における役割：単一視点の維持 vs. 新たな事態の割り込み

3.2.1では〈看见〉が「視点明確化機能」をもち、「誰から見えているか」に重点が置かれるのに対して、“只见”は「注視点明確化機能」をもち、「何が見えているか」に注意を向ける、ということを明らかにした。この核心的意味機能における相違点に起因して、〈看见〉と“只见”は複文においてそれぞれ異なる役割を果たしている。

第2章でまとめているように、複文における〈看见〉の基本的役割は「単一視点の維持」であると言ってよい。前掲した(6)と(7)で説明すると、(7)では複数の登場人物の行動を単に相対的な時間関係で述べているに過ぎないのに対し、(6)では周某を視点人物として立て、周某が「彼を見た」ことを明示している。中国語の複文において視覚表現が多用されることについて、以下のようにその特徴を説明することができる。

- (14) 日本語などとは異なり、中国語は、とりわけ三人称の文体において、特定の視点を表すために、“看见”などの視覚動詞を使って視点人物を主語に立て、他者が行った動作行為を視点人物が見たものや感じ取ったものとして表現する。

複文の後件に使われる〈看见〉にはこのように、視点を特定し、単一視点を維持する働きが認められる。

一方、“只见”は「視点」よりも「注視点」のほうに焦点を当てるため、複文においては、“只见”に後続する事象を新たな「注視点」として割り込ませ、それを焦点化するという役割を担う。“只见”を使うと、たとえ先の(8)のように視覚感知の主体が文脈から明らかな場合であっても、その主体の存在は背景化され、“只见”に続く事象の方が注目の対象となる。“只见”のこのような、新たな事態を割り込ませるといった役割は、“只见”の直前の文形式（以下「前件」と称する）が表す事態のタイプからも明らかになる。以下では〈看

見)の前件との比較を含めて、“只见”の前件の特徴に着目する。

“只见”の前件と、〈看见〉の前件との間には、二つの重要な共通点が見出せる。まず、両者の前件とも、前掲の(6)や(8)の用例に代表されるように、しばしば“看”や“望”などの「視覚動作」動詞が使われる。“只见”と〈看见〉はもともと視覚感知に関する表現であるから、このように、前件で「見る動作」が示され、後件にその結果としての「見える対象」が続くことは、特に不思議なことではない。動補構造における「動」と「補」の関係を思わせるものである。

“只见”と〈看见〉の前件に共通して観察されるもう一つの典型的な特徴は、場所や視界の転換である。例えば次の(15)や(16)のような例がある。

(15) 一个星期六，我在挖蚯蚓时没注意，误 入 了 爸 爸 那 只 德 国 狼 狗

誤って 入る ASP 父 それ CL ドイツ シェパード

Jackie 的 领 地，只 见 Jackie 冲 过 来， 对 我 大

名前 PART 縄張り ただ 見える 名前 突進する 通る 来る に向かって 私 ひどく

吼 大 叫， 还 凶 恶 地 龇 出 牙 齿。(严君玲《落叶归根》)

ほえる ひどく 叫ぶ さらに 不気味だ PART むき出す 出る 牙

(ある日の土曜日、ミミズを掘り出していたとき気づかずに父親のジャーマンシェパードの Jackie の縄張りに入ってしまったところ、Jackie が突進してきて、私に向かって大声で吠え、恐ろしい形相で鋭い歯をむき出しにした。)

(16) 他侧过脸去，看见一团黑影蹲在那儿。(第2章の用例(15)の再掲)

新しい場所に移る、もしくは頭を上げる動作や振り返る動作といった身体動作を行うことによってそれまで見えなかったものやことが目に入るという事態も珍しいことではない。

(6)と(8)の視覚動作を「意識的に見ること」と特徴づけることができるならば、(15)と(16)の「場所や視界の転換」は「意識せずに物事が目に映るきっかけ」とでも言えるだろう。

このように、“只见”の前件には、〈看见〉の前件と同様に、しばしば視覚感知を誘発する動作行為の表現が用いられる。“只见”も〈看见〉もともに視覚感知を意味する表現であることを考えれば、それは至極当然なことである。しかし、ここで注目すべきことは、“只见”を使うときと〈看见〉を使うときとは、表現の重点に明らかな相違があるという事実である。すなわち、視覚感知を誘発する前件の後に“只见”が用いられれば、その後には「注視点」に重点を置く後続文脈が続くものに対して、〈看见〉ならその後には「視点(人物)」に重点を置く後続文脈が続く傾向がある、ということである。以下の用例を見られた

い。

(17) 吴仲义 转身 往回 走, 只见 赵昌 迎面

人名 方向を変える 体 に向かって 帰る 歩く ただ 見える 人名 真正面から

走来。赵昌 胖胖 的脸上 带着 笑……

歩く 来る 人名 太っている 太っている PART 顔 上 帯びる ASP 笑い

(冯骥才《啊!》)

(吴仲义が向きを変えて引き返すと、赵昌が前方からやってきた。赵昌のまるまるとした顔に笑みが浮かび……)

(18) 她一路喘着气, 看见他站在那儿, 向他打个招呼, 就一直走到她丈夫的身边。

(第2章の用例(25)の再掲)

“只见”が用いられている(17)では、“只见”以降はもっぱら“赵昌”(囲み部分)に関する描写であることから分かるように、「見える対象」が焦点となり、視点人物は背景化している。それに対して、“看见”が用いられている(18)では、「誰が見たか」の「誰」、すなわち視点人物に重点が置かれている。そこでは、「彼女」(囲み部分)が何を見(“看见他站在那儿”)、そして、見えたもの・ことを契機として、その「彼女」が次に何をしたか(“向他打个招呼”)、という点に関心が寄せられている。つまり、つねに視点人物に注目が集められている。このように、“只见”と(看见)のどちらを選択するかは、表現の重点を何に置くか、言い換えれば、「何に焦点を当てるか」という書き手の表現意図によって決定される。

なぜ、“只见”が複文において新たな事態を割り込ませる役割を果たすのかということの理由としては、一つには、“只见”には、新しく登場する注視点に脚光を浴びせる「注視点明確化機能」が核心的意味機能として備わっているためと考えられる。そして、もう一つの理由として、“只见”の前件には、次の(19)と(20)のように、典型的に「何かをしようとするとき」、「まさに何かをしているとき」、「何かをし終わったばかりのとき」といった「動作行為による時間表現」が用いられるという言語事実が挙げられる¹⁰。

¹⁰ 原田 1997a:53-55 によれば、複文において“只见”の前に現れる部分、つまり前件は概ね「視覚に関する表現」、「場所の移動を表す表現」、そして「ある動作や行為が持続していることや進行中であることを表す表現」に分類することができるという。これは言語事実を的確に把握した分析である。しかしながら、「動作行為の持続や進行中であることを表す表現」という指摘については問題がある。なぜならば、前件には、ある行為を「しようとするところ」「し終わったところ」という表現が使われることがあるにもかかわらず、「持続や進行中」という説明には明らかにそのことが反映されていないからである。「持続や進行中」というのは、本稿で言う「動

- (19) 杨主任上前方要解释画面的内容, 只见赵雄露
楊主任進む前まさにしたい 説明する画面 PART 内容 ただ見える 人名 現す
出 一 丝 冷 笑, 转 过 头 问: “沈卓石来了吗?”
出る 1 少量 冷たい 笑い 方向を変える 過ぎる 頭 聞く

(冯骥才《斗寒图》)

(楊主任が前に進んで今まさに画面の内容を説明しようとしたところ、趙雄がせせら笑いながら、振り向いて「沈卓石は来ていますか。」と聞いた。)

- (20) 我话 没说 完, 只见 她 弯 腰 拎 起
私 話 NEG 言う 終わる ただ 見える 彼女 曲げる 腰 引っ提げる 起きる
高跟鞋 离 弦 之 箭 似的 冲 向 门口 开
ハイヒール 離れる つる PART 矢 のようだ 突進する に向かう 入り口 開ける
了 门 锁 一 闪 跑 了。 (王朔《过把瘾就死》)
ASP ドア 鍵 さっと よける 逃げる SF

(私の話が終わらないうちに、彼女は腰をかがめてハイヒールを手に取り、弓を離れた矢の如くドアに向かってダッシュし、鍵を開けてさっと走って逃げてしまった。)

仮に“只見”の前件の主語である人物を登場人物 A とし、“只见”に後続する文形式の主語である人物を登場人物 B とするならば、“只见”を挟む登場人物 A と B の動作行為の関係は、[<A が何かをするまさに直前/最中/直後のその時・その場に>+ “只见” +<B が何かをする>] というようなものだと言える。登場人物 B の動作行為が登場人物 A による視覚感知であることはあくまでも含意の域にあり、最も注目されるべき焦点は、登場人物 A の動作行為の直前/最中/直後に、登場人物 B による動作行為がその場に現出する、というところにある。本稿が、“只见”は「新たな事態を割り込ませる」役割を担うと主張する根拠はまさにここにある。

このように、前件において登場人物 A の「動作行為による時間表現」が用いられることが典型的であるという現象は、“只见”のみに観察される現象であって、“看见”の前件には特にそのような特徴は見られない。先の(19)と(20)の“只见”を“看见”に置き換えた(19)と(20')は不自然に感じられる。

- (19') 杨主任上前方要解释画面的内容, *看见赵雄露出一丝冷笑……。

作行為による時間表現」のうちの一つにすぎないと考えられる。

(20) 我话没说完, *看见她弯腰拎起高跟鞋离弦之箭似的冲向门口开了门锁一闪跑了。

複文における〈看见〉には、前件によって設定された時間に新たな事象を割り込ませ、その事象の存在に注意を向けさせる、というような役割は見出せない。ここにも、〈看见〉と一線を画す“只见”の特徴が浮き彫りにされる。

3.2.3 主観性について：客観～主観 vs.客観

〈看见〉と“只见”には、もう一つ重要な相違点がある。〈看见〉の後には客観的な視覚感知の対象を続けることもできれば、「見る主体」の判断が介入する主観的な知覚内容を続けることもできる。前掲の(6)の“看见了”や(16)の“看见一团黑影蹲在那儿”や(18)の“看见他站在那儿”は、〈看见〉の後に客観的な視覚感知の対象が続く例であり、下の(21)は、そこに“其实(実は)”といった表現が含まれていることから明らかなように、「見る主体」の主観的な判断が介入する知覚内容が後に続く例である。一方、“只见”は、基本的に客観的な視覚感知の対象を表す文形式しか伴わないため、(21)の“见”を“只见”に置き換えた(21')は明らかに非文である。

(21) 她不住拿眼上上下下打量韩丽婷, 见她其实是
 彼女 NEG 止まる 用いる 目 上上下下 観察する 人名 見える 彼女 実は である
 姿色 平常 的 女人, 更加 亲切 了。 (王朔《无人喝彩》)
 容貌 ありふれている PART 女性 ますます 親切 SF

(彼女はしきりにじろじろと韓麗婷を観察し、実は容貌が平凡な女性であると見て、いっそう親しみをおぼえた。)

(21') 她不住拿眼上上下下打量韩丽婷, *只见她其实是姿色平常的女人, 更加亲切了。

なお、検索数は多くないが、前件において視点人物の存在が確認できる場合、“只见”の後続部分にその視点人物の認識に関わる副詞“果然(案の定)”が使われることがある。以下の(22)はその一例である。

(22) 杨过……屏住呼吸, 凑眼到窗缝中张望, 只见黄蓉手中
 近づく 目 着く 窓 すきま 中 覗く ただ 見える 人名 手中
果然 抱 著 一 个 婴儿。 (CCL 语料庫)

案の定 抱く ASP 1 CL 赤ちゃん

(楊過…息を殺しながら窓の隙間に目を近づけて中を覗いてみると、案の定、黄蓉が赤ちゃ

んを抱いている。)

部屋の中から聞こえてきた赤ちゃんの泣き声にもしやと思った楊過は、中を覗いてみると、予想通り黄蓉が赤ちゃんを抱いていた、という場面である。このような視点人物の認識が関わる「見える対象」は、「見る主体」による判断が入っているため、完全に客観的な視覚感知とはいえないが、(22)の“果然”で表現されている判断は(21)の“其实”ほど主観的ではない、ということが言える。“果然”とは、視点人物があらかじめ持っている予測を、実際の情景と照合してみて一致していたときに使われる副詞である。つまり、「予測していたこと」と「目に映っている情景」の照合であり、その場で新たな認識や判断を行っているわけではない。一方、“其实”が使われる場合は、視点人物による新たな判断が介入しているがゆえに、主観的な意見が入りやすい。

〈看见〉の感知内容に「見る主体」の主観的な判断が介入してもよいということには、やはり〈看见〉の「視点明確化機能」が深く関わっていると考えられる。「誰から見えているか」の「誰」の方に焦点が置かれる〈看见〉では、主観性の受け皿とも言うべき主体の存在が用意されているといえる。それに対して、「注視点明確化機能」を担う“只见”では、もっぱら「実際に目に見える対象」だけに焦点が置かれ、見る主体の方は影を潜めているため、主観性を盛り込みにくい。原田 1997a:57は“只见”の後続部分を「ある現象をそのまま描写する形」だと説明している。視点人物すなわち「見る主体」を背景化し、ありのままに「見える対象」そのものを焦点化しようとする“只见”の後続部分には強い主観的判断は介入しようがないというわけである。

3.2.4 接続詞的な用法にみる視覚以外の感覚への拡張

以上、3.2.1から3.2.3までは〈看见〉と“只见”の相違点について考察してきたが、3.2.4では、両者に共通する、ある興味深い現象について考える。その現象とは、〈看见〉と“只见”が接続詞的な用法へ拡張するにつれて、視覚以外の感覚による感知内容も目的語として取れるようになるというものである。董秀芳 2007:76で指摘されているように、機能語に文法化した“只见”の後続部分には視覚感知以外のものが現れることがある。例えば、以下の(23)において、「ゆっくりと話す」という行為は通常、聴覚による感知になるが、その前に“只见”が使われている。この場合の“只见”は文字通りの「ただ～が見える」という動詞の用法ではなく、新規導入される事柄に読み手の注意を向けさせるための

マーカである分析されている¹¹。なお、(23)の“缓缓地(ゆっくりと)”は話し方だけではなく、動きに関する描写にも使用されるが、より聴覚に訴えている擬声語が使われる用例も見つかっている。

(23) 陈信心里更是紧张，一口大气也不敢吐，只 见 方青芬 缓 缓 地 说：

ただ 見える 人名 遅い 遅い PART 言う

“……”。 (董秀芳 2007:76 より引用、下線は筆者による)

(陳信は内心いっそう緊張し、大きく息を吐くこともできなくなっていたところ、方青芬が ゆっくりと言った：「…」。)

(24) 当钟副所长一行来到大厦旁时，看到从大厦大门里正走出两名男青年和一名老妇女，都是越南人。这老妇女正是黎氏莲，只 见 他们 叽叽喳喳 地 说

ただ 見える 彼ら ぺちやくちや PART 言う

着 什么。 (CCL 语料庫)

ASP 何

(鍾副所長一行がビルのそばまでやって来たとき、ビルの入り口から若い男性二人と年老いた女性一人が出てきたのを目にした。その老婦人こそが黎氏蓮であり、彼らはぺちやくちやと何やら話していた。)

また、視覚以外の感覚への拡張用法は、(23)と(24)に見るように、聴覚に関わる用例が多数確認できるが、(25)のような触覚に関わる用例もある。

(25) 在王发户家，他 伸 手 摸 摸 炕 上 的 褥子，只 见 下面 铺

彼 伸ばす 手 触る 触る オンドル 上 PART 布団 だけ 見える 下 敷く

的 是 稻草，主人患病的妻子无力地躺在上面。 (CCL 语料庫)

PART である 稲わら

(王發戸の家で彼は手を伸ばし、オンドルの上の布団を触ってみると、その下には稲わらが敷かれていて、家主の病気の妻が力なくその上に横になっている。)

(25)において、布団の下に稲わらが敷かれているのは視覚による感知である可能性も排除できないが、前件に「触る」という動作があるため、“只见”に続くのは触った後に感じたことである、と推測される。このように、もともと視覚感知を意味する“只见”は、機能

¹¹ 董秀芳 2007 は、原田 1997a:62 の「語り手が読者に対して見せる対象を変える時に用いられる指標のような役割をする」という指摘や、張佩茹 2006:359-363 の「新たな事態を割り込ませる機能」という指摘に近い結論を示している。

語へと文法化する過程で、動詞性を失い、視覚以外の感覚による感知内容も後続させることができるようになるのである。

興味深いことに、視覚以外の感覚への用法拡張は〈看見〉にも確認できる。まず、(26)では、薛敏茹という女性は目の不自由な人であるため、「見える」はずがないのに、“看到”が使われている。外国人が自分の伝えようとする意味をすぐ理解してくれる、ということは薛敏茹にとっては「見える」ことではなく、「感じる」ことである。にもかかわらず、そのことを彼女が自信を深めた原因として取り上げる際に、“看到”を使っているのである。(26)では“看到”の内容は“……時 (のとき)”という時間従属節内に現れているため、第2章で取り上げた複文とは異なるが、おおよその意味は(26')で表現し直すことができる。

(26) 今年 40 岁的薛敏茹，小时候就患有高度近视，……后又因手术失败，双眼彻底看不见了。……万事开头难，薛敏茹告诉记者，刚刚开始学习英语的那段时间几次都想放弃，但每次在工作中能与外国朋友进行简单对话，尤其是看到外国朋友
見る 着く 外国 友人
能 很 快 理解 自己 表达 的 意思时，又增强了自己学习的信心。¹²
できる とても 早い 理解する 自分 伝える PART 意味

(今年 40 歳の薛敏茹は子供のときから重度の近視を患っており、…その後、手術の失敗がもとで両眼がまったく見えなくなってしまった。…何事も始めは難しく、薛敏茹が私にした話では、英語を学び始めた頃は、何回もあきらめそうになりかけたが、仕事で外国からのお客さんと簡単な会話ができるたびに、特に外国のお客さんが自分の伝えようとする意味をすぐ理解してくれたのを見たときに、学習を続ける自信が深まった。)

(26') 薛敏茹看到外国朋友很快就理解自己表达的意思，学习的信心大增。

(外国のお客さんが自分の伝えようとする意味をすぐ理解してくれたので、薛敏茹は学習への自信が大いについた。)

また、聴覚による感知内容を、〈看見〉や“看”を用いて《原因》として取り上げる用例もある¹³。以下の(27)と(28)を比較されたい。

(27) 村里人没见过东洋车，听见铃响，都跑出来看。(CCL 语料库)

聞く 見える ベル 鳴る みんな 走る 出る 来る 見る

¹² 西安夕刊新聞 2010/12/20 (<http://www.wzrb.com.cn/article119841show.html>)

¹³ 《契機》や《原因》を表し、かつ文形式の目的語が後続する場合、〈看見〉と“看”は相互に置き換えることができる。この点については 2.3.2 を参照されたい。

(村人は東洋の車を見たことがないので、ベルが鳴ったのを聞くと、みんながそれを見に走って出てきた。)

(28) 我 看 开车铃响 了, 于是 赶紧 推 他 上 了 车。

私 見る 発車ベル 鳴る ASP そこで 大急ぎで 押す 彼 乗る ASP バス

(莫伸《窗口》, 木村 2012:182 より転載)

(発車のベルが鳴ったので、私は急いで彼の背中を押してバスに乗せた。)

(27)の“听见铃响”は“看见铃响”に言い換えることができない。村人はベルの音を聞いたから、車を見に来たわけであり、ベルの音は聴覚で感知したものである。一方、(28)の場合、発車のベルが鳴ったのは当然、聴覚によって感知されたことではあるが、ベルが鳴ったことは「私」が次に取った行動、つまり彼の背中を押してバスに乗せることの原因でもあるため、聴覚にとどまらず、視点人物の判断を表現できる視覚動詞“看”の使用が認められるのである。

以上で考察したように、接続詞的な性質を獲得した〈看见〉と“只见”は、視覚以外の感覚による感知内容が後続することが可能になる。このような用法の広がりも、〈看见〉と“只见”が機能語へ文法化している証拠の一つである。

3.3 “只见”の接続機能

接続詞とは、語と語、語とフレーズ、フレーズとフレーズ、節と節、もしくは文と文の間に置かれて両者をつなぎ合わせる機能を果たす語のことである。以上で考察してきたように、“只见”は動詞性が脱落し、複文において接続詞的性質を呈している。ここで「接続詞的性質」と呼び、「接続詞」と呼ばない理由は、“因为(だから)”“不管(であろうと)”“如果(もしも)”“但是(しかし)”などの接続詞とは異なり、“只见”は論理関係を表す語ではないからである。また、“只见”が使える場面は限られており、一般に小説の叙述や描写の部分でしか見られない。このような制限からも“只见”は一般の接続詞とは異なることが分かる。以下、先行研究の指摘をふまえたうえで、“只见”の接続詞的機能について考察を進める。

“只见”の機能について、町田 2003:113 は語用論の観点から、“只见”は「結果の導入」という機能をもつと説明している。しかし、それは“只见”の用法の一部に過ぎない。前件に“看”や“望”などの「見る動作」がある場合は、後件の“只见”はその結果だと言えるだろうが、前件が「見る動作」以外の動作である場合、“只见”は果たして何の結果を

表しているのと言えるのだろうか。

また、原田 1997a:62 は記述的な観点から“只见”の中心的な機能を「語り手が読者に対して見せる対象を変える時に用いられる指標のような役割をする」ものだと説明している。この説明は、複文における“只见”には「新たな事態を割り込ませる」役割があるとする本稿の主張と一致するところがある。しかし、「見せる対象を変える時の指標」というだけでは、“只见”が二つの節をどのように連結させているのかを説明することができない。

“只见”に関してはほかに董秀芳 2007 の研究がある。前述したように、董秀芳 2007 では文法化した“只见”は新規導入される事柄に読み手の注意を向かわせるためのマーカーとして機能すると分析している。この分析は的確ではあるが、ディスコースマーカーとなった“只见”は文の主な構成成分ではないため、削除されても構造の完全性や叙述の連続性にまったく影響しない、という説明は一部の“只见”の性質しか捉えていない¹⁴。次の 3.3.1 と 3.3.2 では、“只见”の接続機能について掘り下げて考えてみたい。

3.3.1 接続機能その1：視覚的実存化機能

“只见”を用いる複文から“只见”を削除すると、元の文はどのような影響を受けるだろうか。この問題は、“只见”の接続機能を考える際に重要なヒントを与えてくれる。まず以下の例文に注目されたい（(29) は(2)を再掲したものである）。

(29) 肖科平循声望去，只见一个高大白胖西服革履的男人，庄重地朝她一下下鼓掌。

(29') 肖科平循声望去，?一个高大白胖西服革履的男人，庄重地朝她一下下鼓掌。

(29'') 肖科平循声望去，一个高大白胖西服革履的男人，正庄重地朝她一下下鼓掌。

まさに

(肖科平が音のする方をたどってみると、背が高く体が大きく、色白で太ったスーツ姿に革靴の男が、まさに彼女に向かってぱちぱちと拍手を送っていた。)

(30) 两个人都笑了。正 说 着，只 见 姜 敏 跑 来。

ちょうど 話す ASP ただ 見える 人名 走る 来る

(原田 1997b:128 の例(19))

(二人は笑った。しゃべっているところへ、姜敏が駆けて来た。)

(30') 两个人都笑了。正说着，*姜敏跑来。

¹⁴ 例えば、董秀芳 2007 では (23)の“陈信心里更是紧张，一口大气也不敢吐，只见方青芬缓缓地说……”の“只见”をディスコースマーカーであるとするが、この例文から“只见”を削除すると、前後のつながりが悪くなってしまう。

(30) 两个人都笑了。正说着，姜敏跑了过来。

走る ASP 過ぎる 来る

(二人は笑った。しゃべっていると、姜敏が駆けて来た。)

適切な文である(29)と(29’)、そして(30)と(30’)をそれぞれ比べてみると、“只见”を使った(29)と(30)のほうが、前件と後件のつながりがより円滑に感じられる。“只见”を取り除いて、読点で時間の相対的關係（例えば、(29’)で肖科平の動作が時間の参照点となっているように）や同時性（例えば、(30’)で「しゃべっていると」という表現のように）によって前件と後件を連結させることも可能ではあるが、いささか間が途切れているように感じられる。なぜなら、ここでは時間の相対的な前後関係を表す要素が二つの事象の関連付けを行っていると言えるが、これらは“只见”ほどの連結効果をもつものではないからである。(29)では“只见”の前件に「見る」という動作があるため、“只见”で「見える対象」を導入することは予想されやすいが、(30)のように前件と後件が関係の薄い事象でも、“只见”を使えば、なんらかの緊密な関連性で結ばれているように感じさせることができる。

また、(29)と(30)の不自然さの原因を明らかにすることも、“只见”の接続機能を解明することにつながる。(29)と(30)の不適切さは、“一个高大白胖西服革履的男人，庄重地朝她一下下鼓掌”と“姜敏跑来”の時間性が漠然としており、前件の“肖科平循声望去”と“正说着”との結束性が損なわれる、ということに起因する。“只见”を使わない場合、前件と後件の相対的時間関係を明確にするために、後件の事象を実存化する要素、例えば“正（まさに）”“了（完了を表すアスペクト助詞）”“就（すぐ）”“已经（すでに）”“突然（突然）”“刚好（ちょうど）”などが必要になる。「実存化」とは、ある事象を特定の時間や空間に位置づけることである（木村 2004）。(29)と(30)を見れば分かるように、後件の事象において動作の時間性が不明確であっても、その前に“只见”が用いられれば、その事象全体に視覚的な「実存性」が付与されることになる。

このように、“只见”は前件で設定された時間や空間にある事象を位置づけ、かつその事象に焦点を当てるという機能を担っている。前件やそれより前の文脈で視点人物の存在が確認できる場合、誰からそう見えているかは意味的に特定できるが、すでに前述したように、“只见”の前に主語が現れないため、統語的には明示されない。これが“只见”の文法化の引き金となり、視覚表現でありながら、やがて“只见”は誰からそう見えているか、はっきり分からない文脈でも用いられるようになるのである。3.2節で見た注視点明確化機能では、まだ「視点人物」や「注視点」などの概念が関わっているが、そこからさらに

“只见”の用法が拡張し、視覚的実存化機能を獲得すると、最終的には「視点人物」も「注視点」も関与しなくなる。

具体的にいうと、“只见”の用法拡張は以下のようにまとめられる。当初は(2)、(8)、(12)、(15)、(22)などのように、前件の主語を“只见”の内容を感知する視点人物として解釈することができる。この用法では多くの場合、“只见”を“看见”で置き換えられるが、“看见”は“只见”のように注視点を際立たせる効果をもたない。そのため、単純に“看见”で置き換えられない用例も存在する¹⁵。

次に、視点人物の背景化に伴い、前の文脈で視点人物が存在しさえすれば、それが後件の主語ではない場合でも、(13)のように“只见”が使えるようになる。その後、さらに用法が拡張すると、(19)、(20)、(23)、(30)のように前件に視覚感知が予告されていない場面でも、後件に“只见”が使われるようになる。この場合、“只见”は前件で設定された時間や空間において、ある事象を位置づけ、その事象に焦点を当てる機能を担っている。“只见”を挿入することにより、複数の登場人物の行動を時間順に並べ、物語を切れ目なく進行させることができる。この段階の“只见”においては、「視点人物」の存在はまだ確認できるが、視覚感知が重要ではない場面だけに、「視点人物」の重要性はかなり低くなっている。そのため、本稿では文と文をつなぐこの接続詞的機能を「視覚的実存化機能」と呼ぶのである。

やがて、本稿の主な考察範囲よりもさらに文法化が進んだものとして、以下の(31)や(32)のように、「視点人物」が完全に曖昧になり、ただ後続部分の事象に焦点を与えるだけの用法も見られるようになる。この種の“只见”は物語の進行に関与しないため、削除しても文意にさほど影響しない。文脈で設定された時間や空間において、ある事象に焦点を当て、いきいきと描写する、というこの用法は「視覚的実存化機能」の延長線にあるものと言えよう。

(31) 时光 一 天 天 流 逝， 只 见 顾 惠 芳 仍 同 往 常 一 样， 每 天 早 早
時間 1 日 日 流れ去る ただ 見える 人名 やはり と いつも 同じだ 毎日 早い 早い
上班， 迟 迟 回 家， 不 同 的 是 她 显 得
出勤する 遅い 遅い 帰宅する NEG 同じだ PART である 彼女 いかにも…に見える

¹⁵ 例えば、(15)の“……我在挖蚯蚓时没注意，误入了爸爸那只德国狼狗的领地，只见 Jackie 冲过来……”において“只见”を“看见”で置き換えるだけでは、本来の「ドイツシェパードの縄張りに入ったとたんに、犬が突き進んできた」という緊迫したニュアンスがなくなってしまう。“只见”の代わりに“一踏进就看见（一歩踏み込んだらすぐに〜が見えた）”という表現を用いたほうが適切である。

比 过去 更 繁忙。 (CCL 语料库)

に比べて 過去 さらに 忙しい

(一日一日と時が流れたが、顧惠芳は相変わらずこれまでと同じように、毎日朝早く出勤し、夜遅くに帰宅する。違うのは彼女が以前よりもいっそう忙しく見えることである。)

(32) 如今 这 炮垒 倒 成为 远 眺 的 和平 之 塔, 只 见

今頃 これ 砲壘 意外にも なる 遠い 眺望する PART 平和 PART 塔 ただ 見える

藍 海 騰 浪, 航船 来往, 时 有 白 帆 如 蝶 翼

青い 海 躍り上がる 波 汽船 往来する ときに ある 白い 帆 のごとく 胡蝶 つばさ

浮游 于 海上。 (CCL 语料库)

浮かぶ に 海 上

(今では、この砲壘は逆に景色を眺望する平和の塔となり、青い海に波が立ち、汽船が往来し、蝶々のつばさのように白い帆が海に浮かんでいることもある。)

以上の論点をまとめると、複文における“只见”の中心的な接続機能は次のように特徴づけることができる。すなわち、“只见”は前件で明らかにされた時間や空間をよりどころにし、“只见”に後続する事象をこの時空軸上に明確に位置づけ、その事象の実存性を確立させる、という役割を果たしている。

3.3.2 接続機能その2：後件焦点化機能

“只见”の接続機能2は3.3.1で取り上げた接続機能1と深く関連するものだと思われる。ある特定の時間や空間で「ただ(その事象)だけが見える」ということは、すなわちその事象への関心が大きいということを物語っている。“只见”の後続文脈には、“只见”によって実存性が確立された事象の主語に関する叙述が続くことが多い。このことから“只见”が用いられるコンテキストでは、“只见”に後続する事象に焦点が移っていることがうかがえる。この後続する事象に焦点を移す機能こそが“只见”のもう1つの接続機能である。前掲の(17)を参照されたい。

ただし、(17)の用例を書き換えた(33)のように、“只见”文の後続文で再び“只见”の前件の主語に焦点を戻す可能性もあるということに注意されたい。

(33) 吴仲义转身往回走, 只见赵昌迎面走来。吴仲义连忙 躲 了 起 来。

人名 急いで 隠れる ASP 起きる 来る

(吴仲义が向きを変えて引き返すと、赵昌が前方からやってきた。吴仲义は慌てて隠れた。)

ここで注目すべきは、(33)のように、再び“只见”の前件の主語の行動に言及する場合、原則上主語をもう一度明示しなければならないという事実である。(33)から後ろの文の“吴仲义”を削り、さらに前の文とつなげて、“?吴仲义转身往回走，只见赵昌迎面走来，连忙躲了起来。”とすると、やや不自然な表現になる。一方、(33)の“只见”を“看见”に置き換えた(33')では、主語の“吴仲义”をその後にもう一度提示しなくても意味の理解に支障をきたさない。

(33) 吴仲义转身往回走，看见赵昌迎面走来，连忙躲了起来。

(吴仲义が向きを変えて引き返すと、赵昌が前方からやって来るのが見えたので、慌てて隠れた。)

“只见”と“看见”について、かたや「見える対象」に焦点が移り、かたや前件と主語を共有する節が続くということは、原田 1997a:60 でも言及されている。ただし、(33)のように再び焦点を前件の主語に戻せる可能性については、原田 1997a では触れられていない。

(33)と(33')の“赵昌迎面走来”は同じ出来事だが、(33)ではその時空間に存在する独立性のある事象として取り上げられている。一方、(33')では吴仲义の目を通しての事象として表現され、この事象自体がどうかということよりも、吴仲义がこの事象の感知を契機としてどのように行動するか、もしくはどのように思うか、ということのほうに関心が集中しているのである。

再び“只见”の前件の主語を話題とするときに、主語をもう一度明示する傾向があることはコーパスでも確認できる。3.2.1 でデータとして用いた 330 例の“S₁, 只见 S₂”のうち、“只见 S₂”が視点人物が次に取る行動の《契機》となっており、しかも後ろにもう一度 S₁の主語を明示しているものは 10 例見つかった。以下の(34)~(36)を参照されたい(囲み部分は視点人物であり、波線部は S₂の主語である)。

(34) 老师 走到他身边，只 见 他在笔记本上写着 5050，老师

先生 歩く 着く 彼 体 そば ただ 見える 彼 に ノート 上 書く ASP 5050 先生

问他：“怎么 算 出来 的？” (CCL 语料库)

聞く 彼 どうやって 計算する 出る 来る PART

(先生が彼のそばに歩み寄ると、他がノートに 5050 と書いていることに気付いた。先生

は彼に「どうやって計算したの」と聞いた。)

- (35) 天 黑 下 来, 范雎 才 从 昏 迷 中 醒 过 来,
 空 暗い 下りる 来る 人名 ようやく から 意識不明になる 中 目覚める 過ぎる 来る
只 见 一个 兵士 守 着他, 范雎 恳求 他 帮助。 (CCL 语料库)
 ただ 見える 1 CL 兵士 見守る ASP 彼 人名 懇願する 彼 助ける
 (あたりが暗くなり、范雎はようやく昏睡状態から目覚めた。兵士一人が見張っているのに
 気付くと、范雎は彼に助けを求めた。)

- (36) 大婆 一 抬 头, 只 见 此 怪物 离 自己 只 有 10 米 远
 老婆 すると あげる 頭 ただ 見える これ 怪物 から 自分 ただ ある 10 メートル 遠い
 了, 她 吓 得 丧 魂 落 魄, 甩掉 手 中的 衣服, 爬 上 岸 来。(CCL 语料库)
 SF 彼女 脅す ASP なくす 魂 落とす 魂
 (老婆が顔をあげると、その怪物は自分からたった 10 メートルしか離れていないことに気
 付き、老婆は度肝を抜かれ、手にもっていた服を投げ捨てて、岸に這い上がってきた。)

(34)~(36)においては視点人物と異なる人物の存在や動作行為に焦点があてられているため、再び視点人物の行動を取り上げるときには、視点人物をもう一度主語に立てなくてはならない。これに対し、“看见”が使われる場合は、(34)は“老师走到他身边, 看见他在笔记本上写着 5050, 就问他……。”のように書き換えることができる。“就(すぐ)”を補って事象の時間順序をより明確にしたほうが自然ではあるが、“老师”を再び主語に立てる必要はない。“只见”と“看见”のこの違いは、“只见”の後件を焦点化する機能によるものだと考えられる。なお、視点人物をもう一度主語に立てない用例も3例だけ見つかった。以下の(37)を見られたい。

- (37) 妻子 用 手 卷 起 他 的 裤 筒, 只 见 两 条 小腿 上 伤口
 妻 使う 手 卷く 起きる 彼 PART ズボン 筒 ただ 見える 2 CL すね 上 傷口
还 未 完全 愈合, 依然 渗 着 血 丝, 劝 他
 まだ NEG 完全に ふさがる 依然として にじむ ASP 血 細い糸状のもの 勧告する 彼
说: “在 家 休息 几 天 吧!” (CCL 语料库)
 言う いる 家 休む いくつ 日 SF
 (妻が手で彼のズボンを巻き上げてみたところ、両足のすねの傷口はまだ完全に治っておらず、血がまだ滲んでいるので、彼にこうすすめた：「家で数日休んだらどうですか。」)

用例数が少ないため、まだ一般化できないが、いくつかの原因が考えられる。まず、“只见”

は主に書き言葉に使用されるため、古い用法の影響を受けやすい。“只见”で注視点に焦点を当てながらも、あくまで視点人物の行動を物語の中心とする書き方は古い用法の残留だと思われる。次に、(37)がそうであるように、“S₁, 只见 S₂”においてS₂の主語は人間ではなく、傷口である。その傷口が動作の主体として何かをする、ということは考えられないので、“劝他说”の前にもう一度“妻子”を明示しなくても解釈に支障をきたさない。別の1例でも無生物の「ドア」がS₂の主語として用いられていた。3例のうち2例がそうである、ということを見ると、S₂の主語の生命度になんらかの関連性があると考えられる。つまり、“S₁, 只见 S₂”において、S₂の主語が人間の場合、通常、その後には新たな焦点となっているS₂の主語による動作行為が続くことになる。もしそうではなく、再びS₁の主語について語るなら、統語的にそれを再度主語に立て直さないと、読み違いが生じやすくなる、と言えよう。

“只见”を使うと、視点人物の存在が背景化し、“只见”に後続する事象に焦点が移る、ということは注目に値する。前述の接続機能1、つまり前件の時空軸に“只见”に後続する事象を定位し実存化する機能も、やはり後続する事象を新たな焦点として取り上げることに繋がっている。その意味で、“只见”は「焦点転換マーカー」であると言える。

3.4 まとめ

本章では、〈看见〉との比較を通して、“只见”の構文的・意味的特徴を考察した。「視点明確化機能」をもつ〈看见〉が「誰から見えているか」ということに焦点を当てるのに対して、「注視点明確化機能」をもつ“只见”は「何が見えているか」ということに重点を置く。ゆえに、共に視覚感知に関する表現でありながら、複文において〈看见〉と“只见”は異なる機能を果たしている。

「ただ〜だけが見える」を意味する“只见”は文法化と語彙化の過程を経て、本来の「副詞+動詞」という構造から一語化し、接続詞的機能を獲得している。本稿では、“只见”は、“只见”の前件が述べる事象を時間ないし空間の参照点にし、後件の事象を次の焦点の受け皿として登場させる、という接続機能をもつと主張した。

視覚動詞の文法化に関しては、“只见”も〈看见〉も接続詞的性質を獲得しているが、「注視点明確化機能」と「視点明確化機能」の相違を反映して、“只见”と〈看见〉はそれぞれ異なる接続機能へと拡張していく。本来、共に「何かが目に入る」を意味する“只见”と〈看见〉だが、“只见”は「何が見えているか」に焦点を置き、「見える対象」のほうが前

景化するにつれて、それを見ている主体が背景化する。それとは対照的に、〈看见〉はつねに主体の存在を意識し、「誰から見えているか」を明確にする。その違いが“只见”と〈看见〉の拡張方向に決定的な影響をもたらしていると考えられる。文法的拡張の結果として、複文において、“只见”は、後続する事象を次の焦点の受け皿として登場させる役割を担うようになり、〈看见〉は、ある動作行為を引き起こす契機・原因をマークする働きを担うようになるのである。

第4章 《見究めの“看”》と《試みの“看”》

第2章と第3章では、視覚表現の「視点明確化機能」及び「注視点明確化機能」を考察し、一部の用法に接続詞的な性質が確認できると結論づけた。接続詞だけではなく、中国語においては助詞へと文法化する視覚表現も見られる。動詞の重ね型に後続し、〈試み〉を表す“看”がそれである。この章では「見る」という動作行為と〈試み〉の関係を考察し、動詞としての“看”と〈試み〉のマーカーとなった助詞“看”の異同を明らかにすることが目的である¹。

4.1 〈見究め〉を表す“看”と〈試み〉を表す“看”

陆俭明 1959 は、動詞“看”が弱化し、語気助詞にあたる用法に派生したことを最初に指摘した論文である。同論文では以下の(1)と(2)を取り上げ、両者の意味的類似性を根拠に、(2)の語気助詞“看”は(1)の動詞“看”が虚化した結果であると説明している(陆俭明 1959:492)²。本稿では(1)のように複文の後件に現れ、事柄の内容を「見究める」という意味を表す動詞の“看”を《見究めの“看”》と称し、そして(2)のように主に動詞の重ね型に後続し、「試みに行く」という意味を表す語気助詞の“看”を《試みの“看”》と称して、考察を進めていく。

(1) 他还没想通，你 再 跟 他 谈 谈，看 怎么样。

あなた 再び と 彼 話す 話す 見る どう

(彼はまだ納得していないので、もう一度彼と話し合って、様子をみてください。)

(2) 他还没想通，你 再 跟 他 谈 谈 看。

あなた 再び と 彼 話す 話す 見る

(彼はまだ納得していないので、もう一度彼と話し合ってみてください。)

陆俭明 1959 のこの主張、つまり《試みの“看”》が《見究めの“看”》に由来すること

¹ 本章の以下の議論は張佩茹 2008 をもとに、加筆、修正をおこなったものである。

² 陆俭明 1959 では語気助詞“看”は(1)の“看怎么样”の動詞“看”との関係が密接で、「特に意味的に」と強調しているため、通時的に前者が後者に由来するものである、ということを考えていなかった可能性もある。しかしながら、すぐその後の議論で西遊記の用例である“等我再叫他两声，看是如何。(彼をさらに何回か呼んで様子を見るので、待ちなさい。)”は“等我再叫他两声看。(彼をさらに何回か呼んでみるので、待ちなさい。)”に言い換えても意味が基本的に変わらず、語気助詞“看”は動詞“看”から虚化したものであると説明しているため、やはり複文の後件に使われる動詞の“看”と語気助詞“看”を関連付けていると思われる。

について、蔡鏡浩 1990:75-76 ではこの分析が通時的な言語事実に反すると批判している。蔡による通時的考察では、《試みの“看”》は複文の環境で生まれた用法ではなく、動詞“看”の意味変化により派生したものだという結論が示されている。

以下、まず動詞“看”から《試みの“看”》へ拡張したプロセスをまとめ、そのうえで先行研究の問題点を指摘する。

4.1.1 《試みの“看”》の拡張プロセス

《試みの“看”》の拡張プロセスについて、通時的な考察を行った先行研究では、ほぼ「見る > 確かめる > 試みる」と分析することで意見が一致している（蔡鏡浩 1990:76、吳福祥 1995:162）。以下の(3)と(4)に示されるように、最初は感覚器官による探求を表す“看”に「確かめる」の意味が読み取られ、その後、感覚動詞のみならず、(5)に見られるように広く一般の動詞に後続できるようになるにつれ、「試みの語気助詞」へと文法化が一層進んだとされている。

(3) 得暖則作速，伤寒则作迟。数 入 候 看，热则去火。

数回 入る テストする 見る

（北魏賈思勰《齊民要術》種桑、柘第四十五。繆啓愉校正・注釈 1998:333）

（暖氣を得れば（繭を）作るのが早く、寒氣に傷められると遅い。時々入って様子を見、熱すぎるようだったら火を取りのける³。）

(4) 嘗 看，若不大涩，杔子汁至一升。

嘗める 見る

（同上、作菹藏生菜法、蔡鏡浩 1990:76 による）

（嘗めてみて、もしそれほど渋くなければ、杔子汁は一升まで入れてよい。）

(5) 汝 好 思量看。

あなた よく 考える 見る

（姚秦弗若多羅共羅什譯《十誦律》，《大正藏》23.53a、吳福祥 1995:162 による）

（よく考えてみるがよい。）

(3)～(5)は魏晉南北朝の用例で、吳福祥 1995:164-165 によると、その後、晩唐には《試みの“看”》と共起できる動詞の種類に広がりを見せ、“看”の語気助詞としての用法が固ま

³ この訳は西山・熊代(1984)を参照した。

った。さらに明代に至って、現代中国語で最もよく使われている“VV看”、つまり動詞の重ね型と共起する用例が現れたのだという。

このように通時的にみると、《試みの“看”》、つまり「試みの語気助詞」の“看”は複文の環境で形成された用法ではなさそうである。

もし、《試みの“看”》が直接《見究めの“看”》に由来したのであれば、《試みの“看”》は、複文の後件に使われた《見究めの“看”》の目的語が省略され、さらに“看”が前件の節と結合した、という文法化のプロセスを経たことになる。しかし、中国語において節を超えての文法化の現象はきわめて珍しい。刘坚ら 1995/2005:108 が指摘するように、中国語における動詞の文法化は連動構造という形で始まったのがほとんどである。本来、単独で主要動詞として振る舞っていた動詞が、連動構造 VP₁VP₂に使われることにより、以下の二通りの文法化の可能性が生まれる。

(6) VP₁VP₂ (VP₁が主要動詞の場合) : VP₂が助詞に文法化しやすい

(7) VP₁VP₂ (VP₂が主要動詞の場合) : VP₁が前置詞に文法化しやすい

通時的にみて、《試みの“看”》は(6)の類に入る。このように、他の動詞に後続することと「確かめる」という意味が派生されたことが、動詞“看”が《試みの“看”》へと文法化したきっかけとなったのである。

4.1.2 先行研究の問題点

通時的にみると、《試みの“看”》は複文で使われている《見究めの“看”》に由来したものではない。その一方、陆俭明 1959:492 の論述からも明らかなように、《試みの“看”》と《見究めの“看”》との間には直感的に関連性が見出せる。他の先行研究においても、《見究めの“看”》と《試みの“看”》を意味的に同一視するのが、両者の関連性を論じる研究の基本的な観点である（朱景松 1998:385-386、李珊 2003:44-48）。

陆俭明 1959 で取り上げられた例(1)(2)を見る限り、《見究めの“看”》と《試みの“看”》は互いに置き換えられ、類似性が高いと思われる。だが、他の用例を見ると、両者はつねに置き換え可能であるとは限らない。次の例では両者の置き換えは成立しない。

(8) 同时，应以更大的精力去浏览全书，寻找 还没有被改编成京剧

探す まだ NEG される 改編する 成る 京劇

舞台劇 的 “生 坯子”, 看 有 无 “一 步 到 位” 将 之 改 编
舞台劇 PART 生の 白地 見る ある なし 1 歩 着く 位置 を これ 改編する
为 京剧 电视剧 的 可能性。(CCL 语料库)

なる 京劇 テレビドラマ PART 可能性

(それと同時に、より精力的に全書に目を通し、まだ京劇の舞台脚本にされていない「生素地」を探し、すぐさま京劇のテレビ脚本にする可能性があるかどうかを看なければなら
ない。)

(8) *同时, 应以更大的精力去浏览全书, 寻找还没有被改编成京剧舞台剧的“生坯子”
看。

(9) 你 猜 猜 看, 他今年多大?

あなた 当てる 当てる 見る

(当てて見て、彼は今年何才か。)

(9) ?你猜猜, 看他今年多大?

先行研究ではこれらの用例に見られる《見究めの“看”》と《試みの“看”》の差異について全く言及せず、あたかも両者の意味機能が同等であるかのように扱っている。だが、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の構文的な振る舞いがこのように異なる以上、両者の間には意味機能に違いがあるはずである。以下の4.2と4.3で《見究めの“看”》と《試みの“看”》の比較を通して、形式と意味の関連について考えてみたい。

4.2 《見究めの“看”》と《試みの“看”》の異同

先行研究では、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の異同についてほとんど触れておらず、唯一陸俭明 1959:492 で、《見究めの“看”》と《試みの“看”》はそれぞれ動詞と語気助詞であるという品詞の差異が指摘されているだけである⁴。以下、両者の共通点と相違点に着目し、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の統語的・意味的特徴を考察する。

4.2.1 《見究めの“看”》と《試みの“看”》の共通点

先行研究のデータによると、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の前身である「確かめる」を意味する“看”の用法は魏晋南北朝まで遡れる。吴福祥 1995 ではその違いが言及

⁴ 陆俭明氏の論考を引用する李珊 2003:44-48 では「語気助詞」の「語気」を取り除き、《見究めの“看”》と《試みの“看”》をそれぞれ動詞と助詞であると説明するが、基本的に陆俭明氏と同じ見解を示している。

されていないが、同論文のデータにこの二つの“看”の恰好の対照用例が挙げられている。

(10) 其家有机，让比丘坐。即坐小待，复 起 以 指 内 釜 中，

また 立ち上がる もって 指 入れる 釜 中

看 汤 热 不⁵。

見る 湯 熱い NEG

(東晉佛陀跋陀羅共法顯譯《摩訶僧祇律》卷第九，《大正新脩大藏經》第22卷:307-308)

(その家の座卓のところに僧を案内した。僧はすぐに座ったが、暫くすると立ち上がって指を釜の中に入れ、湯が沸いているかどうかをみる。)

(11) 五六日后，以 手 内 瓮 中 看，冷无热气，便熟矣⁶。

もって 手 入れる 甕 中 見る

(北魏贾司勳《齐民要术》笨麴并酒第六十六)

(五六日後に手を甕の中に入れてみて、冷えて熱気が無くなっていれば、熟れたということである。)

(10)の“看”には確かめたい未知の事柄(“汤热不”)が目的語節として後続しており、つまり「指を釜に入れて、湯が沸いているかどうかを確かめる」ということであるが、(11)は“看”によって「確かめる」意図は言語化されているものの、確かめる内容は明確に言

⁵ 吳福祥 1995:162 では“其家有机，让比丘坐：“即坐小待”。……”のように、“即坐小待”に引用符をつけているが、前後の文の意味を考えると、引用符は余分なものだと思われるので、本稿では引用符を削除した。

⁶ (11)を最初に取り上げた論文は、蔡鏡浩 1990 である。蔡鏡浩 1990 をはじめ、この用例を引くとき“五六日后，以手内瓮中，看冷无热气，便熟矣”のように、“看”と確かめた結果である“冷无热气”を結合させているが、《齐民要术》のほかの“看”の用例に照らし合わせると、「確かめる」を意味する“看”の直後に確かめた結果を並べるのは適切ではないと思われる。《齐民要术》において、文形式の目的語が“看”に後続する用法は下記の①と②である。「確かめる」を意味する“看”は③のように、“看”を使う時点ではその結果がまだ不明であるほうが、「確かめる」という意味にかなない、のちの“看”の「試みに行く」という用法へもつながる。

①「～を見たら、このように行動する」という意味の用法。

用例：“看有裂处，更泥封。”(笨麴并酒第六十六，繆啓愉校正・注釈 1998:513)

(裂け目が見つかったら、さらに泥で封じる。)

②「ある状況に基づいて判断し、行動をとる」という意味の用法。

用例：“看酿多少，皆平分米作三分，一分一炊”(笨麴并酒第六十六，同上 p.511)

(醸造の量に応じて、米を三等分にし、一つで一炊分とする)

③「確かめる」の意味の用法。

用例：“尝看，若不大涩，杓子汁至一升”(＝前掲の例(4))

なお、1998年出版の《齊民要術校釋》(繆啓愉校正・注釈，514頁)では“五六日后，以手内瓮中，看冷无热气，便熟矣”となっているが、1958年出版の《齊民要術今釋》(石聲漢校正・注釈，第三分冊 491頁)では“五六日后，以手内瓮中看：冷，无热气，便熟矣”となっており、本稿の分析と一致している。

語化されていない。後の“冷无热气，便熟矣”によって、はじめて確かめる内容が温度であることが分かる。

(10)の《見究めの“看”》の用法は今日に至っても見られるが、(11)の“看”は現在では動詞の重ね型との組み合わせで使用されるのがもっとも一般的である。つまり、“试试看(やってみる)”や“说说看(言ってみる)”に見られる《試みの“看”》となっている。

(10)と(11)の“看”に単なる「見る」ではなく「確かめる」という意味が読み取れる理由は、“看”が「未知の事柄」を指向しているからである。この未知の事柄は(10)のように明示的な場合もあり、(11)のように非明示的な場合もある。そして、(10)の「指を釜に入れる」動作と(11)の「手を甕に入れる」動作は「未知の事柄」を究明する手段である。両者の意味構造は以下の(12)と(13)のように示すことができる。

(12) 手段動作, “看” + 未知の事柄

(13) 手段動作+ “看” (前後の文脈で未知の事柄が明示、もしくは暗示される)

こうしてみると、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の運用にはともに「手段」となる動作・行為(以下、形式的には〈手段〉動詞、意味的には〈手段〉動作と称す)と「未知の事柄」という二つの要素の存在が必須であることが分かる。このことは現代中国語についても言える。

(14) 你 照 照 镜子, 看 自己 是 不 是 红 了 眼。

あなた 映す 映す 鏡 見る 自分 である NEG である 赤くなる ASP 目

(鏡を見てごらん、自分の目が赤くなったのではないかをみて。)(王朔〈我是你爸爸〉)

(15) 猜 猜 看, 它值多少钱? (CCL 语料库)

当てる 当てる 見る

(当ててごらん、いくらするか。)

(14)は「鏡を見る」こと、(15)は「推察する」ことを手段とし、それぞれ「未知の事柄」を究明することを意味している。前出の(10)(11)と照らし合わせると、現代中国語の《見究めの“看”》と《試みの“看”》から構成される構文は、それらを成立させる意味的要素に関して、魏晋南北朝の用例と共通している。

以上のことから、何らかの動作を手段とし、何らかの未知の事柄を究明することが、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の共通点であると言える。共通点が明らかになったところで、次は両者の相違点を考察する。

4.2.2 相違点その1：“看”の品詞

まず、品詞分類からみると、《見究めの“看”》は動詞であり、《試みの“看”》は語気助詞であると考えられる。動詞である《見究めの“看”》は(14)のように裸の形で使われるほか、(16)のように重ね型で現れることもしばしばある。一方、語気助詞である《試みの“看”》は重ね型にすることは許されない。前掲の例(2)を書き換えた例(17)を参照されたい。

- (16) “我……打算叫人去进一步观察 他 一下， 看 看 他 有 什么
 観察する 彼 ちょっと 見る 見る 彼 ある 何
 反常 的 表现。” (冯骥才〈啊!〉)

異常である PART 行動

(「私は……誰かにさらに観察してもらって、彼にどんな異常な行動があるのかをみてもら
 うつもりだ。」)

- (17) *他还没想通，你再跟他谈谈看看。

なお、注意すべきは、動詞である《見究めの“看”》も一定の制限を受けているという点である。まず、見究めの内容が明確でなければならぬため、目的語には必ず疑問形式を含まなければならない。目的語が疑問形式でない場合、“看”には単なる「観察」の意味しか読み取れなくなり、“看”の前方の述語性成分が「何かを究明するために用いる手段」であるという読みが取りにくくなる。例(14)と(16)を書き換えた(18)と(19)を参照されたい。

- (18) 你照照镜子，看看自己的眼睛。

(鏡で自分の目を見てごらん。)

- (19) “我……打算叫人去进一步观察他一下，看看他的表现。”

(「私は……誰かにさらに彼を観察して、彼の行動を見てもらうつもりだ。」)

また、《見究めの“看”》は“了”“着”“过”などのアスペクト助詞と共起しない。これらの制限から、動詞と言いながらも《見究めの“看”》は本来の視覚動詞“看”に比べ、より特化した用法であることが分かる。視覚動詞“看”なら、「見る」動作について、“看了(見た)”や“看着(見ている)”、“看过(見たことがある)”のように、その動作が実現済み、もしくは実現中であることを言語化することができる。一方、《見究めの“看”》は〈手段〉動作の実行を通じてある未知の事柄を究明する、という意味を表すので、動詞のアスペクト的特徴も「未知」と相性のよい「未然」に限定される。また、統語的制限からいうと、《見究めの“看”》に後続する目的語は疑問形式が含まれる文であるため、“看”とその目

并 进行 综合 分析 和 鉴别, 看 看 能 否 发现
 さらに 行う 総合的である 分析する と 鑑別する 見る 見る できる NEG 見つかる
 “外星人” 的 信号。 (CCL 语料库)
 宇宙人 PART 信号
 (絶えず広大な宇宙から伝わってくる無線電波を走査しかつ捉え、さらに総合的に分析と鑑別をし、「宇宙人」の信号が見つかるかどうかをしてみる。)

〈手段〉動詞の形が主に単音節動詞の重ね型である《試みの“看”》と比較すると、《見究めの“看”》の〈手段〉動詞には特に決まった形式はなく、複雑な述語形式であってもよいということが、以上の用例から見て取れる。

4.2.4 相違点その3：〈手段〉動詞の意味

〈手段〉動詞を意味の面からみると、《見究めの“看”》が〈手段〉動詞の語彙的意味を選ばないのに対し、《試みの“看”》は「未知の事柄を究明する」ということを意味する動詞と結びつく傾向がきわめて強い。その傾向を検証するために、“比(比べる)”“猜(当てる)”“尝(味わう)”“算(数える)”といった探求義が含意される単音節の動詞について、“VV看”と“VV, 看……”の二つの形式をCCLコーパスで検索してみたところ⁸、表Iのような検索結果が得られた⁹。

【表I】CCLコーパスにおける“VV看”と“VV, 看……”の用例数

	比	猜	尝	算
VV看	22例	62例	7例	21例
VV, 看……	2例	なし	なし	なし

この表を見ると、これらの動詞のほとんどが“VV看”の形で使われることが分かる。つまり、探求義が内包される動詞“比”“猜”“尝”“算”の重ね型は、《見究めの“看”》よりも《試みの“看”》との結びつきが強いということである。

なぜ“比”“猜”“尝”“算”の重ね型の直後に《試みの“看”》が後続する傾向が強いのか

⁸ 2008年2月19日現在のデータ。

⁹ “VV看”の項目には、“VV看”の後に目的語が続かない用例のみを数えた。例えば、“你算算看。”“你算算看吧。”“我不算算看不行。”などは“VV看”の用例として数えるが、“你算算看一共多少钱。”の場合、その“看”は語気助詞ではないため、統計の対象から外した。

だろうか。前述したように、通時的にみると、“看”は感覚器官による探求を表すことで、「確かめる」の意味を帯びるようになったとされている。“看”は元来感覚器官による働きを表す動詞と共起するものであった（前掲の例(3) (4) (11)を参照）。その後、この“看”が五感以外の動詞と結合するようになったことで動詞的性質が弱化し、〈試み〉の助詞へと品詞を変化させたとされる。現代に至っては、“VV 看”の形式で定着している¹⁰。“VV 看”はすでにそれ自身〈試み〉を表す形式として構造化されているということであり、したがって動詞自身に「未知の事柄を究明する」という含意がなくても、“VV 看”の形式に入ると、〈試み〉の意味が付加されることになる。例えば、“坐”には本来、探求義は含まれないが、“坐坐看”にすると〈試み〉の意味が生まれる。だが、〈試み〉を表す形式“VV 看”と最も相性の良い動詞はやはり探求義が含意される動詞である。“比比看”“猜猜看”“尝尝看”“算算看”などは探求義と〈試み〉の文法形式との組み合わせであるがゆえに、使用頻度が高く、全体で一つのまとまった表現になっていると考えられる。

注目すべきは、探求義を含意する単音節動詞の中で、“试”がもっとも《試みの“看”》との結合度が高いという事実である。“试”は〈試み〉を意味するが、“比”“猜”“尝”“算”と同じように疑問文を目的語にとることができる。“你算算一共多少钱。(全部でいくらか、数えてみて。)”の“算”に探求義が読み取れるように、“你试试这件衣服合身不合身。(体にぴったり合うかどうか試してみて。)”からも“试”に備わっている探求義がうかがえる。CCL コーパスにおいて、“试试看”の例は 560 例得られた。これは先の“比”“猜”“尝”“算”を遥かに上回る数字である¹¹。“试试看”の使用頻度が圧倒的に高いのは、“试”が〈試み〉そのものを意味することがその一因となっているほかに、〈試み〉を表現するとき、“试”には代動詞的用法が見られるということがもう一つの原因だと考えられる。以下の(23)で検証したい。

¹⁰ 「試み」に関する形式の推移については張伯江・方梅 1996:142-145 が詳しい。

¹¹ “试试看”のほか、“想想看(考えてみる)”と“说说看(言ってみる)”も検出例がかなり多く、それぞれ 681 例と 199 例であった。特に 681 例という“想想看”の検出例は“试试看”の 560 例を上回る数字となっている。“想”や“说”には強い探求義があるとは考えにくいだが、なぜ“想想看”と“说说看”の使用頻度がそれほど高いのだろうか。それには、“试试看”と違い、語用的な要因が強く働いていると考えられる。《試みの“看”》は主に命令文で使われている（吳福祥 1995:161）。つまり、“想想看”と“说说看”の多用は、会話でよく用いられる“你想”“你说”の影響だと思われる。“想想看”を例に取ると、“想想看，有没有什么好办法？（何かよい方法がないか、考えてみて。）”のような「試み」の表現がある一方で、“想想看，这一切老花农哪里懂得。（考えてごらん、このすべてが花農家のじいさんにどうして理解できようか。）”（馮驥才〈雕花烟斗〉）のような反語文も少なくない。会話における“想”や“说”の特殊な用法については刘月华 1986 を参照されたい。

(23) 只要它是人造的， 就 应该 能 修， 试 试 看 吧！

～ならば～である ～のはずだ できる 直す 試す 試す 見る SF

(CCL 语料库)

(人工のものであるかぎり、修理は可能なはずだから、やってみてごらん！)

(23)においては、“修”という動詞が直前に出ているので、“试试看”には“修修看”が含意されている。“试试看”はこのように、前方の動詞と「試み」を包括して表現することができるために、使用頻度が高い。

以上の考察で《試みの“看”》と探求義が含意される単音節の〈手段〉動詞との強い結びつきが確認できたが、《見究めの“看”》の〈手段〉動詞にはそれほど強い傾向が見られない。

4.2.5 相違点その4：平叙文における制限

これまでに検証してきた用例の多くが命令文であることから分かるように、《見究めの“看”》と《試みの“看”》は一般的に会話で使われる。また、命令文のほかに、“我来试试看。(私がやってみよう。)”のような意志表明の用例も存在する。

吴福祥 1995:162によると、《試みの“看”》は平叙文で使われることもあるが、その場合、“VV看”が「意志性の動詞」に後続するか、兼語文の第二動詞でなくてはならない、という制限がある。兼語文の構造を木村 2000:20 に倣って $X V_1 Y V_2$ で記号化すると、“VV看”は V_2 の位置を占める、ということになる。以下の(24)と(25)は吴福祥 1995 の用例であるが、(24)から“想”を取った(24')や“开开看”だけを述語にした(26)はいずれも非文になってしまうことに注意されたい。

(24) 听说炒股票有赚头，小王 也 想 试 试 看。

王さん も ～したい 試す 試す 見る

(株は儲かると聞き、王さんもやってみたくなくなった。)

(24') *听说炒股票有赚头，小王也试试看。(「やってみた」の意味で)

(25) 小李说他会开车，我 让 他 开 开 看。

わたし させる 彼 運転する 運転する 見る

(李さんは運転できると言っていたので、彼に運転させてみることにした。)

(26) 这款车很不错。*小李 昨天 开 开 看，他说非常好开呢！

李さん 昨日 運転する 運転する 見る

(この型の車はなかなかいい。李さんが昨日運転してみたが、彼はとても運転しやすいと言っている。)

なぜ平叙文で使われるとき、《試みの“看”》はこのような制限を受けるのだろうか。本稿では、それは《試みの“看”》の使用が未然の〈手段〉動作および「未知の事柄」と深く関わっているからであると考えられる。

(27) 你说的这个方法很不错，我 来 试试 看。

わたし 来る 試す 試す 見る

(あなたが言うその方法はよさそうだね。やってみよう。)

(28) 你说的那个方法很不错，*我昨天试试看，非常有效。

(29) 你说的那个方法很不错，我 昨天 试 了，非常有效。

わたし 昨日 試す ASP

(あなたが言うその方法はなかなかいいね。昨日やってみたら、非常に効果があった。)

以上の三例から分かることは、発話の時点で〈手段〉動作が未然で、かつその動作によって究明される事柄が存在すれば、《試みの“看”》が使えるのに対し、すでに〈手段〉動作が実現済みであり、その結果も確認済みである場合には、《試みの“看”》は使えないということである。なお、“看”と「未然の〈手段〉動作」や「未知の事柄」との共起関係については、方言研究でもすでに報告されている¹²。

平叙文においても、“VV看”には「未然の〈手段〉動作」と「未知の事柄」が成立条件となっているため、《試みの“看”》は吳福祥 1995:162 で言及された制限を受けるのだと考えられる。まず、“想(～したい)”や“打算(～するつもりだ)”といった意志性を表す動詞に後続することによって、“VV看”全体が未然の事態となる。また、“让”“叫”など兼語文の第一動詞に後続するのも、それによって“VV看”が未実現という読みが生じるからである。すでに荒川 1977:57 で指摘され、さらに木村 2000:21-22 で特徴づけられている通り、 XV_1YV_2 の V_2 は通常、目的性のものであり、まだ実現していない動作・行為である。兼語文における V_2 は未然性を成立条件とする“VV看”がもっとも入りやすい位置

¹² 語気助詞の“看”ではなく、“看”の補文標識(complementizer)としての用法に関する記述ではあるが、許惠玲・馬詩帆 2007:68 は、閩南語の潮州方言において“说”と“看”にはともに「探求義の動詞+“说”/“看”+疑問形式の節」の用法があり、両者はアスペクトにおいて異なり、“说”は已然の事柄に使われるのに対し、“看”は未然の事柄に使われると指摘している。また、鄭良偉 1997:115 では台湾閩南語において前方の動詞が既知を表す場合、“看”は使えないのに対し、探求義を表す動詞なら“看”が使えると記述している。

だと言える。

中国語において命令文の間接化が“叫(让)”を用いる「使役」構文(広く言えば兼語文)によって担われていることは荒川 1977:55 の議論で明らかにされている。下の表Ⅱにまとめたように、“VV 看”の用法に関して、命令文や意志表明の文における動作の未然性は、平叙文であっても、意志性の動詞や兼語文の第一動詞が“VV 看”の前方にあることによって保証されている。

【表Ⅱ】《試みの“看”》の会話文と平叙文における用法

	会話文	平叙文
意志表明	小王说：“我来试试看”。	小王想试试看。
命令	小王跟小李说：“你去找找看”。 (王さんが李さんに「探してみきて」と言った。)	小王让小李去找找看。 (王さんが李さんに探してみにいかせた。)

上述のように、《試みの“看”》は平叙文においても“VV 看”の未然性が保たれる必要があるため、いくつかの制限を受けている。一方、《見究めの“看”》は、平叙文において〈手段〉動作が実現中もしくは実現済みの場合がある。下記の(30)(31)で確認されたい。

(30) 他站起来，伸了个懒腰，像个一无所获的小特务 不 死心 地 环顾

NEG あきらめる PART 見渡す

四周，看 还 有 哪 儿 遗 漏 未 搜 的。(王朔《我是你爸爸》)

周り 見る まだ ある どこ 漏れる NEG 探す PART

(彼は立ち上がり、腰を伸ばし、何も情報を手に入れていない下っ端のスパイのように、しつこく周囲をぐるりと見渡し、どこかに漏れがないか、まだ探していないところがないかをみている。)

(31) 徐宝芬耍了个小聪明，10 头 苗猪 放 8 头 圈 里，另 两 头

10 匹 子豚 入れる 8 匹 ブタ小屋 中 ほかの 2 匹

送 亲戚 家，看 究 竟 哪 种 养 法 长 得 快。(CCL 语料库)

届ける 親戚 家 見る いったい どの 種類 飼育法 成長する PART 早い

(徐宝芬は知恵を働かせて、10 頭の子豚のうち、8 頭を柵に入れて、残りの 2 頭を親戚の家に届け、いったいどちらの育て方のほうが早いかをみてみることにした。)

なお、(30)(31)で使われる《見究めの“看”》は、命令文のそれよりも「未知の事柄を探求し続ける」ことが強調されている。なぜなら、〈手段〉動作が未然の場合、それによって究明される事柄は当然未知の境地にあるが、〈手段〉動作が実現すれば、通常は、未知の事柄も究明されたということになり、表現の焦点はその究明の結果に移る。だが、〈手段〉動作が実現済みでありながら、究明しようとした事柄が未知のままであるならば、それはまだ探求し続けているということに他ならない。そのことは、(30)の“还”や(31)の“究竟”などの副詞が使われていることからもうかがえる。

本節の論述からも明らかなように、《見究めの“看”》と《試みの“看”》との相違点は、従来指摘されてきた品詞の違いのほか、〈手段〉動詞の形と意味、そして平叙文における制限などが挙げられる。次節では《見究めの“看”》と《試みの“看”》にみる形式と意味の関連性について考察する。

4.3 《見究めの“看”》と《試みの“看”》にみる形式と意味の関連性

従来の論考では、《見究めの“看”》と《試みの“看”》は互いに置き換えられる表現として取り上げられ、両者間の類似性ばかりが考察されてきた。しかし、形式と意味の対応関係から考えると、異なる形式が類似の意味を表現することは可能ではあるが、形式の違いによる表現意味の差異は必ず存在する。本節では《見究めの“看”》と《試みの“看”》の用法の違いを通して、形式と意味の関連性について考える。

4.3.1 焦点化について

《見究めの“看”》と《試みの“看”》の違いは、中古漢語の用例である(10)の“以指内釜中，看汤热不”と(11)の“以手内瓮中看”からすでに見出せると考えられる。前者の“看”には「未知の事柄」が目的語節として後続し、「未知の事柄」が“看”と直接的な意味関係を結ぶため、《見究めの“看”》は探求の内容に焦点を置いていると考えられる。一方、後者の“看”は〈手段〉動詞と直接結びつき、「未知の事柄」の存在は必ずしも明示的ではないため、《試みの“看”》は〈手段〉動詞そのものに焦点をあて、その動作が何らかの未知の事柄を解明するために行う動作である、という意味を付与する。

4.3.2 形式上の距離と意味上の距離

前節では、《見究めの“看”》と《試みの“看”》の違いを明らかにしたが、〈手段〉動詞

が単音節であるものに限って言えば、確かに陆俭明 1959:492 と朱景松 1998:386 で言及されているように、前掲の(1)“你再跟他谈谈，看怎么样。”と(2)“你再跟他谈谈看。”、そして“你念念，看拗口不拗口。”と“你念念看，拗口不拗口？”(いずれも「言いにくいかどうか、音読してみて」を意味する)はそれぞれ置き換え可能な表現である。だが、〈手段〉動詞の性質によっては、置き換えが制限される場合もある。“猜”がその一例である。

朱景松 1998:386 は、以下の(32)と(33)では、〈手段〉動詞“猜”の意味が異なっていると解釈する。

(32) 你 猜 猜 看， 有 几 个。

あなた 当てる 当てる 見る ある いくつ CL

(当ててみて、何個あるか。)

(33) 你 猜 猜， 看 猜 得 着 猜 不 着。

あなた 当てる 当てる 見る 当てる PART 着く 当てる NEG 着く

(当ててみて、さて当たるかな?)

朱氏の説明によれば、(32)では“猜猜”の直接の結果は“有几个”に対する回答である。一方、(33)においては、“猜猜”の直接の結果は“猜不着猜得着”に対する回答ではなく、この“猜猜”はある認識を得るための手段であると説明している。朱景松 1998:385 は、“VV，看 VP 不 VP”と“VV 看，VP 不 VP” (“VP 不 VP”を疑問形式の代表として)は基本的に同等の表現だと見なしており、上に述べた(32)と(33)の“猜猜”に関する意味の違いは、“猜”それ自身の語彙的意味の差に起因するものと考えている。だが、もしも朱氏の言うように、“VV，看 VP 不 VP”と“VV 看，VP 不 VP”が全く同義であるとするなら、次の(32)と(33)が不自然な文になるという事実はどのように説明できるのだろうか。

(32) ?你猜猜，看有几个。

(33) ?你猜猜看，猜得着猜不着。

本稿は、(32)と(33)の意味上の違いはやはり構造の形式における差異に起因すると考える。いま議論を簡潔に進めるために、下の(34)(35)で、《見究めの“看”》と《試みの“看”》を含む文の意味構造をもう一度提示する。なお、「未知の事柄」が直後に現れる場合における両者の違いを比較するために、《試みの“看”》の文に関しては、「未知の事柄」が明示されているものに限定する。

(34) 《見究めの“看”》の文：「〈手段〉動作，“看”＋未知の事柄」

(35) 《試みの“看”》の文：「〈手段〉動作＋“看”，未知の事柄」

(34)から分かるように、《見究めの“看”》の文では、〈手段〉動作と「“看”＋未知の事柄」の間にコンマ（音声的にはポーズ）があり、「〈手段〉動作の実行」と「未知の事柄の究明」は二つの段階として分けることができる。二つの段階に分けられるがゆえに、「〈手段〉動作の実行」と「未知の事柄の究明」が意味的にやや離れることもある。(33)の“你猜猜，看猜得着猜不着。”はその一例である。この文において「未知の事柄」である“猜得着猜不着”は“猜猜”の直接の疑問の対象ではない。直接の疑問対象が仮に“有几个”だとすれば、“你猜猜，看猜得着猜不着。”で求めていることは、まずは“猜”を実行して、その結果“有几个”への解答が出る（第一段階）。次に実際の正解と照らし合わせて、“猜得着”か“猜不着”かを見究める（“看”）ことになる（第二段階）。言い換えると、《見究めの“看”》の文では、「〈手段〉動作の実行」が直接「未知の事柄の究明」になっていなくても構わない。「〈手段〉動作」と「“看”＋未知の事柄」の形式上の距離は、意味の上にも反映されていると言えよう。

一方、《試みの“看”》の場合、「手段動作＋“看”」の形式で表現されているのは、「〈手段〉動作の実行」が「未知の事柄の究明」につながっているということである。(35)のように、その後に「未知の事柄」が現れる場合、通常その「未知の事柄」は「〈手段〉動作の実行」によって直接究明される事柄である。(32)の“你猜猜看，有几个。”はその一例で、この文において“有几个”は“猜”の直接の疑問の対象である。(35)の構造では、多くの場合「未知の事柄」が「〈手段〉動作」の直接の対象であるがゆえに、両者の間に意味的に密接な関係が見られるのである。

このように形式を切り口にしてみると、(32')と(33')の不自然さの理由も説明がつく。まず、(32')において“猜猜”という行為の実現はほかならぬ“有几个”への回答であるにもかかわらず、ここで《見究めの“看”》を使うと、「〈手段〉動作の実行」と「未知の事柄の究明」を二つの段階に分けることになり、“猜猜”と“有几个”の意味上の緊密なつながりを敢えて切り離してしまうことになる。さらにもう一つ考えられる原因は、“猜”は、そもそも何かの答えを得るために用いる〈手段〉には適さない行為だということである。つまり、“猜”という行為はそれ自身が《見究める》行為であり、それを〈手段〉として「“有几个”を見究める」ということは、「《見究める》行為を〈手段〉として《見究める》行為を行う」と述べているに等しく、明らかにトートロジーに陥っている。ゆえに、“猜”を「未知の事柄の究明」に意味の焦点が置かれている《見究めの“看”》の文で使うのは不適切に

なるのである。

次に、(33')の問題点は「未知の事柄」の内容の唐突さにあると考えられる。《試みの“看”》の後にコンマでつながられている「未知の事柄」は通常、〈手段〉動作の実行によって直接究明できるはずの事柄である。ところが、(33')では「未知の事柄」が“猜得着猜不着”であり、これは“猜猜”の直接の結果として究明されるはずの答えではない。そのままに意味を取ると、「当ててみて、当たるかどうかを」というような理解しにくい内容になってしまう。ゆえに(33')は自然な文として許容されない。

以上の議論から、《見究めの“看”》と《試みの“看”》は、やはり構造の違いを反映して、意味機能を異にする形式であることが分かる。

4.3.3 形式と意味の相関性

形式が類似する構造は、文脈によってはほぼ同義と理解され、置き換え可能と思われることがどの言語にもある。Langacker1987:39-40の指摘によれば、(36)と(37)は一見置き換え可能な構文のように見えるが、実はそれぞれの表現の重点が異なっている。

(36) He sent a letter to Susan. (X VERB Y to Z)

(彼はスーザンに手紙を送った。)

(37) He sent Susan a letter. (X VERB Z Y)

(36)には“to”があるため、手紙がスーザンに届くまでの道のりに表現の重点があり、(37)では“a letter”が“Susan”の後に置かれているため、表現の重点は、結果としてスーザンがその手紙を所有しているという状態を述べることにある。このように(36)と(37)の構文の間には表現の重点の違いがあるため、必ずしもつねに置き換えられるとは限らない。例えば、(36)と同じ構文の“The shortstop threw a ball to the fence. (遊撃手は柵に向かってボールを投げた。)”は適切な文であるが、(37)と同じ構文の“The shortstop threw the fence a ball.”は非文である。なぜなら、柵は無生物であり、ボールを所有することができないからである。

Langackerの指摘が端的に示すように、たとえ形式に類似性があっても、異なる形式である以上は意味機能が異なると考えるのが妥当である。《見究めの“看”》と《試みの“看”》についても同様のことが言える。両者はともに〈試み〉の表現として置き換えが可能な用例が存在するが、置き換えられない用例も数多くある。従来の研究では、《試みの“看”》の用法を解釈するために《見究めの“看”》を取り上げているため、両者の共通点だけが論

じられてきた。しかし、本稿の考察から明らかなように、実際には《試みの“看”》は単音節動詞の“VV看”という形式に拘束されているため、多くの制限を受けている。一方、複文の後件に使われる《見究めの“看”》は〈手段〉動詞に複雑な述語形式も入り得るので、表現の幅が広い。また、《見究めの“看”》を用いる際、「〈手段〉動作の実行」と「未知の事柄の究明」は二つの段階に分かれているため、「未知の事柄の究明」は意味的に「〈手段〉動作の実行」の直接の結果でなくてもよい。これらの違いは構造に由来すると考えられる。

4.4 まとめ

この章では、従来看過されがちだった《見究めの“看”》と《試みの“看”》の異同に着目し、それぞれの統語的・意味的特徴を考察した結果、次のようなことが明らかになった。まず、両者の意味が成り立つにはともに「未知の事柄」とそれを究明する手段となる動作が必要であるが、統語的には、《試みの“看”》のほうが多くの制限を受けており、〈手段〉動詞の形式がほとんど単音節動詞の重ね型に限られるほか、平叙文においては前方に他の動詞の存在が必須である。一方、複文の後件に使われる《見究めの“看”》は、疑問形式を含む文が後続することとアスペクト助詞と共起しないこと以外、特に制限は受けない。

また、意味的には《試みの“看”》は探求義の動詞との結びつきが強く、特定の動詞と頻繁に共起する現象が見られる。《見究めの“看”》の〈手段〉動詞にはそのような傾向は見られない。

同じ「試み」の表現ではあっても、《見究めの“看”》は「未知の事柄」を究明する側面、そして《試みの“看”》は手段となる動作を試みる側面にそれぞれ焦点が置かれており、同義の表現とは言えない。

最後に、「未知の事柄」が後続する場合における両者の置き換えの可否については、本稿では形式の違いの観点から分析を試み、「〈手段〉動作の実行」と「未知の事柄の究明」が二つの段階に分けられるかどうかで、《見究めの“看”》と《試みの“看”》が使い分けられていると結論付けた。形式と意味の切り離せない関係がここからも見て取れる。

第5章 〈試み〉表現“VP 试试”について

前章では視覚動詞の「見る」という意味から派生した《見究めの“看”》と《試みの“看”》の異同について考察を行った。前述した通り、《試みの“看”》は〈試み〉を表すマーカールと見なされているが、それに類似した機能を持つ表現として、“VP 试试”の“试试”が挙げられている。本章では連動構造の典型性という観点から“VP 试试”における“试试”の文法化の現象を考察し、“VP 试试”の一部の用法において“试试”が〈試み〉のマーカールに近い性質を見せていることを主張する¹。

5.1 “试试”は〈試み〉の新しいマーカールか否か

〈試み〉を表すマーカールとして、先行研究でしばしば考察されてきたのは第4章で取り上げた《試みの“看”》、つまり“想想看”や“试试看”の“看”である。この“看”は〈試み〉を表す語気助詞と見なされており、現代中国語においては、単音節動詞の重ね型に後続する構造(“VV 看”)で最もよく現れる。陸俭明 1959 では《試みの“看”》を「現代中国語における新しい語気助詞“看”」という位置づけをしているが、张伯江・方梅 1996: 140-153 では、現代中国語のベースとなる北京方言において、《試みの“看”》がほとんど使われていないことを指摘したうえで、《試みの“看”》よりも「新しい語気助詞」と称するに相応しいのは、“VP 试试”の“试试”であると言う。つまり、北京方言では“试试”が〈試み〉を表すマーカールとして用いられているのである²。以下、先行研究の論考を踏まえて、“VP 试试”に関する分析の問題点を指摘する。

5.1.1 “VV 看”の衰退と“VP 试试”の出現

まず、先行研究の仮説によれば、通時的に見て、北京方言における《試みの“看”》が衰退した最大の原因は、〈試み〉が含意される動詞の重ね型 VV が現れたからである。VV は主に「時間の短さ」を表すが、〈試み〉の意味も持ち合わせていると言う(张伯江・方梅

¹ 本章の以下の議論は张佩茹 2013 をもとに、加筆・修正をおこなったものである。

² 宫田 1971:890-892 では、『元曲選』をはじめ、『金瓶梅』『醒世姻缘传』『红楼梦』などの作品に《試みの“看”》の用例が殆ど見られないことから、北京を中心とする北方方言区ではなかく《試みの“看”》の形成をみなかったと指摘する。さらに、『金瓶梅』などの小説に《試みの“看”》の代わりに使われた表現は、“试”のかさね式、つまり“试试”であると実例を挙げて説明する。この考察結果は現代北京語における“试试”の用法につながると考えられる。

1996:142-145)³。つまり、〈試み〉を含意する VV は“VV 看”とほぼ同義に捉えられるため、〈試み〉を表す際に、「観察する」や「感じ取る」という語彙的意味から〈試み〉を表現するようになった《試みの“看”》が形式的に〈試み〉を表す VV に取って代わられたのである。また、北京方言では〈試み〉を強調する場合、“VP 试试”のように動詞句に“试试”を付けると言う。

これらの指摘は評価すべきである一方、いくつか問題がある。まず一つ目の問題は、VV が〈試み〉を含意するのは北京方言に限ったことではない。現代中国語の共通語（いわゆる“普通话”）にも見られる現象である。張伯江・方梅 1996 では論点を北京方言に絞っているが、それよりも広く捉えるべきである。もう一つの問題は、VV という形が「ちょっと～してみる」「試しに～してみる」といった〈試み〉の意味を含意するとされているが、VV は必ずしも〈試み〉を意味するというわけではない。例えば、以下の(1)(2)の VV には〈試み〉の読みが生じない。

(1) 等拉拉答应下来，李斯特又说：“装修 很 忙， 日常 行政 事务

リフォーム とても 忙しい 普段の 行政 業務

你 还是 要 花 精力 管 管。不然难免有不自觉的员工

あなた やはり する必要がある 使う 気力 管理する 管理する

会借口太忙来搪塞本职，…（略）…”

（《杜拉拉升职记》，p.52）

（拉拉が承知すると、李斯特はまたこう言った。「リフォームが忙しくても、通常の業務はやはり力を入れて管理しなければなりません。さもないと、自覚のないスタッフが忙しさを言い訳に職務を怠けてしまいます…（略）。」）

(2) 王伟假装没注意她在用“您”称呼自己，说：“上次是因为要给你赔情，这次 就

今回 だけ

是 朋友 之 间 吃饭 聊天， 放松 放松， 就

である 友達 PART 間 食事する おしゃべりする リラックスする リラックスする だけ

你 和 我。”

（《杜拉拉升职记》，p.63）

あなた と わたし

（王伟は彼女が「あなた様」と自分と呼んでいることに気付かないふりをしてこう言った。

「前は謝るために誘ったんだけど、今回は友達として、食事をしながらおしゃべりでも

³ 北京方言ではなく、共通語を通時的に考察する他の先行研究でも同じ見解を示している。つまり、《試みの“看”》の衰退は、〈試み〉を含意する動詞の重ね型 VV の出現と関連しているのである（宮田 1971:149、吳福祥 1995:165-166）。

して、ちょっとリラックスするだけです、あなたと私だけで。)

また、「VV が〈試み〉を含意する」ということを最大限に解釈すると、すべての動詞を VV の形にすれば、〈試み〉を表現できる、という予測が立てられる。しかしながら、実際に VV はそれほど強力な文法形式ではない。例えば、「食べる」動作を意味する“吃”や「飲む」動作を意味する“喝”は、以下の(3)(4)に示されているように、VV の形だけでは適格な〈試み〉の表現にはならない。(3')(4')のように《試みの“看”》を入れるか、もしくは(5)のように「味わう、味見する」ことを意味する“尝”を使うことによって適格な文になる。

(3) 这 是 我 做 的 菜, *你 吃 吃。

これ である わたし 作る PART 料理 あなた 食べる 食べる

(「これは私が作った料理です。食べてみて。」という意味で)

(3') 这是我做的菜, 你 吃 吃 看。

あなた 食べる 食べる 見る

(これは私が作った料理です。食べてみて。)

(4) 这 种 茶 味道 很 好, *你 喝 喝。

これ 種類 お茶 味 とても よい あなた 飲む 飲む

(「このお茶はおいしい。飲んでみて。」という意味で)

(4') 这种茶味道很好, 你 喝 喝 看。

あなた 飲む 飲む 見る

(このお茶はおいしい。飲んでみて。)

(5) 这是我做的菜/这种茶味道很好, 你 尝 尝。

あなた 味わう 味わう

(これは私が作った料理です/このお茶はおいしい。味見してみ。)

郭春贵 2003:8-9 にも指摘があるように、VV が〈試み〉の意味を持つか否かは動詞の語彙的意味や文脈に依存しているため、VV は〈試み〉を表す専用の文法形式であるとは見なしがたい。VV は本来、「動作の持続時間の短さ」や「動作の回数の少なさ」といった意味を表し、そこから〈試み〉の意味が派生したが、VV だけで〈試み〉の意味が必ず保証されているというわけではない。したがって、形式的に〈試み〉を表す VV が完全に“VV 看”に取って代わったわけではなく、明示的に〈試み〉を表すためには、やはり“VV 看”や“VP 试试”を用いなくてはならないのである。

5.1.2 “VP 试试”の先行研究とその問題点

《試みの“看”》が語気助詞である、ということは辞書にも明記されるほど広く認められている。また、先行研究の数も少なくない（陆俭明 1959、蔡镜浩 1990、吴福祥 1995）。その一方、“VP 试试”における“试试”の文法化については、まだ十分に研究されていない。“VP 试试”の用法を論じた张伯江・方梅 1996 では、“试试”の文法化について以下のように分析している。“VP 试试”のVPが「V+動作量」からなる場合、形の上では連動構造を取っており、VPと“试试”はどちらも動作量を表すものの、両者は意味機能上対等ではないと言う。歴史的に見て“试试”の方は“试一试”から虚化した形式であり、「V+動作量」よりも意味機能が弱い。そのため、意味フォーカスは「V+動作量」、つまりVPにあり、このとき“试试”は〈試み〉を表す語気助詞になっていると説明している。この分析は、動詞に関わる数量表現を考察した先行研究で得られた結論と一致しており、説得力があると思われる⁴。

しかしながら、この分析にもまだいくつか問題点が残っている。まず、张伯江・方梅 1996: 149 で取り上げられた「V+動作量+“试试”」の具体例に“跳跳试试（踊ってみる）”のような“VV 试试”が入っているが、“跳跳”も“试试”も“V-V”から虚化したVVであるため、意味的にどちらが強いか弱いかは、形式だけを頼りにしては判断しきれない。これは別の側面から説明しなければならない。もう一つ、より根本的な問題は、“VP 试试”の“试试”は完全に〈試み〉を表すマーカーに成り得ているかどうか、という問題である。結論を先に言うと、“VP 试试”において“试试”は文法化の過程を経てはいるが、動詞性を少なからず保持しているがために、完全な文法的マーカーになっているとは言いがたい。

本稿では、先行研究と異なる視点を採り入れながら、コーパスのデータやインフォーマント調査の結果に基づいて、“VP 试试”の“试试”が文法化した要因を考察し、さらに“试试”がなぜ完全な文法的マーカーに成り得ていないかを考える。

5.2 連動構造におけるVP₂“试试”の文法化

“VP 试试”は連動構造の形を取りながらも、一部の“VP 试试”の用法は典型的な連動構造と異なる性質を見せているため、もはや連動構造とは言えなくなっている。本節では「連動構造からの逸脱」という観点から“VP 试试”における“试试”の文法化について

⁴ 李宇明 2000:29-30 では、「V+動作量」は動詞の外部から量概念を付け加える形式で、量概念が動詞そのものに内包されている重ね型VVの方が「V+動作量」よりも文法化の度合いが高いと結論づけている。

考察する。

5.2.1 “VP 试试”の“试试”が文法化した要因

連動構造 VP₁VP₂のうち、VP₂の位置を占める動詞の重ね型“试试”は名詞性の目的語以外に、述詞性の目的語（主に正反疑問形式）を取ることが可能である。以下の(6)(7)を見られたい。

(6) 伸 出 手 试 试 水温

伸ばす 出す 手 試す 試す 水温

(手を出して水温を確かめる)

(7) 伸出手试试 烫 不 烫

熱い NEG 熱い

(手を出して熱いかどうかを確かめる)

さらに、連動構造において VP₂の“试试”が目的語を取らない場合もある⁵。

(8) 唱 一 首 歌 试 试

歌う 1 CL 歌 試す 試す

(一曲歌ってみる)

(9) 再 拉 拉 试 试

再び 引っ張る 引っ張る 試す 試す

(もう少し引っ張ってみる)

“试试”がある以上、(8)の「一曲歌う」ことや(9)の「もう少し引っ張る」ことは、何かを知るための動作行為であることが分かる。しかし、“试试”に目的語が後続する(6)(7)とは異なり、(8)(9)ではその何かが言語化されていない。統語的に明らかな目的語がないことが“试试”の動詞性を失う引き金となり、このことが“试试”を〈試み〉を表すマーカ―へと一歩踏み出させる要因となったと考えられる。以下、“试试”の文法化のプロセスを考察する。

⁵ 具体的に何を試すかを明示する場合、“唱一首歌试试效果/声（一曲歌って効果/声を試す）”や“拉拉试试韧劲（引っ張って靱性を試す）”のように“试试”に目的語をつけることも可能ではあるが、実際のデータでは“唱一首歌试试”や“拉拉试试”のように目的語を伴わない用例がほとんどである。

5.2.2 “VP 试试”の下位分類

VP と“试试”の意味関係を基準に、“VP 试试”は以下の五つに分類することができる。なお、“VP 试试”における“试试”の実義性を検証するために、“试试”の目的語になりうる名詞成分を X で記号化する。

A 構造：VP+ “试试” +X

意味関係：VP は身体部位による動作で、その動きによって具体的なモノや状態、もしくは抽象的なモノを試す。

用例：“伸 出 手 试 试 他 的 额 头”

伸ばす 出す 手 試す 試す 彼 PART ひたい

(手を出して彼の額を確かめる)

“上 场 试 试 身 手”

出場する 試す 試す 技量

(試合に出て技量を試す)

B 構造：VP(具象名詞 X が内包される)+ “试试”

意味関係：VP はおおむね身体部位による動作で、VP に“试试”の対象が含まれている。例えば、以下の用例ではそれぞれ“这件衣服”“戒指”が試す対象である。

用例：“穿 上 这 件 衣 服 试 试”

着る 付け加える これ CL 服 試す 試す

(この服を着てみる)

“把 戒 指 套 在 左 手 无 名 指 上 试 试”

～を 指輪 はめる に 左手 薬指 上 試す 試す

(指輪を左手の薬指にはめてみる)

C 構造：VP(抽象名詞 X が内包される)+ “试试”

意味関係：VP は“试试”の方法、手段などを表す。VP の V は動詞性が弱化しているため、介詞と見なされている⁶。VP に含まれている名詞は“方法”“办法”

⁶ “用别的方法试试”の“用”が介詞であるならば、厳密に言えば、“用别的方法试试”は連動構造ではない。しかし、中国語において介詞の多くは動詞に由来し、まだ動詞性を保持している介詞もあるがゆえに(“在”“跟”など)、介詞と動詞の境界はそうはっきりと線を引くことができない。“用”にも動詞性が少なからず残っている。そのため、VP₁の動詞が“用”であるVP₁VP₂を「周辺的な連動構造」と位置付ける先行研究も存在する(高増霞 2005:30)。“用别的方法”と“试试”の間の時間継起性における特徴は、“VP 试试”の“试试”に見られる動詞

など、何かをやり遂げるための方法を表す抽象名詞である。

用例：“用 别的 方法 试试”

～に用いる 他の 方法 試す 試す

(他の方法でやってみる)

“照 这些 办法 试试”

～のように これら 方法 試す 試す

(これらの方法どおりにやってみる)

D 構造：V+数量詞+名詞+“试试”

意味関係：「V+数量詞+名詞」を手段として何かを試す、という意味や「V+数量詞+名詞」自体を試す、という意味が読み取れる。

用例：“装 一个 防毒 软件 试试”

取り付ける 1 CL ウイルス防御 ソフト 試す 試す

(ウイルス対策ソフトを一つインストールしてみる)

E 構造：VP(時間量や動作量を含む)+“试试”

意味関係：試しにVPを試してみる。

用例：“学 三 个月 试试”⁷

学ぶ 3 CL 月 試す 試す

(3ヶ月間学んでみる)

“走 几 步 试试”

歩く いくつ 歩 試す 試す

(何歩か歩いてみる)

“修 一下 试试”

修理 ちょっと 試す 試す

(直してみる)

“投 个 篮 试试”

投げる CL バスケット 試す 試す

(シュートしてみる)

性の弱化を理解するのに有効だと思われるので、あえて“用别的方法试试”などを“VP 试试”の一類として取り上げる。

⁷ 「V+時間量+“试试”」について、張佩茹(2013:377)ではD構造の一つとして分類するが、“来/去”やアスペクト助詞“了”と共起しにくいことを考えると、むしろE構造に近いため、修正を加えた。なお、“来/去”や“了”との共起について、詳しくは後述する。

“读 一 读 试 试”

読む ちょっと 読む 試す 試す

(読んでみる)

“踩 踩 试 试”

踏む 踏む 試す 試す

(踏んでみる)

以下、連動構造の典型性を切り口にして A 類～E 類を考察する。

5.2.3 連動構造の典型性その 1 —— 継起的時間関係

5.2.2 に挙げた A 類～E 類は、連動構造の典型性において違いが見られる。中国語において、典型的な連動構造 VP₁VP₂ は、実世界の時間軸に沿って生じた動作行為がそのままの順番で並ぶ「時間順序原則」(PTS)に従っている(Tai 1985:51)。つまり VP₁VP₂ に継起的時間関係が見られるということであり、この点において並列関係と異なる。以下に挙げる例で説明すると、(10)の“走过去”と“打开门”には継起的時間関係があるため、(11)のように順番を入れ替えると、一連の動作の時間順が変わってしまう。一方、(12)の並列関係にある“看看书”と“听听音乐”は順番が変わっても、(13)から分かるように、文の伝達する意味はさほど変わらない。

(10) 他 走 过去 打开 门。

彼 歩く 向こうへ行く 開ける ドア

(彼は歩いて向こうに行って、ドアを開ける。)

(11) 他打开门走过去。(彼はドアを開けて、歩いて向こうに行く。)

(12) 我 一 有 时间 就 看看书, 听听 音乐。

私 すると ある 時間 すぐ 読む 読む 本 聴く 聴く 音楽

(私は時間ができると本を読んだり、音楽を聴いたりします。)

(13) 我一有时间就听听音乐, 看看书。

(私は時間ができると音楽を聴いたり、本を読んだりします。)

VP₁VP₂における継起的時間関係の有無を基準にして前述の A 類～E 類を分類すると、A 類がもっとも典型的な連動構造であることが分かる。“伸出手试试他的额头”の用例で説明すると、手を出して、伸ばして、彼の額まで届いた時点で次の動作、つまり彼の額を触って確かめる行為が発生する。VP₁が完了した時点、もしくはある目標に達した時点で VP₂

が続く、という明確な継起的時間関係が見られる。なお、VP₁VP₂の継起的時間関係は、VP₁が telic であることからもうかがえる。“伸出手”“上场”はいずれも限界性が含意される VP である⁸。

次に、B 類にもある程度の典型性が保証されている。“穿上这件衣服试试”を例に取ると、「服を身につけた時点で、服の大きさなどを確かめる」という継起的時間関係が確認できる。また、“穿上”の“上”をもって動作の限界性を表している。しかしながら、「服を着る」ことは同時に「服を試す」という意味にも取れる、という点では A 類と異なる⁹。

C 類では、“VP 试试”における VP と“试试”の継起的時間関係が薄れている。前掲した“用别的方法试试”の用例から分かるように、両者はほぼ同時に生起する動作行為である。このような非典型的な連動構造では、VP₁VP₂に概念レベルの継起的時間関係は見られないが、認知レベルでは〈背景+目標〉という前後関係が認められる(高増霞 2005:30)。C 類“VP 试试”の VP が背景化することと、VP が介詞へと弱化することの間に関連性がうかがえる。

D 類に関しては、VP と“试试”に継起的時間関係が確認できる解釈と確認しにくい解釈があり、二通りの読みができる。例えば、一つの読みとして“装一个防毒软件试试”は「ソフトをインストールする」ことが先で、インストールしたあとで「そのソフトの効果を確かめる」という継起的時間関係が考えられる。しかしながら、それと同時に「ソフトを試しにインストールする」という意味にも読み取れる。

最後に、E 類については、VP と“试试”の継起的時間関係が明確ではない。VP は個別のものとして認識できる名詞性の目的語を伴わないため、VP してから具体的な何かを試す、という意味が読み取りにくい。E 類の“VP 试试”は「動作をある期間にわたってやり続ける」、もしくは「動作を少し行う」ということを表すので、“VP 试试”はその動作を試しにやると理解されやすい。

以上の論点をまとめて図式にすると、継起的時間関係から見た A 類～E 類の連動構造と

⁸ CCL コーパスの用例では、“伸手试了试门(手を伸ばしてドアを確かめた)”など、VP₁の“伸手”に空間位置の移動結果を表す方向補語がない用例もあるが、それでも VP₁の動作が先に行われて、手がドアに届く時点でドアを触ることになるので、VP₁の動作の終了(ドアまで手を伸ばす)に続いて VP₂の動作が行われる、というはっきりした継起的時間関係が見られる。

⁹ B 類“VP 试试”の VP には“穿上(着る)”“戴上(かぶる、身につける)”など、実際に何かを身につける用例が多いが、他に“(张三的眼镜)我借来试试([张三のメガネを]借りてきて[そのメガネを]試す)”という、試す対象を手に入れることに関わる動詞が使われることもある。VP が“借来(借りてくる)”“买来(買ってくる)”“拿去(持っていく)”などの場合は、B 類“VP 试试”における VP と“试试”の継起的時間関係が明らかである。

しての典型性の強弱は以下のようなになる。

(強) A類・B類 > C類・D類 > E類 (弱)

5種類のうち、とくにE類が典型的な連動構造から大きく逸脱していることが分かる。

5.2.4 連動構造の典型性その2——“来/去”や“了₁”との共起状況

連動構造の典型性は、5.2.3で論じたVP₁VP₂間の継起的時間関係だけにとどまらず、文法形式においても検証できる。以下、VPと“试试”の間に“来(来る)”や“去(行く)”が挿入できるか否か、そして「完了」を表すアスペクト助詞“了”(以下、“了₁”とする)との共起状況をテストとして使い、“VP 试试”のA類～E類、とりわけE類と他の類との違いについて考察する。

まず、典型的な連動構造、つまり明らかな継起的時間関係で結ばれているVP₁VP₂は大きく二つに分けられる。一つは単なる時間順に生じた一連の出来事であり、もう一つはVP₁が〈手段〉で、VP₂が〈目的〉という意味が読み取れる出来事である¹⁰。前者の例は“吃完饭看书(食事を終えて本を読む)”，そして後者の例は“找个袋子装上(袋を探してきて[その中に]入れる)”が挙げられる。両者のうち、“VP 试试”は後者に入る。なぜなら、何かを試すということに意図性が存在する以上、VPと“试试”を、意図とは無関係に偶然に時間順に生起する動作行為と考えることはできないからである。

“VP 试试”のVPと“试试”に〈手段〉と〈目的〉の意味関係があれば、その間に目的性を表す“来”もしくは“去”を挿入できる。以下、前掲の用例で検証する。

(14) A類：伸出手去试试其他的额头

(15) B類：穿上这件衣服来试试

(16) C類：用别的方法来试试

(17) D類：装一个防毒软件来试试

(18) E類：*学三个月来试试、*走几步来试试、*修一下来试试

*投个篮来试试、*读一读来试试、*踩踩来试试

A類～D類の用例では問題なくVPと“试试”の間に“来/去”を挿入できるが、E類の用例では挿入できない。この検証結果から、連動構造の典型性におけるA類～E類の違いを別の角度で観察することができる。まず一つ目は、C類とD類についてである。5.2.3に

¹⁰ 高増霞 2005:27 ではVP₁が〈前提〉を表し、VP₂が〈目的〉を表すと分析しているが、〈前提〉は一般性に欠けるため、本稿では〈手段〉の用語で分析を行う。

において C 類と D 類は継起的時間関係から見れば A 類ほど明らかではない、ということから、典型的な連動構造からやや逸脱していると説明した。しかし、C 類と D 類では VP と“试试”の間に“来/去”が挿入できるということから、意味関係から見れば連動構造の典型的な〈手段〉と〈目的〉という関係が存在していることが分かる。高増霞 2005:30 が指摘する「認知レベルでの〈背景+目標〉という前後関係」がこの検証結果を説明するのに有効である。二つ目は、A 類～E 類のうち、とくに E 類において“VP 试试”は「〈手段〉+〈目的〉」のように二段階に分けられる動作行為ではないことが分かる。E 類の“VP 试试”が一体化し、「試しに VP をやってみる」という読みが強くなっている。そこに“VV 看”に相通じる特徴が見られる。

次に“了₁”との共起状況について考察する。一般に「〈手段〉+〈目的〉」の意味関係を有する連動構造において、VP₁VP₂が共に完了した動作行為である場合、“了₁”は後ろの動詞フレーズ、すなわち VP₂に使われる¹¹。以下、前掲の(10)に“了₁”を入れて検証する。

(19) 他 走 过 去 打 开 了 门¹²。

彼 歩く 通る 行く 開ける 開く ASP ドア

(彼は歩いて向こうに行って、ドアを開けた。)

(20) *他走了过去打开门。

(21) 他走了过去，打开了门。(彼は歩いて向こうに行った、そしてドアを開けた。)

(19)(20)から分かるように、〈手段〉と〈目的〉という関係が見られる VP₁と VP₂をひとまとまりとして言語化する場合、“了₁”は VP₂と共起する。なお、(21)のように VP₁と VP₂両方に“了₁”をつけることもできるが、そうすると連動構造ではなくなり、それぞ

¹¹ 先行研究では VP₂が〈目的〉を表す場合、“了₁”は VP₂に付くという報告がある(赵淑华 1990:7)。また、VP₁VP₂間の意味関係を考慮せずに、連動構造を全体的に見る場合、コンテキストの要素を考慮した邹韶华・张俊萍 2000:125 によると、小説で考察した連動構造の用例の 85%弱は VP₂に意味の中心がある。この検証結果と赵淑华 1990:5 で言及された全体の用例のうち、“了₁”が VP₂に付くのが 8 割弱 (119 例のうちの 92 例) だったということに合わせてみると、連動構造において、多くの場合 VP₂のほうがが意味の中心、すなわち主な動詞句であることを示唆している。

¹² 前掲の(10)(11)のうち、(11)の“打开门走过去”よりも(10)の“走过去打开门”のほうが VP₁VP₂に〈手段〉と〈目的〉の読みが強くなる。「移動」は多くの場合、ある目的を持つ動作であると考えられるからである。池田 2005:149 では、VP₁が方向補語を伴う動詞句である場合、連動構造 VP₁VP₂は単に二つの動作が時間的に連続しているのではなく、VP₁は VP₂のために舞台を設置するという働きをし、VP₁に含まれている“来”“去”は VP₁VP₂を「繋ぐ」機能を有していると分析する。

れが独立性の高い節になる。

以下、前掲の A 類～E 類の用例に“了₁”を入れて検証する。

(22) A 類：伸出手试了试其他的额头

(23) B 類：穿上这件衣服试了试

(24) C 類：用别的方法试了试

(25) D 類：装了一个(防毒软件)试试

(26) E 類：?学了三个月试试、走了几步试试、?修了一下试试

?投了个篮试试、?读了一读试试、?踩了踩试试

A 類～C 類では VP₂ “试试” が “了₁” と共起するが、D 類と E 類では状況が異なる。複数のネイティブスピーカーを対象に、例文の適切度の調査を行った結果、D 類と E 類の“VP 试试”では、VP₁に“了₁”が入る用例が自然だと感じるインフォーマントがいる一方、VP₁と VP₂両方に“了₁”が入る方が自然であると判定したインフォーマントもいた¹³。また、どちらでもなく、“试着 VP”に書き直して、VPに“了₁”をつけるか、そもそも“试试”を明言する必要がない、という意見も出た。なお、自然度についてインフォーマントの半数以上が「やや不自然」「不自然」と判断した用例には「?」をつけた。インフォーマント調査の詳細は後述するが、D 類と E 類の例文の許容度に関してネイティブスピーカーの意見が分かれるところが興味深い。

A 類～C 類では“VP 试了试”が自然であることから、A 類～C 類が典型的な連動構造であることが分かる。また、既然の場合に A 類～C 類の“试试”が“试了试”になることは、“试试”に歴然とした動詞性がある証拠にもなる。一方、D 類と E 類の“VP 试试”では、“了₁”が VP に、もしくは VP と“试试”の両方につくということは、D 類と E 類が典型的な「〈手段〉 + 〈目的〉」類の連動構造から逸脱していることを物語っている¹⁴。

“了₁”が VP だけにつく場合は、“VP 试试”の VP がアスペクトマーカを有する動

¹³ 例文の適切度の判定に協力して頂いたネイティブスピーカーは、20代から50代までの男女あわせて計14名である(北方出身者12名、南方出身者2名)。

¹⁴ “VP 试试”における“了₁”との共起は、VPの形式および意味とも深く関係する。A類とB類は多くの場合、VPに空間位置の移動結果を表す方向補語があるため、それ自身が完了表現として成立する。C類に関してはVPの動詞性が弱化しているため、“了₁”は主要動詞である“试试”につく。一方、D類とE類ではVPに目的語の数量や動作量に関わっているため、既然の場合“了₁”はVPにつきやすい。“了₁”と数量表現が共起しやすいことは、よく知られている中国語の特徴である。登場人物の動きを描写する「過程描写文」での“了₁”の用法について、木村2012:179では次のような指摘がある：「一区切りの動きや変化の既実現を明示するタイプは一般に、数量表現を伴うか、あるいは動詞の重ね型を用いる。」言い換えれば、既実現を明示する場合、一般に数量表現や動詞の重ね型に“了₁”がつくのである。

詞フレーズになるため、“试试”の動詞性の弱化が確認できる。一方、“了₁”がVPと“试试”の両方につく場合、“试试”はまだ動詞性を強く残していることになるが、VP₁とVP₂の両方が“了₁”と共起すれば、もはや連動構造ではない。いずれにせよ、“了₁”との共起状況において、D類とE類の“VP 试试”は「〈手段〉+〈目的〉」類の連動構造から逸脱しているということが言える。

以上の論点をまとめると、典型的な連動構造に見られる「継起的時間関係」、さらに〈手段〉と〈目的〉の関係にあるVP₁VP₂間への「“来/去”の挿入」や「“了₁”のVP₂との共起」という特徴が揃っていないという点で、D類とE類、とりわけE類は典型的な連動構造とかなり異なる性質を見せている。

5.2.5 命令文や意志表明文にみるE類“VP 试试”の特殊性

《王朔文集1》から《王朔文集4》の“VP 试试”の用例を集めた結果、合計13例のうち、すべてが命令文もしくは意志表明文であった¹⁵。5.2.2で取り上げた“VP 试试”の下位分類で言うと、D類とE類がほとんどである。すなわちVPが何らかの数量表現を伴っているものであった（便宜的に動詞の重ね型も数量表現の一つと見なす）。以下の用例の下線部は“VP 试试”の例である。

(27) 片刻，马林生说，“你还别瞧不起你爸，你摊上我这么个爸还真算你有福气。换 个

换える CL

人家 试试，不说别的，就冲你和我说话这口气，早大耳刮子抡你了。”

家庭 試す 試す

(〈我是你爸爸〉《王朔文集3 矫情卷》，p.256)

(しばらくすると、馬林生が言った。「この親父をバカにするんじゃないぞ。こんな親父がいてくれて、ついてると思え。よその家に置き換えてみる。何よりも、父親に対するその口のきき方だけで、とっくに顔をひっぱたかれてるぞ。)」

¹⁵ 《王朔文集4》の〈千万别把我当人〉から以下の用例が発見されたが、特殊であるため、今回の考察対象から外した。

“把我们那金兀术找来。”(「われわれのあの金兀術を見つけてきて。)」

“找试试吧。”老太太扔掉烟，用脚碾灭，瞧瞧元豹。

(「探してみよう。」老婆はたばこを捨て、足で火を踏み消したあと、元豹をちらっと見た。)

CCL コーパスのデータもあわせても、「単音節V+“试试”」の用例はこの一例しかない。今回の調査によると数量表現を伴わない「二音節V+“试试”」でも容認度が高くはなかった。そのため単音節の裸の動詞はなおさら不自然さを感じるということであろう。仮に「単音節V+“试试”」の生産性が高ければ、それは“试试”がより一層文法化し、〈試み〉のマーカーとなった証拠にはなるが、現時点ではまだごく稀な用例であると言わざるをえない。

- (28) 阿眉大失面子，含着泪发狠地洗牌，说：“你还要打我，我妈妈都没打过我，你倒打我打上了瘾。你 再 动 我 一 下 试 试，非跟你拼了。”

あなた 再び 触れる わたし ちょっと 試す 試す

(〈空中小姐〉《王朔文集 1 纯情卷》， p.31)

(面子を潰された阿眉が目には涙を浮かべながら、勢いよくトランプをシャッフルして言った。

「あたしに手まであげる気なの。うちのお母さんでさえあたしを叩いたことがないのに、あなたはあたしをなぐることがくせになっちゃったんじゃない。あたしにちょっとでも触れてみてごらんさい。ただじゃおかないわよ。」)

《王朔文集》から抽出した“VP 试试”は命令文や意志表明文に限定されているが、命令文や意志表明文では D 類や E 類の“VP 试试”だけではなく、連動構造の VP₁ に数量表現が伴い、そして VP₂ が VV である用例が他にも存在する。

- (29) “我教你个重温旧梦的法儿，随便 拣 个 海 军 码 头 遛 遛，你会碰

選ぶ CL 海軍 埠頭 散歩する 散歩する

见成千上万歪戴着帽子，晒得黢黑的小伙子，可心挑吧。”

(〈空中小姐〉《王朔文集 1 纯情卷》， p.18)

(「昔をしのぶ方法の一つ教えてやろう。適当に海軍埠頭の一つ選んでそこで散歩でもすれば、帽子を斜めにかぶり、真っ黒に日焼けした何千何万の若い男性に出会えるさ。気に入ったのにしたら。」)

- (30) “出了什么事了？”他看我脸色。

“没事，想 找 个 人 聊 聊。”

探す CL 人 おしゃべりする おしゃべりする

(〈一半是火焰，一半是海水〉《王朔文集 1 纯情卷》， p.156)

(「何かあったの？」彼は私の顔色を伺う。「いや何でもない。誰かとちょっとおしゃべりしたいだけ。」)

しかし、構造上の類似性が高いにもかかわらず、本稿でいう E 類の“VP 试试”の用例である(28)は(29)(30)とは決定的な違いがある。まず、VP₁に含まれる目的語が VP₂の VV にとってどういう意味役割であるかを見ると、(29)(30)ではそれぞれ「場所」と「関与者」であることが分かる。(29)の“拣个海军码头遛遛”では、“海军码头”は“拣”の対象であると同時に“遛遛”の場所でもある。そして(30)の“找个人聊聊”では、“(一)个人”は“找”

の対象であると同時に“聊聊”の関与者でもある。このように、VP₁に含まれる目的語はそれに続くVVとなんらかの意味関係を持つ。次に、(29)(30)は“拣个海军码头”と“遛遛海军码头(海軍埠頭を散歩する)”、そして“找个人”と“[跟他]聊聊([彼と]おしゃべりする)”のように二つの動作行為に分けることができる。一方、(28)に関しては、VP₁の目的語はVP₂の動詞“试试”と直接関連しない。VP₁の目的語が“试试”の対象(“试我(私を試す)”)や関与者(“[跟我]试([私と]試す)”)という意味役割を担うのではなく、“再动我一下”といったVP₁全体が“试试”と関連するのである。ここでの“试试”はVP₁全体、すなわち動作を指向しているため、これを契機として“跳跳试试(踊ってみる)”や“唱唱试试(歌ってみる)”のようにVP₁がVVの形で現れる用例へと発展していくことになる。

なお、(27)のようなD類の“VP 试试”の用例は、(28)と(29)(30)の中間的な性質を見せており、どちらの説明も可能である。つまり、「よその家に換えて、その家で試す」という読みと、「よその家に換えることを試す」という読みができるのである。

また、5.2.3で論じた典型的な連動構造の特徴にも関連するが、(29)と(30)のVP₁VP₂では継起的時間関係が明らかなため、VP₁とVP₂の順序を入れ替えることができない。“拣个海军码头遛遛”を“*遛遛拣个海军码头”、もしくは“找个人聊聊”を“*聊聊找个人”に変えると非文になってしまう。一方、(28)の場合、“再动我一下试试”を“再试试动我一下”に変えても非文にはならない。ただし、構造が変わってしまううえ、意味も完全に同等なものではないということを指摘しておきたい。“试试VP”は連動構造ではなく、「動詞+目的語」の動目構造である。また、“VP 试试”と“试试VP”にはニュアンスの違いがあり、前者には脅迫の語気が含まれる場合があるが、後者にはそれほど強い語気は含まれない。以下、コンテクストに現れる“VP 试试”と“试试VP”の違いについて考える。

5.2.6 “VP 试试”と“试试VP”の違い

《王朔文集1》から《王朔文集4》、そしてCCLコーパスに収録されている老舎の作品でD類とE類の“VP 试试”と“试试VP”の用例を集めた結果、実際にほとんどが“VP 试试”の用例であった¹⁶。“试试VP”の用例は1例しか見つかっていない。以下の(31)である。

¹⁶ 张伯江・方梅 1996:150では“VP 试试”の“试试”が北京方言で〈試み〉のマーカーになったと指摘している。また、老舎と王朔の作品に現代北京方言が反映されていると広く認められているため、“VP 试试”と“试试VP”の使用状況については、老舎と王朔の作品をデータとして使用している。

(31) 韵梅从屋里出来，他赶紧说了话：“我，祁太太，我没教他们用鞭子抽人，可是我也拦不住他们！他们不是我手下的人，是区署里另派来的。他们拿着皮鞭，

彼ら 持つ ASP 革の鞭

也就愿意试试抢它一抢！你不要

も ~ならば…する したいと思う 試す 試す 振り回す それ ちょっと 振り回す

紧了吧？祁太太！告诉你，我甭提多难过啦！…(略)…” (CCL 语料库)

(韻梅が部屋から出たとたんに、彼が口を開いた。「祁家の奥様、私は彼らに鞭で人をひっぱたくことなどさせませんでした。でも、彼らを止めることもできませんでした。彼らは私の部下ではなく、区の部署から派遣されてきた者です。彼らは革の鞭を持つと、それを振り回すことを試してみたくなるのです。もう大丈夫でしょうか。奥様、正直に申し上げますと、私はとても悲しんでいるのです。…(略)。)

(31)と同じく3人称主語の“VP 试试”の用例(32)を比較してみると、両者の違いが浮き彫りになる。

(32) 他开始喊嗓子：立——正，齐步——走……。他不知道今天是否由他喊口令，可是有备无患，他须喊一喊试试。他的嗓音很尖很干，

彼 すべきである 叫ぶ ちょっと 叫ぶ 試す 試す

连他自己都觉得不甚好听。可是他并不灰心，还用力的喊叫；只要努力，没有不成的事，他对自己说。 (CCL 语料库)

(彼は喉ならしをし始めた。「気をつけ！前へ進め！」彼は今日は自分が号令をかける番かどうか分からないが、「備えあれば憂いなし」なので、少し声に出しておくべきだと思っていた。彼の声は甲高いうえ、枯れているので、彼自身でさえあまり良い声だと思わなかった。しかし、彼は気落ちせず、力いっぱい叫んでいた。努力しさえすれば、成功できないことなどないと、彼は自分に言い聞かせた。)

(31)の“试试 VP”は文字通り VP を試すことである。革の鞭を持つと、「振り回す」動作を試してみたくなるのが(31)で伝達したい情報であり、一方(32)では「号令をかける」動作を試すだけでなく、さらに他のことを確かめることになる。しかし、“试试”に後続する目的語がないため、(32)の“试试”で確認したい事柄は明確ではなく、含意されているとしかいえない。“VP 试试”全体は、VP をやりながらある未知の事柄を確かめることになる。(32)の場合、後続文脈で「声の質」の話が出るので、そこではじめて具体的に確か

めたかったのは声の質だということが推測できる。

以上の比較から分かるように、同じく「VP を試す」という意味を表しながらも、“VP 试试”のほうが「VP という動作行為を通じて、何か未知の事柄を明らかにする」という意味が含まれるため、“试试 VP”よりも未知の事柄に対する意味指向が強い。そのため、〈試み〉を表す際には“VP 试试”という形が優先的に選択され、これがコーパスにおいて“试试 VP”よりも“VP 试试”のほうが用例数が多いという結果につながっているのである。

《王朔文集 1》から《王朔文集 4》、そして CCL コーパスで検出された結果では、D 類と E 類の“VP 试试”の用例はほぼ主語が 1 人称（意志表明文）や 2 人称（命令文）である¹⁷。命令文や意志表明文に限定されているとも言える D 類と E 類の“VP 试试”は、当然ながら命令や意志というモーダルな意味を表すようになる。

5.2.7 言語類型論からみる“VP 试试”の文法化

前述した A 類～E 類の違いは、言語類型論の研究成果と照らし合わせてみると、本質がよりよく見えてくる。言語類型論によれば、連動構造は大きく二種類に分けられる。一つは対称(symmetrical)の連動構造、もう一つは非対称(asymmetrical)の連動構造である。Dixon 2006:342-343 によると、対称の連動構造では VP₁VP₂のいずれが主要部であるかは決めがたく、かつ VP₁VP₂の語順はおおむね実世界の出来事の順序に一致し、類像性が高い。一方、非対称の連動構造では主要部と従属部に分けることが可能であり、語順は必ずしも実世界の出来事の順序と類像性があるとは限らない。“VP 试试”の用法にもこのような傾向が見られる。

典型的な連動構造である A 類の“VP 试试”では、VP₁と VP₂のそれぞれに独立性があり、かつ類像性が高い。VP₁の動作行為が完了した時点で VP₂の動作行為が行われる。それとは対照的に、E 類の“VP 试试”では VP₁VP₂に継起的時間関係があるというより、「同時性」を有するため、類像性が低い。さらに既然の場合は、“试试”に“了₁”が必須では

¹⁷ 前述したように、《王朔文集 1》～《王朔文集 4》から採った“VP 试试”の用例はすべて 1 人称主語や 2 人称主語である。CCL コーパスに収録されている老舎の作品に関しては、検出した D 類と E 類の“VP 试试”は合計 13 例で、そのうち 1 人称や 2 人称主語が 10 例で、3 人称が 3 例になるが、主語が 3 人称の場合でも、実際は兼語文で使われたり、人物の頭の中で考えていることを描写したりする用例であるため、命令文や意志表明文の性質にかなり近い。例(32)の“他^須喊一喊试试”のほかにも、“马先生看着没希望，爽得^俄一回试试！”（馬さんは見たところ、望みがなさそうなので、一回お腹をすかせてみることを自分から望んだ）、“杨老太太^劝他吃口烟试试”（楊おばあさんは彼にたばこを吸ってみることを勧めた）が実際の用例である。

ないことや、“试着”に言い換えたり“试试”を落としたりする方が文の許容度が上がる、という点から見て、E類の“VP 试试”における“试试”は独立性の高い動詞ではなく、動詞性が弱化した機能語的な成分に変わりつつあると言える。

5.3 “试试”の文法化の度合い

以上に示したように、E類の“VP 试试”に至っては、“试试”の動詞性が弱まっている。しかし、《試みの“看”》と異なり、“试试”はまだいくらか動詞性を有しているため、文法化の度合いは《試みの“看”》ほど進んでいない。以下、“VP 试试”の“试试”にみる文法化の度合いについて考える。

5.3.1 既然のD類とE類の“VP 试试”

命令文や意志表明文に使われるということは、D類とE類の“VP 试试”が一般に未然の動作行為であることを示している。しかしながら、僅かではあるが、D類とE類の“VP 试试”が既然の動作行為として現れる用例がある。以下の(33)(34)である。

- (33) ……司机眉飞色舞地说：“我看见一位同行贴了喜字，也贴了一个试试，
贴る ASP 1 CL 試す 試す

哪晓得生意竟然俏起来了，碰上这些日子，每天可以赚七八百元。”(CCL 语料库)
(運転手は喜びいっぱいの顔で言った。「同僚が(車に)「喜」の文字を貼っているのを見て、私も一枚貼ってみた。そうしたら、なんと商売がどんどん良くなってきたんだよ。これら(日柄のよい)の日だと、一日で7、8百元は儲かるさ。)

- (34) 有一天忽然地呢，我那儿备课，哟，备着备着课觉得挺不好的心里头。/我说算了，不备了，躺到炕上看看报吧，躺到床上。/哎，躺到床上，这，这个头一挨着这枕头，哟这房子就转起来了。/我看不好了，我就轻轻坐起来了。/走了两步儿试试，
歩く ASP 2 歩 試す

试试还能走。(《当代北京口语语料》卢沟桥/53岁/女/回族)
試す

(ある日、授業の準備をしているとき、突然気分が悪くなってしまったのよ。/それじゃ、授業の準備をやめて、オンドルで横になって新聞でも見ようと思って、ベッドに横になった。/で、ベッドで横になって、こう、頭を枕につけると、家がぐるぐる回るように感じたの。これじゃまずいと思って、そっと起き上がって座った。数歩歩いてみたけれど、試

したところまだ歩けることが分かった。)

この用法について、実際の容認度を調べるために、5.2.4 で言及した調査を行った。以下、ネイティブスピーカーを対象に行った調査結果の一部を整理し、そこから見出せる“试试”の機能語的性質を考察する。

まず、D 類と E 類の既然の用例に関する調査結果を以下の【表 I】にまとめる¹⁸。

【表 I】既然の“VP 试试”の自然度判断

	自然	やや不自然	不自然
(D 類) 装了一个试试	10/14 (人)	2/14 (人)	2/14 (人)
(E 類 1) 学了三个月试试	2/14 (人)	4/14 (人)	8/14 (人)
(E 類 2) 走了几步试试	9/14 (人)	3/14 (人)	2/14 (人)
(E 類 3) 修了一下试试	1/14 (人)	7/14 (人)	6/14 (人)
(E 類 4) 投了个篮试试	2/14 (人)	4/14 (人)	8/14 (人)
(E 類 5) 读了一读试试	0/14 (人)	4/14 (人)	10/14 (人)
(E 類 6) 踩了踩试试	4/14 (人)	4/14 (人)	6/14 (人)

D 類の“装了一个试试”と E 類 2 の“走了几步试试”は許容度が高く、(33)(34)に見る“VP 试试”の用法の適切性を支持する結果となった。しかし、その他の“VP 试试”の用法については、未然の場合においては半数以上のネイティブが自然だと判断した一方で、既然の場合は許容度が低い。

D 類と E 類 2 に関しては、“VP 试试”の VP に内包されている数量表現に、ある程度の具象性が備わっている。前者は名詞に関わる数量表現であるため、具象性が高い。後者は動作の量を表す動量詞ではあるが、具体的な数字を入れることができるという点では、時間量が含まれる E 類 1 を除けば、E 類のほかの数量表現と一線を画す。“走五步”が言え

¹⁸ 実際に調査で使用した例文は以下の通りである。

(D 類) 我的电脑以前常常中毒, 后来朋友给我推荐一个防毒软件, 我就装了一个试试, 效果非常好。

(E 類 1) 别人都说学瑜伽能减重, 我也跟着学了三个月试试, 可是一点效果都没有。

(E 類 2) 我不小心摔了一跤, 心里想这下可惨了, 要是伤了腿该怎么办。勉强站起来走了几步试试, 还好, 还能走。

(E 類 3) 小陈的自行车坏了, 我给他修了一下试试, 可是修不好。

(E 類 4) 听说小洪投篮百发百中, 我们这个球场的篮筐特别高, 很难投进。刚刚小洪投了个篮试试, 居然还是投进了, 真了不起。

(E 類 5) 这篇古文我刚刚读了一读试试, 一点都读不懂。

(E 類 6) 销售员说这种气垫很结实, 怎么踩都破不了。小陈就用力踩了踩试试, 还真的没事。

るのに対し、“*修五下”“*读五读”“*踩五踩”はいずれも言えない¹⁹。なお、D類とE類2のVPに具体的な数字が入るとはいえ、〈試み〉としてふさわしいのはやはり「一つ」か「不特定少数」を表す数字である。調査で“走了几步试试”を“走了五步试试”に変えただけで、自然だと判断した人数が9人から4人に減少した。

多くのインフォーマントがD類とE類2の“试试”に“了₁”がなくても自然に感じるということは、“试试”において“试”の動詞性が失われている証拠となる。しかしながら、5.2.4で言及した通り、一部のインフォーマントは、“装了一个试了试”“走了几步试了试”のように“试试”に“了₁”を挿入しないと不自然に感じるようである。この点から見れば“试”の動詞性は完全に失われているとは言いがたい。

【表I】から明らかなように、D類とE類2以外の“VP试试”の既然の用法として、「了₁」が入ったVP+“试试”はあまり適切な表現とは言えない。VPと“试试”両方に“了₁”を入れれば自然になる、という意見があった一方で、より多くのインフォーマントから「“试着”+“了₁”が入ったVP」にすればよくなる、という修正意見ももらった。〈試み〉を状態の一種として捉える“试着”なら自然である、ということを見ると、“VP试试”においても“试试”は完全たる動詞とは言えず、動詞性がやや弱化していることがうかがえる。

命令文や意志表明文に多用されるD類とE類の“VP试试”は、既然の場合、“试试”がない方が実は自然である。(35)の下線部を比較されたい。

(35) 大黑焉有不同意之理，可是，门，门还关着呢！叫 几 声 试 试，也许
呼ぶ いくつ 声 試す 試す

老头就来开门。叫 了 几 声，没用。 (CCL 语料库)
呼ぶ ASP いくつ 声

(黒が同意しないわけがないが、ドア、ドアはまだ閉まっているの！何回か呼んでみれば、あの老人がドアを開けて来てくれるかもしれない。何回か呼んだが、無駄だった。)

今回のインフォーマント調査でもD類とE類2以外の“VP试试”の用法について、既然の場合、“试试”を削除すれば自然になる、という意見があった。未然の場合なら使えるのに対し、既然の場合はその姿を消す、という点において本稿の4.2.5で考察した“VV

¹⁹ “投五个篮”は“投五次篮（シュートを五回する）”の意味で使えるが、それは「シュートする」という動作の時間の短さと関係すると思われる。構造が類似したもの、例えば“打个球（球技の試合をする）”の場合、“*打五个球”は言えない。

看”の用法にみる未然性に関わる制限に類似している。この点においても、E類の“试试”が〈試み〉マーカーとしての性質を多少獲得していることが分かる。

5.3.2 “VP 试试”のVPに関する形の制限

前述したように、E類の“VP 试试”、つまりVPに時間量や動作量を表す数量表現が伴う“VP 试试”の“试试”には〈試み〉のマーカーに近い性質が認められる。一方、データとしてはまだ数少ないが、(36)のようにVPに数量表現が伴わない“VP 试试”の用例も存在する。このような“VP 试试”をどのように分析すればよいか、本稿の見解は先行研究と異なる。

(36) “你们玩吧，我在一边看着。”丁小鲁说。

“那多不好，你不能再找一个人么？你们邻居有没有还没睡的，给叫来。”

“我去敲门试试。”丁小鲁站起来说。

わたし 行く ノックする ドア 試す 試す

丁小鲁出了单元门去敲对门的门，在楼道里噼噼喳喳和人说了会儿话，领着一帮男女回来。

(〈顽主〉《王朔文集4 谐谑卷》,p.30)

(「遊んでいて。私はそばで見ているだけでいいから。」丁小鲁が言う。

「それはよくないよ。もう一人見つけられない？近所にまだ眠っていない人がいないか。

そいつらを呼んできたらいいさ。」

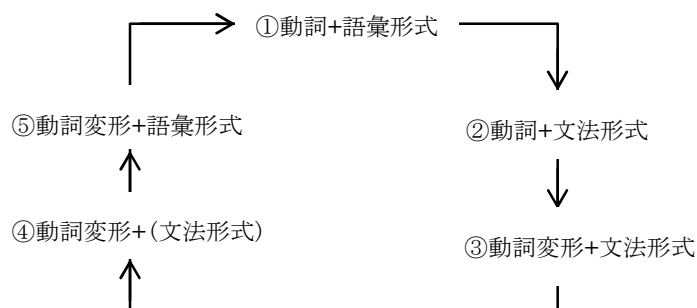
「ドアをノックしてみてください。」丁小鲁が立ち上がって言う。

丁小鲁が部屋を出て、向かい側のドアをノックして、廊下でぺちゃくちゃ人としばらくしゃべった後、男女数人を連れて帰ってきた。)

(36)の“敲门试试”について、張伯江・方梅 1996:148-149 の分析によると、“敲门”が裸の動詞句であることに対し、“试试”がアスペクトを表すVVの形を取っているため、“敲门试试”の“试试”にまだ強い動詞性が備わっていると言う。しかしながら、(36)の文脈から明らかなように、“敲门试试”はノックしてから何かを試すというわけではなく、「まだ起きている人がいないか」を確認するためにノックしに行く、ということで、ノックする動作と「試す」ことが一体化している。これは、“*敲门来试试”が言えないことや、(36)の“我去敲门试试。”という発言に後続する動作の描写に“试”という動詞が現れていないことからもうかがえる。本稿では、“敲门试试”においても“试试”の動作性が弱いと考えている。

実際に張伯江・方梅 1996:150 でも“VP 试试”の“试试”が完全に〈試み〉のマーカーとなった場合、“VP 试试”の VP に裸の動詞が入ると予測している。中国語の〈試み〉の категорияにおける文法化のプロセスについて、張伯江・方梅 1996:150 では仮説に基づいて図式している。その内容を和訳すると、以下の【図 I】になる(番号は筆者による)。

【図 I】 中国語の〈試み〉の category における文法化のプロセス(張伯江・方梅 1996)



この図において、各段階にどのような実例があるのか、張伯江・方梅 1996 では詳しく説明していないが、全体の内容を考えると、それぞれ以下の用例を指していると推測できる。

- ① 動詞+語彙形式：“尝看”（味見して、かつ観察する）
- ② 動詞+文法形式：“思量看”（考えてみる）
- ③ 動詞變形+文法形式：“跳跳看”（踊ってみる）
- ④ 動詞變形+(文法形式)：“跳跳(看)”（踊ってみる）
- ⑤ 動詞變形+語彙形式：“跳跳试试”（踊って試す）

【図 I】の矢印の方向からも分かるように、張伯江・方梅 1996 の仮説では、この文法化のプロセスは繰り返し循環するものである。そうすると、⑤の「動詞變形+語彙形式」の次は①の「動詞+語彙形式」、さらに文法化が進むと②の「動詞+文法形式」になる。この図における「動詞變形」とは、動作量が伴う VP、特に VV のことを指していると思われる。VV に〈試み〉が含意されるようになってから、④のように文法形式である《試みの“看”》が必須ではなくなる。しかしながら、VV だけでは〈試み〉の意味が表現しきれない、ということで、⑤のように動詞變形と語彙形式の“试试”の組み合わせが現れる。

そう考えると、VP に動詞變形がない“敲门试试”は①の「動詞+語彙形式」や②の「動詞+文法形式」の例として見なすことも可能ではあるが、張伯江・方梅 1996 ではそうはしない。むしろ“敲门试试”の“试试”がアスペクトを表す VV の形をしているため、“试试”に意味フォーカスがあるという理由で、“敲门试试”を【図 I】のプロセスから排除している。“试试”を〈試み〉のマーカーとして認めながらも、動詞變形の力を借りずに“試

”だけで〈試み〉の意味を表す“敲门试试”について、その“试试”が文法化の前段階にあると分析することは明らかに矛盾した議論であると本稿は考える。

“试试”が強力な〈試み〉のマーカ、つまり真の「文法形式」であれば、共起できる動詞は形や意味による制限が少ないであろう。例えば、“开车试试(運転してみる)”のような二音節の動詞との共起はもちろん、“找试试(探してみる)”“穿试试(着てみる)”など一音節の動詞との共起も可能になると考えられる。

VP が二音節以上の“VP 试试”に関しては、CCL コーパスでは“不信你让我来开车试试(信じてくれないなら、私に運転させてみたら)”“我替你讲情试试(あなたのためにとりなしてみる)”“我说你要不相信回家你照镜子试试(信じてくれないなら家に帰って鏡でも見てみたらと言った)”などが検出される。

一方、一音節の用例はほとんど見つからない。中国でユーザー数最上位を誇るインターネット検索エンジン“百度”では“找试试”“穿试试”の用例は見つかるが、まだ数少ないと言わざるをえない。

なお、二音節以上の場合、“开车试试”“讲情试试”“照镜子试试”のように、ほとんどのVP が「動詞+目的語」の構造であることに留意されたい²⁰。インフォーマント調査の結果にも類似した傾向が見られる。調査協力者 14 人のうち、“打电话试试(電話をかけてみる)”や“敲门试试(ドアをノックしてみる)”が自然であると感じる人はそれぞれ 12 人と 9 人いたのに対し、“联系试试(連絡してみる)”が自然だと回答したのは半数以下の 5 人とどまっている²¹。“联系试试”を不自然だと感じる協力者から、“联系一下试试”“联系联系试试”などにすれば自然な表現になるという意見をもらった。同様に、“打电话试试”“敲门试试”の言い方に違和感を持つ協力者は、VP に数量表現を加えた“打个电话试试”“敲一下门试试”なら適切であると言う。

²⁰ 二音節の VP が「動詞+目的語」の構造ではない用例は“请让我们自己划算试试。(私たち自身に思案させてほしい。)”の 1 例のみ検出されている。

²¹ 山東省で発行されている夕刊『齐鲁晚报』の電子版(2012年11月7日付)に“他俩挺般配,回去联系试试(彼らはお似合いだ。帰ったら連絡してみる)”と題された記事があり、姉のために婚活パーティーの申し込みに来た女性は、ある男性の申込書に目が留まり、その男性の電話番号を教えてもらった。なぜ男性の電話番号を欲しがっているのか聞かれた彼女は“感觉他俩很相配,回去后让姐姐先联系联系,如果感觉好就相处试试。(彼らはお似合いだと思うので、帰ったらまず姉に彼と連絡を取らせてみて、感じがよかったら付き合ってみてほしいです。)”と答えた。記事タイトルの“联系试试”と発話内容の“联系联系”がほぼ同義に使用されていることから、数量表現を伴わない“VP 试试”は VV と同様に〈試み〉を表すことが分かる。また、“相处试试”も二音節の VP の用例である。新聞記事にこのような“VP 试试”が使われていることは、“试试”が〈試み〉のマーカとして定着しつつある証拠になる(新聞記事のリンク：<http://news.xinmin.cn/shehui/2012/11/07/17071851.html>)。

以上の論点をまとめると、VPに数量表現を含む“VP 试试”は最も生産性が高く、動詞の音節数に制限がない。一方、数量表現を含まない“VP 试试”（“V(O)试试”とも言える）の場合、VPが動目構造（すなわち二音節以上）なら容認度が上がるが、それ以外はまだ容認度が低い。つまり、【図 I】に当てはめると、現時点の“VP 试试”はまだ主に「⑤動詞変形+語彙形式」の段階にあり、少しずつ「①動詞+語彙形式」や「②動詞+文法形式」へと文法化が進んでいる状態である。“VP 试试”のVPに〈試み〉と深く関係する「少量」を表す数量表現が多くの場合なお必要とされているということは、“试试”は単独で〈試み〉の意味を付与できるほどの文法的な力が備わっていないとも言える。VPに関するこの形の制限を見ても、“试试”はまだ完全な〈試み〉のマーカーに成り得ていないことが分かる。

5.3.3 意味や音節数との関連性

《試みの“看”》よりも“试试”のほうが、〈試み〉のマーカーとして確立しにくい。なぜなら、まず、《試みの“看”》は、本来の「観察する、確かめる」の意味から「試みる」という意味が派生し、この意味変化に伴い品詞も動詞から助詞になったことが容易に理解できる。一方、“试试”はもともと「試みる、やってみる」を意味するので、いつ、どの段階で動詞句から〈試み〉のマーカーに変わったのか、“看”ほど明白ではない。以下の(37)の囲みの部分を注意されたい。最初の“试试”は〈試み〉のマーカーに近い用法である一方、後ろの“试”は動詞である。(37)の“试试”を《試みの“看”》に置き換えた(37)では、“画一下试试”は“画画看”で置き換えられるのに、“这么一试”は“这么一看”で置き換えられない²²。“看”は“VV看”の構造において〈試み〉のマーカーとして機能するが、単独の動詞“看”の場合は「試み」の意味がなく、「見る」を意味するのである。

(37) 这些战士的画家们,有一个共同的特点:都是出身于贫苦农民。过去既没有文化修养,又没有专心学过画,更使人惊奇的是:大部分都是这次练兵才学的,有人问李金维和王振付同志怎么过去不会,现在一下子会了呢?他们说:“战士们爱画,会画的人又少,

²² この用例では“画一下试试”のあとに実際に使われた動詞が“画”ではなく“试”であるため、一見(35)に関する説明の反例になるが、(37)の用例はある一回の事柄の描写ではなく、複数の人の経験をまとめた説明であることに注意されたい。この用例では実際の「絵をかく」ことよりも、画家になる素質があるかどうか、ということを経験として伝えるために“试”が使われているため、反例にはならないと考えられる。しかしながら、このように、たとえE類の“VP 试试”であっても、前後の文脈で「试す」という意味のほうが重要であれば、“试”が単独で動詞として使われることもある。そのため、“试试”が完全に動詞性を失い、〈試み〉のマーカーになった、ということはいえないのである。

就 这么 画 一下 试试……” 而 这么 一 试，
 そこで このように 描く ちょっと 試す 試す しかし このように ちょっと 試す
 都 成功 了。 (〈李学堂中队的墙报〉《人民日报》1947/7/13)
 みんな 成功 SF

(これら戦士の画家たちには一つの共通点がある——みんな貧しい農民の出身で、これまで教養もなかったし、絵の勉強に専念したこともなかった。さらに驚くことに、ほとんどの人は今回の兵隊訓練で絵を学び始めたのである。ある人が李金維氏と王振付氏になぜ以前できなかったのに、突然できるようになったのかと聞いたら、彼らはこう言った。「戦士たちは絵が好きなのに、絵が描ける人は少なかったのです。ちょっと絵をかいてみることにしました。…」意外なことにこうして試した結果、みんな成功したのだ。)

(37) “……就这么画画看……” 而这么一 看/试，都成功了。

このように、“看”は意味の違いを手掛かりに品詞の変化を立証することができるが、“试”の場合は、“试”と“试试”の間に、意味変化がないだけに証明しにくい。

また、“试试”は動詞“试”の重ね型であり、重ね型という構造自身に動作性が含まれているため、助詞として一般的に認知されることが難しい。重ね型に関連して、音節の数という点では“试试”は助詞として特殊である。“吧”“吗”“呢”など使用頻度の高い語気助詞から分かるように、中国語の助詞のほとんどが単音節である。そのため、二音節の“试试”は助詞の典型からかけ離れている。

中国語の助詞の典型性から見ると、まだ動詞としても使われている“看”も“试试”も特殊ではあるが、“看”が助詞としてすでに一般的に認知されているのに、“试试”のほうは、はっきりした意味変化が見られないことや二音節であることから、助詞へと文法化していることはあまり注目されてこなかった。しかしながら、以上の議論から明らかなように、まだ完全な助詞とは言えないとしても、E類の“VP 试试”における“试试”はすでに具体的な動作性が失われつつあり、〈試み〉のマーカに近い性質を見せている。

5.4 まとめ

この章では「連動構造からの逸脱」という切り口で“VP 试试”における“试试”の文法化について考察した。本来、VP₁VP₂に「継起的時間関係」が見られる“VP 试试”は、用法の拡張により、本稿の分類でいうとE類に属する“VP 试试”では「継起的時間関係」が薄れ、VP₁VP₂における〈手段〉と〈目的〉の意味関係も弱くなる。また、既然の場合

においては、E 類の“试试”の文法的な振る舞いも典型的な「〈手段〉 + 〈目的〉」の連動構造の VP₂ と異なる。まだ一定の動詞性を保ちながらも、E 類にあたる“VP 试试”の“试试”は“VV 看”の“看”に近い性質を獲得している。

本稿の考察結果は張伯江・方梅 1996:150 の分析とおおむね一致している。すなわち“VP 试试”の“试试”には機能語的な性質を確認することができる。しかしながら、なお動詞性が残っているため、現段階では機能語的性質を獲得しつつあるとしか言えず、“试试”は完全なマーカールには成り得ていないと分析するのが妥当であろう。

第6章 現代中国語の〈試み〉表現

本章では、第4章と第5章の議論の補足及び総括として、現代中国語における〈試み〉を表すマーカ―や形式について考察する。まずは“试试”と《試みの“看”》の文法化の過程にみられる拡張方向の違いを明らかにし、さらに“试试”にしばしば含意される脅迫の語気について考える。続いて、動詞の重ね型VVや《試みの“看”》、“试试”といった三つの〈試み〉に関わる形式やマーカ―が現代中国語において、それぞれどのように機能しているかを考察する。最後に方言の視点を導入し、台湾国語の“看看”の用法を論じていく。

6.1 “试试”と“看”の違い

前章で考察したように、“试试”は完全な〈試み〉のマーカ―になっているとは言えないが、本稿でいうE類の“VP 试试”においては、《試みの“看”》(以下、本節では“看”と略す)と同様に前方の動詞(句)に〈試み〉の意味を付与する働きを担っていると言える。動詞に〈試み〉の意味を付与する点や、品詞が動詞から助詞寄りになっている点においては、両者に共通性が見られるが、相違点も少なくない。第5章では、両者の相違点として、意味変化の有無や音節数の違いなどの問題を取り上げたが、以下ではさらに“试试”と“看”の文法化の方向の違いや語気の違いについて考察する。

6.1.1 共起する動詞の広がり

動詞用法から〈試み〉のマーカ―へ文法化する過程において、“试试”と“看”は異なる拡張方向を見せている。前述したように、“看”は探求義が含まれる動詞(感覚器官による働き)との共起が文法化の始まりであった。一方、“试试”の場合は、探求義が読み取りにくい動詞句と共起することが文法化の始まりであったため、もし“找一下试试(探してみる)”“尝尝试试(味わってみる)”のような探求義の動詞(句)との共起が広く容認されるようになれば、それは文法化が進んだ証拠となる。

以下の(1)に簡単に“看”の文法化の過程をもう一度提示する。

- (1) “候看(観察する)” > “尝尝(嘗めてみる)” > “思量看(考えてみる)”

最初の段階では“看”は「見る」を意味する動詞に後続し、視覚による探求の意味を表す(“候看”)。その後、視覚感知に限らず、他の感覚動詞と共起するようになり、「確かめる」の意味が派生される(“尝尝”)。さらに広く一般の動詞に後続できるようになるにつれ、「試

みの語気助詞」へと文法化が一層進むのだとされている(“思量看”)。現代中国語では“VV看”のように重ね型の動詞に後続するのが一般的である。このように、“看”の文法化は探究義の動詞に後続するときに派生した「確かめる」という意味がきっかけであった。

一方、“试试”は数量表現を伴っても〈試み〉の意味が読み取りにくい動詞句に後続するのが文法化の始まりであった。そもそも「試みる」や「試す」を意味する“试试”が前方の動詞句に〈試み〉の意味を加えることは、なんら不思議なことではない。“试试”の前方の動詞句が探究義を含まない傾向は、データにもはっきりと表れている¹。1946年から2013年6月までの『人民日報』(電子版)のデータを調査したところ、本稿でいうE類の“VP试试”の用例は、(2)と(3)のように、VPに〈試み〉の意味が薄い用例が殆どである。今回の調査では、68例中、動詞に探究義が明らかな用例は1例のみであった²。(4)の動詞“算”の用例である。

(2) 这样互相埋怨，互相不满，加上邻居说个闲话，争吵常常不断，日子久了，弟兄们也苦闷起来，金安想，还是 让 大家 倒 倒 苦水 试试，

やはり させる みんな 捨てる 捨てる 苦しみ 試す 試す

弄不好就各顾各。 (〈开了民主会，家庭团结了!〉《人民日报》1946/6/28)

(このようにお互い恨み言を言い合ったり、不満を抱いたりして、さらに近所の人が悪口を言ったりするせいで、喧嘩が絶えなかった。このような日々が長く続くと、兄弟も悶々とするようになった。やはり皆に苦しみを吐き出させてみるべきである、もしうまくいかなかったら、それぞれ家計を独立させたほうがいいと金安は思うようになった。)

(3) 办完了这第三套手续后，我嘘了一口气离开了万庆公五金行。手里拿着一包沉甸甸的够四年用的小钉子，和那张没有用的发票，不禁想到：应该让那些不管顾客方便、坐在屋里订制度的人们，也 来 买 一次 钉子 试试。

来る 買う 1 回 くぎ 試す 試す

(〈买钉记〉《人民日报》1956/8/22)

¹ 動詞に探究義の有無についての調査は、《汉语动词用法词典》(『中国語動詞用法辞典』)(商务印书馆1999)を利用した。動詞の例文に、目的語が疑問形式の用例がある場合、その動詞に探究義があるとみなす。例えば、“算(数える)”には“算算得数是多少(答えはいくつか、計算してみる)”という例文があるため、“算”に探究義があると確認できる。

² “算算试试”のほかに、“碰碰试试”の用例もあり、文脈で判断するところの“碰”は“碰运气(運を試す)”の意味であるため、探究と関わりがあるように思われる。しかし、《汉语动词用法词典》の用例“你再去商店碰碰，看有这种东西没有(店へ行って、このようなモノがあるかどうか、運を試してみて)。”では、“碰碰”は直接疑問形式を目的語に取らないため、本稿では“碰”を探究義のある動詞とみなさない。

(この三番目の手続きを済ませたあと、ふうとため息をついて万慶公金物屋を後にした。4年分はあるだろうと思われる釘の入ったずっしりと重たい袋と、何の役にも立たないレシートを手にした私はこう考えた「顧客の利便性を考えずに、オフィスの中でルール作りをする人たちにもここにきてもらって、くぎを買わせてみるべきだ。)

(4) 王叔叔笑着说：“那是笔算，这要用百分比，我可不会那个新玩艺，还是 让

やはり させる

我 心里 算 算 试试 试试。” (〈果树园里〉《人民日报》1962/6/4)

わたし 心の中 数える 数える 試す 試す

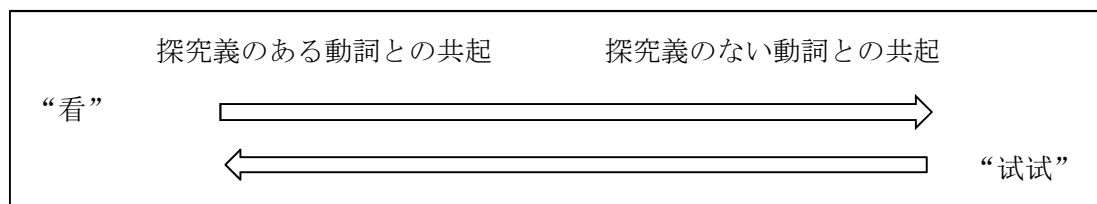
(王おじさんが笑ってこう言った「あれは筆算で、これはパーセンテージで計算しないといけないんだよ。僕はあの新しい技ができないから、やはり暗算してみることにさせてよ。)

(2)は、兄弟の妻の仲の悪さが原因で、兄弟関係も危うくなっている問題を解決するために兄の金安がある方法を考え出したという文脈である。その方法とは、お互いの不平不満をすべて吐き出させ、関係回復につながるかどうかを確かめることである。「不満を吐き出す」ことを意味する“倒苦水”は通常、何か未知の事柄を究明するための手段としては考えにくいので、動詞を重ね型にしてもやはり〈試み〉の意味は強くない。この文脈では“试试”が使われることによって、「不満を吐き出す」ことが未知のことを究明するための方策であることが明らかになり、そしてそれが後ろの「うまくいかなかったら…」へとつながる。

(3)についても同様の説明が可能である。「くぎを買う」こと自体は〈試み〉の意味が弱いため、“试试”をつけることで〈試み〉の意味を強め、「くぎを買う」ことを通して今まで知らなかったこと、つまり「くぎの購入手続きがこんなにも煩雑である」ということをルール作りの人たちに気付いてもらおう、という話し手の表現意図が見られる。

一方、(4)では、動詞“算”がすでに何かを究明するという〈試み〉の意味を持っているにもかかわらず“试试”が後続している。“试试”と共起できる動詞の範囲が広がっていることから、“试试”の動詞から〈試み〉マーカーへの文法化がいつそう進んでいることが分かる。しかし、用例数が少ないため、現時点ではまだマーカーになりきっているとは言えない。

このように、本来の語彙的意味が異なるため、動詞(句)から〈試み〉のマーカーに弱化する過程において、“看”と“试试”では共起する動詞の広がる方向にも違いがみられる。このことは以下のように図示することができる。矢印の方向は文法化の過程を表す。



感覚動詞以外に広く一般の動詞と共起する“看”は、やはり“问问看(聞いてみる)”“找找看(探してみる)”“试试看(試してみる)”などが典型的な用例である。このことから分かるように、“看”は依然として探究に関わる動詞と共起しやすい。一方、“试试”のほうは、探究と関係のない動詞とよく共起する。この特徴は次に考察する「脅迫の語気」につながると考えられる。

6.1.2 “VP 试试”にみられる脅迫の語気

“VP 试试”と“VP 看”(“VV 看”を含む)の違いについては、前者は語気が強めで提案の語気が少なく、後者は語気が柔らかめでやや書面語的であるとする先行研究の指摘もある(张伯江・方梅 1996:152)。これは北京方言に限定した指摘ではあるが、共通語の用法においても“VP 试试”は強めの語気、ひいては相手に喧嘩を売るような語気を帯びている。以下、“VP 试试”に強めの語気がみられる第5章の用例(30)の一部を再掲する。

(5) 你再动我一下试试，非跟你拼了。

(あたしにちょっとでも触れてみてごらんなさい。ただじゃおかないわよ。)

“动我一下试试”において、“动我一下”は未知の事柄を究明するための手段とは考えにくい。また、話し手にとって「この私に手を出す」ことは望ましくない事態なのに、聞き手には「やってみろ」と提案を表す命令文の形で提示している。しかし、実際に伝達したいのは「私にちょっとでも触ったら、後悔する結果になるよ」ということである。以下の(6)と(7)にもこのような強い語気が読み取れる。

(6) 在“文革”动乱中，你 骂 一个 试试!

非難する ちょっと 試す 試す

(《“吃”与“骂”》《人民日报》1986/4/30)

(「文化大革命」という動乱の時期に、ちょっとでも非難してみろ。)

(7) 高个儿一愣：“你有枪？”接着又冷笑起来：“假的吧？”小白“哗啦” 顶上子弹：

“你再 走 一步 试试!” 高个儿不敢动了。 (CCL 语料库)

歩く 1 歩 試す 試す

(のっぽが驚いて「拳銃なんか持っているの?」と言ったが、「どうせ偽物だろう?」とすぐにせせら笑った。白がカチッと銃弾をセットして「一步でも歩いてみる!」と言うと、のっぽは動けなくなった。)

(6)の“骂(ののしる、非難する)”は探究と程遠い動作行為である。また、(7)に関しては、足にけがをしたことなどで歩行困難な状況や靴を試着する場面では、“走一步(一步を歩く)”は歩けるかどうか、もしくは履き心地はどうか、ということを確認する手段として考えられるが、健全な人で歩けるか否かが問題にならない場合では、歩くことは何かの探究とは見なしにくい。したがって、(6)と(7)の“VP 试试”は「やってみる勇気があるなら、やってみろ」という意味に使われ、脅しの語気を帯びることになる。

“VP 看”よりも“VP 试试”に強めの語気が伴いやすいという言語事実は、そもそも“VP 试试”のVPに探究義が弱い動詞が使われている、ということに起因すると考えられる。ある場面において、何か未知の事柄を究明するための手段として考えにくく、むしろ悪い結果につながると分かっている動作をあえて「やってみる」よう相手に勧める。そこに脅迫の語気が感じられる。

以上の考察から明らかなように、〈試み〉のマーカースとして広く認められている“看”と〈試み〉のマーカースに文法化しつつある“试试”は、文法化の過程において、本来の語彙的意味が反映されるため、共起対象の拡張の方向に違いを見せることになる。また、探究義の薄い動詞と共起しやすいことは、“VP 试试”の用法によく感じられる脅迫の語気につながると考えられる。このように、〈試み〉のマーカースとして一括りできそうな“看”と“试试”も実は、張伯江・方梅 1996:152 の言うように棲み分けがなされており、現代中国語においては共起する動詞や使用される場面に違いが見られるのである。

6.2 動詞の重ね型VV、“VV 看”と“VP 试试”が表す〈試み〉

第4章以降の考察で、〈試み〉を表す構造として、動詞の重ね型や“VV 看”、“VP 试试”を取り上げてきた。以下、この三つの構造が表す〈試み〉とは何かという問題をさらに掘り下げ、現代中国語の〈試み〉表現の全体像を捉え直す。

6.2.1 動詞の重ね型と〈試み〉

Chao 1968/2004:224-225 では“想想 (ちょっと考える)”や“坐坐 (ちょっと座る)”のような動作動詞(action verbs)の重ね型を「試みのアスペクト(tentative aspect)」と名付けている。しかしながら、重ね型は常に〈試み〉を意味するわけではないため、それ以外の多くの研究では、動詞の重ね型(以降、VV と称す)は基本的に「動作の持続時間の短さ」や「動作の回数の少なさ」を意味するとされている(王力 1944/1985:287、呂叔湘 1956/1990:232、范方莲 1964:275、Li & Thompson 1981/1982:232、刘月华 1983:10)。

VV と〈試み〉の関係について、呂叔湘 1956/1990:232-233 と范方莲 1964:276 では未然の用法において VV は〈試み〉を表すことがある、という指摘に留まっているが、刘月华 1983:13 では「予想通りの効果が得られるか否かを知るために、ある動作行為を命令することや、要求すること、もしくは希望することを表す VV に〈試み〉の意味が読み取れる」と具体的に説明している³。ただし、刘月华 1983 のこの分析では動詞の種類について特に言及がないため、未然の VV ならどの動詞でも〈試み〉を意味することができる、という誤解を招きやすい。そのため、中国語学習者は第 5 章で取り上げた(3)の“你吃吃”や(4)“你喝喝”のような不自然な表現を使ってしまうことがある。

〈試み〉を表す VV の動詞の種類について、先行研究の観点は主に以下の二つにまとめられる。まず一つ目に、Li & Thompson 1981/1982:234 では動詞が「自然な終結点を有する動作(an activity leading to a natural end point)」であれば、〈試み〉を表す場合があると分析している。「自然な終結点」とは何か、については特に定義がなされていないが、例として取り上げられている“猜 (当てる)”と“买 (買う)”について言えば、終結点として考えられるのは「正解を出す」や「モノを手に入れる」ことであろう。つまり、両者とも“猜到了 (当たった)”や“买到了 (買った)”という動作の結果をもって動作の完了を言うことができる。〈試み〉とは未知の事柄を究明すること、という点を考えると、結果の一種とも言える「終結点」の概念は確かに重要である。しかしながら、実際にコーパスで調査すると、“猜”と“买”の用法はかなり異なる。〈試み〉を表す VV は命令文や意志表明文に用いられることが多いため、この二種類の文における“猜猜”と“买买”の用例を調査した。その結果、“猜猜”の用例が 98 例ヒットしたのに対し、“买买”の用例は 1 例もな

³ この用法の VV の後ろに“看看”や“试试”をつけることが可能である、という説明が付け加えられているが、これは必須条件ではないため、刘月华 1983 では VV のみで〈試み〉を表現できるという見解をとっている。

かった⁴。以下の(8)は“猜猜”の用例の1つである。

(8) 猜 猜 谁 来 吃 晚饭? (CCL 语料库)

当てる 当てる 誰 来る 食べる 夕食

(夕食に誰が来るか、当ててみて。)

この調査結果から、動詞の語彙的意味に「自然な終結点」があることと、VVが〈試み〉の意味を持つことには明確な相関性がないと言えよう。

もう一つはVVという形式自体には〈試み〉の意味がなく、〈試み〉の意味は、動詞の語彙的意味や発話状況によってもたらされるという分析である(李人鉴 1964:259-260、朱景松 1998:385-386、徐连祥 2002:121、郭春贵 2003:8-9)。“尝(味わう)”や“猜(当てる)”のような、本来「探究義」がある動詞ならVVにしてもその文に〈試み〉の意味を持たせることができる。また、発話状況で未知の事柄を究明することが動作の目的であれば、その動作を言語化したVVには〈試み〉の読みが生じるが、文脈の支えが必要であるため、VVの形にすれば〈試み〉が付与されるというわけではない、と分析している。例えば、以下の(9)の“弹弹”には〈試み〉の意味が読み取れそうだが、それはVVという形に由来する意味ではなく、その前に「この曲は難しくない」という発言があるからである。「きつと弾ける」という予測から〈試み〉の意味が生じたのである。

(9) 这 曲子 不 难, 你 弹 弹。 (郭春贵 2003:9)

これ 楽曲 NEG 難しい あなた 弾く 弾く

(この曲は難しくない。ちょっと弾いたら?)

VVの形式に〈試み〉の意味がなく、〈試み〉の含意は動詞の語彙的意味や文脈に大きく影響されるというこの分析は、“吃(食べる)”や“喝(飲む)”などをVVの形にしても、単独で「食べてみて」や「飲んでみて」を意味しにくい、という言語事実を説明することができる。ただし、VVが持つ「少量」という意味は〈試み〉に合致しやすい、ということ留意されたい。

〈試み〉は未知の事柄を究明することと深く関係するため、もしVVが強力な〈試み〉の形式なら、この形式に入る動詞はすべて前掲の(8)の“猜猜”のように目的語に疑問形式

⁴ VVに限定するため、“猜猜看”や“买买看”のような“VV看”の用例を除外した。なお、“买买”の用例の多くは習慣的な日常生活の動作行為を叙述する文であり、命令に使われる時にも一回の依頼ではなく、今後そうしてほしいという場面で使われる。例えば、“帮我料理料理家务，买买菜，做做饭(家事のことを手伝ったり、食材を買ったり、料理を作ったりするなどしてください)。”

を取ることが可能になるはずである。しかしながら、CCL コーパスで調査した結果、実際に VV はそれほど強力な〈試み〉を表す形式ではないことが分かった。VV に疑問形式の目的語が取れるか否かは、やはり動詞本来の語彙的意味に決定されるのである。調査では、以下の三種類の動詞の VV を検索したうえで、未然の用法を調べた：a) 感覚動詞の“尝(味わう)”“闻(嗅ぐ)”“摸(触る)”; b) 探究義の動詞“算(数える)”; c) 身体動作の“吃(食べる)”“喝(飲む)”“穿(着る)”“戴(身につける)”⁵。目的語に疑問形式を取る用例のほかに、《試みの“看”》や“试试”との共起状況も調べた。その結果を以下の表 I にまとめる⁶。

【表 I】 VV の語彙的意味と〈試み〉の関連性

	尝尝	闻闻	摸摸	算算	吃吃	喝喝	穿穿	戴戴
疑問形式が後続する用例	12 例	4 例	10 例	23 例	0 例	0 例	1 例	0 例
“看”が後続する用例	6 例	1 例	12 例	18 例	10 例	0 例	3 例	2 例
“试试”が後続する用例	0 例	0 例	0 例	0 例	0 例	0 例	2 例	1 例

表 I から明らかなように、視覚動詞“看(見る)”や聴覚動詞“听(聞く)”だけではなく、味覚や嗅覚、触覚に関する動詞の VV も目的語に疑問形式を取ることができる⁷。また、探究義の“算算”も疑問形式の目的語と共起しやすい。一方、“吃吃”“喝喝”“穿穿”“戴戴”は 1 例を除いて、殆ど疑問形式を目的語に取らない。この調査結果から、動詞の語彙的意味に「探究」が入っている場合は、VV は目的語に疑問形式を取りやすく、逆に語彙的意味に「探究」が入っていない場合は、VV の形にしても、基本的に疑問形式の目的語を取らないことが分かる。例えば、“吃(食べる)”と“尝(味わう)”を比較すると、“吃”は「食べ物を口に入れる」という具体的な身体動作であるため、「飲食物の味をみる」ことを意味する“尝”ほど、味について究明したい、という明確な探究義を持たない。そのため、“吃吃”に疑問形式の目的語は後続しないが、“尝尝”には後続する。しかし一方で、“吃”という動作行為は「味の探究」と全く無関係でもなく、「おいしいかどうか」を知るための手

⁵ 〈試み〉に関係する VV は基本的に命令文や意志表明文で使用されるため、「未然性」が重要である。平叙文の場合は、VV の前方に“想”“要”など意志を表す助動詞があれば、未然性が保証される。表 I にカウントされているのは、このような未然性が確認できる用例である。

⁶ なお、注意されたいのは、該当する用例がゼロの場合でも、その組み合わせは現代中国語で絶対に出現しないというわけではない。例えば、“喝喝看(飲んでみる)”は適切な表現だと思われるが、たまたまコーパスに入っていない。しかし、この調査結果から“喝喝看”よりも“吃吃看(食べてみる)”のほうが使用頻度が高いことが分かる。

⁷ 第 4 章の考察で“看”は「観察する」という意味から探究義が派生したことを確認したが、“听”の場合も“我想听听你有什么想法。(あなたはどのような考えをお持ちなのか、聞いてみたいです。)”のように、目的語にしばしば疑問形式の文が使用される。

段であるとも考えられる。ただし、本来の語彙的意味に探究義を含まないため、VVの後に〈試み〉のマーカ―“看”を付けて、“吃吃看”全体で探究を明示しなくてはならないのである。

なお、“穿穿”の目的語に疑問形式が使われた用例は以下の(10)である。

(10) 我给你做了一件新衣裳,你 穿穿 合适 不 合适? (CCL 语料库)

あなた 着る 着る ぴったりする NEG ぴったりする

(あなたに新しい服を作ったけど、体にぴったり合うかどうか着てみる。)

“穿”は服を体につける動作で、本来は探究義を持たないと思われる。(10)では臨時的にVVの形で「ちょっと着る」から「着てみる」という意味が派生される。しかしながら、「服を試着する」場合、よく使われる動詞は“穿”ではなく、「試す」意味を明確に出す“试”もしくは“试穿”である。例えば、店で洋服を選んでいる場面で、店員に試着可能かどうかを確認するときは(11)のように“试试”を使うほうが一般的である。

(11) 我 能 试试/#穿穿 这件衣服吗?⁸

わたし できる 試す 試す 着る 着る これ CL 洋服 SF

(この服を試着してもいいですか。)

以上の考察から分かるように、探究の意味を持たない動詞でもVVの形にすることで臨時的に疑問形式の目的語が後続するほどの強い探究義が付与されることはあるが、稀な用例と言わざるをえない。文脈の支えなしで、VVの形で〈試み〉を表すには、やはり本来の意味に探究が含まれる動詞のほうが適切と言えよう。

また、コーパスのデータから以下の傾向が見られる。探究に関わる動詞はVVだけ、もしくは主語をつけるだけで、(12)や(13)のように命令文として成立する⁹。これらの“尝尝”は「食べる動作を通じて味をみる」ことを指すが、“吃吃”という具体的な「食べる動作」を意味する動詞で置き換えることができない。なお、(12)~(16)はコーパスの用例である。

⁸ #の記号は語用論的にやや不自然、ということを示すものである。

⁹ 動詞の語彙的意味に関する言及はなかったが、王还 1963:24 では一部の動詞において、特定の一回の動作行為を表す際に、〈試み〉の意味なしではVVの形が使えないという指摘があった。例えば、“这些东西我卖不掉,你去卖卖看吧(これらのものは私が売りたくても買い手が見つからない。売ってみてもらえないかな?)。”は適切な文であるのに対し、“*这些东西对我一点用也没有,我要卖卖(これらのものは私にはちっとも役立たないから、売ることにした)。”における“卖卖”は不適切な表現である。この2例を比較すれば分かるように、VVの形式である“卖卖”だけでは〈試み〉の意味が読み取りにくい。

(12) 来, 尝尝 吧, 这 可 都 是 从 老家 带 来 的。

来る 味わう 味わう SF これ まさに みんな である から 故郷 持つ 来る PART

(ここに来て、味見してみてください。これらはみんな実家から持ってきたものだよ。)

(13) 明天是清明, 杭州的风俗是吃团子, 总理, 你尝尝。

総理 あなた 味わう 味わう

(明日は清明節ですが、杭州では団子を食べる習慣があります。総理、召し上がって
ください。)

では、“吃吃”や“喝喝”など探究と直接関係しない、具体的な身体動作のVVは意思表示文や命令文において、どのように使用されるかという点、その多くは(14)や(15)のように連動構造のV₂の位置を占め、直前のV₁と同じ目的語を取る点である。また、(16)のように後ろに目的語を取る用例もある¹⁰。

(14) 到 小卖部 买 点什么 吃吃。

着く 売店 買う 少し 何 食べる 食べる

(売店に行って、何か買って食べよう。)

(15) 大嫂! 泡 壶好茶 喝喝! 酒 喝多 了点!

一番上の義理の姉 入れる ポット 良い お茶 飲む 飲む 酒 飲む 多い ASP 少し

(お姉さん、良いお茶を入れて飲ませておくれ。ちょっとお酒を飲みすぎたんだ。)

(16) 来, 吃吃 本地瓜, 甜 着 呢!

来る 食べる 食べる 当地 スイカ 甘い PART SF

(来て、地元のスイカを食べてみてください。甘いんですよ。)

これらの用例を(12)や(13)と比較すると、以下のことが明らかになる。“尝尝”を使う場合、目の前にある飲食物を指差しでもしておけば、“尝尝”は目的語なしでも使用できるのに対し、“吃吃”や“喝喝”は食べる対象や飲む対象となるモノをも言語化する傾向が強い¹¹。

¹⁰ なお、“喝喝”には「(お酒を) 飲もう」という意味に転化される用例があり、その場合は「主語+“喝喝”」だけで文が成立する。CCLコーパスで以下の用例が見つかっている。“张先生由架上取下两瓶白酒来, 一边涮茶碗, 一边说: ‘弟兄一见如故! 咱们喝喝。……’ (張さんは棚から焼酎を2本取って、湯呑みを洗いながらこう言った:「初対面なのに、こんなに意気投合するなんて。一緒に飲もう。…」)”。この場合は具体的な飲み物を飲むという意味ではなく、飲む行為を指すため、目的語が必須ではないと考えられる。

¹¹ ここで取り上げた動詞“吃”“喝”“尝”などは、目的語を取る他動詞である。自動詞や具体的な目的語を必要としない他動詞の場合、動詞に探究義がなくても“你VV”だけで文が成立する場合がある。例えば、“你坐坐(ちょっとおかけください)。”“你等等(ちょっと待ってください)。”などがそうである。“你等等。”という表現は“你等等我(私をちょっと待ってください)。”のよ

最後に、次の6.2.2や6.2.3の議論に関連する、VVと“看”や“试试”との共起状況を考えてみたい。表Iから明らかのように、“看”は殆ど動詞の種類を選ばず、“VV看”の形において前方のVVに〈試み〉の意味を付与する。また、“看”と探究の意味を持つ動詞との相性が良いことも表Iから見て取れる。“尝尝”と“尝尝看”を例に取ると、両者はどちらでも「味わってみる」を意味するが、“尝尝”だけで「味わってみる」という意味を表現できるなら、なぜ“看”をつける必要があるのか。現代中国語において、“尝尝”と“尝尝看”の共存は大きく言えば、北方と南方の言語使用の違いを反映したものである。通時的な研究のデータに証明されているように、北京方言を中心とした北方の方言では、元の時代以降“V—V”とその省略形である“VV”に「試しに～する」の意味が派生したことにより、“看”がつく用例が殆ど見られなくなった(宮田1971:890-892、吳福祥1995:165-166)。一方、吳方言などでは〈試み〉のマーカ―“看”の用法が衰えないまま今日に至っている。“看”の用法が継承されている方言では、〈試み〉を表す際に“看”が必要であるため、“尝尝看”のような言い方が一般的である。そのため、現代中国語では探究に関わる動詞の場合、VVと“VV看”が共存しているのである。

一方で、北方の方言で形成され、明確な探究義を表す際に使われるとされている“试试”は、表Iの調査結果から分かるように、コーパスにおいては“穿穿(ちょっと着る)”や“戴戴(ちょっと身につける)”といった探究義を持たない動詞と共起する。このことから、VVの形だけで〈試み〉の意味を動詞句に付与することに限界があることが分かる。

以上の議論をまとめると、VVの形で〈試み〉を意味する場合もあるが、動詞の語彙的意味や文脈に影響されるため、VVの形にすれば〈試み〉が必ず付与されるというわけではない、ということになる。

6.2.2 “VV看”と〈試み〉

現代中国語において、〈試み〉のマーカ―“看”が使用される構造として、吳福祥1995:161では以下の三つが取り上げられている：a)“VV看”；b)“V—V看”；c)“VC看”(Cは“量一下看(ちょっと計ってみる)”“做几天看(何日間やってみる)”のような動作量や時間を表す補語のことである)。しかし実際のところ、北京を中心とする北方の地域では、a)の“VV看”はまだ使用されているが、b)とc)の使用は限定的である。現代中国語は北方方言を基礎とすると考えると、b)とc)は現代中国語において生産性の乏しい構造と言わざ

うに具体的に“我(わたし)”という待つ動作行為の対象を言語化することもあるが、誰を待つかは重要ではなく、ただ「少し待つ」ということで“你等等。”が使われるのである。

るをえない。

b)と c)の構造は生産性が乏しい、ということは先行研究の論述やデータから見て取れる。まず一つ目に、徐連祥 2002:121 では“VV 看”は通常、“V—V 看”に置き換えにくいと指摘されている¹²。その指摘によると、“翻翻看（ばらばらめくってみる）”“说说看（言ってみる）”“试试看（やってみる）”“等等看（待ってみる）”は言えるのに対し、“翻一翻看”“说一看看”“试一看看”“等一看看”などは言わないのだという¹³。

二つ目に、都市部の OL 生活をテーマにしたネットドラマ《杜拉拉升职记（ララの昇進物語）》からデータを採った結果、“看”の用例は“想想看（考えてみる）”と“听听看（聞いてみる）”のみだった¹⁴。ドラマのセリフであるため、ある程度現在の話し言葉に近いデータとみなせると考えられる。“VV 看”の用法も限定的であったが、“V—V 看”や“VC 看”の用法に至っては 1 例も見つからなかった¹⁵。

三つ目に、第 5 章で考察した E 類の“VP 试试”の VP は、“VC 看”の VC と同様に、動作量や時間量を表す数量表現が伴った動詞句によって担われる。前述したように、E 類の“VP 试试”における“试试”は〈試み〉のマーカ―の性質を獲得していると考えられる。現代中国語、特に北方で使用される中国語では、動詞句に数量表現が伴う場合、〈試み〉のマーカ―として選択されるのは“看”ではなく、“试试”であるという傾向がある。

以上の三点をまとめると、〈試み〉のマーカ―“看”は現代中国語において主に“VV 看”の形で使用される。さらに、“VV 看”の動詞は主に単音節のもので、“VVO 看”のように VV と“看”の間に目的語が入る用例もデータでは少数しか見つからない。《现代汉语词典（第 6 版）》（『现代汉语辞典（第 6 版）』）では“看”の項目に“评评理看（是非を判別してみる）”の用例があげられているが、CCL コーパスで検索した結果、“评评理看”は 2 例検出され

¹² なお、徐連祥 2002:121 では VV は先にあつて、VV という形式はよく何か未知の事柄を究明するときに使われていたため、その後“VV 看”が形成したというが、これは通時的な言語事実に反する論点である。

¹³ “V—V 看”の適切度についての判断には個人差が見られるため、完全に容認されない表現とは言えないが、この次に取り上げるテレビドラマにおいて“V—V 看”は 1 例も見つからないことと合わせて考えると、使用頻度の低い構造と言えよう。

¹⁴ このドラマは小説をドラマ化したものであり、小説では主人公のララが廣州で就職し、その後上海に転勤したというストーリーだった。一方、ドラマでは場所を北京に設定した。また、このドラマは全部で 50 回あるが、今回の調査では 1 回～30 回、延べ 400 分間弱の内容をデータとして利用した。

¹⁵ 張伯江・方梅 1996:147 では、各地の方言における〈試み〉のマーカ―“看”の使用状況を考察した結果、“看”の使用が必須ではない方言では、“看”と結合する動詞は“尝（味わう）、试（試す）、看（見る）、想（思う）、说（言う）、吃（食べる）、走（歩く）”などに限られると指摘している。

たのに対し、未然の用法の“评评理”は24例も検出された。また、表Iにまとめた調査のデータを見ても、“VVO看”の用例は全部で3例しかなかった¹⁶。このように、実際のデータでは、動詞が単音節で目的語を伴わない“VV看”が殆どである。

このように、現代中国語において〈試み〉のマーカ―“看”は、前方のVVが意志動詞であれば、語彙的意味と関係なく、VVに一律に〈試み〉の意味を付与する強力なマーカ―ではあるが、共起しやすい動詞は単音節であるため、どのような動詞でも用いられるわけではない。動詞との共起に一定の制限を受けているため、使用範囲も限定的である。

6.2.3 “VP 试试”と〈試み〉

前述したように、“试试”は数量表現を伴っても探究義が読み取りにくい動詞句に〈試み〉の意味を付け加えるものである。このときの“试试”は前方の動詞句全体を意味的に指向をするため、“试试”自身は動詞というより助詞に近い機能を獲得している。本稿でいうE類の“VP 试试”は、VPで表されている動作行為を試しにやることで何か未知の事柄を説明することにつながる、という意味を表す。1940年代から現在に至るまでの“VP 试试”の用法に、通時的变化がないかを調査するために、前述の『人民日報』（電子版）を用いてデータの収集をおこなった¹⁷。また、E類の“VP 试试”のほかに、数量表現を伴わない“V(O) 试试”をも分析の対象とした。結果を先にまとめると、用例数に関しては調査範囲の1946年～2013年6月の66年余りにわたって、顕著な増加は認められないため、“试试”は〈試み〉を表すための必須のマーカ―になったとは言いがたい。一方で、“V(O) 试试”の用例には増加傾向が見られるが、これが“试试”の文法化を一步前進させる引き金になるか否か、まだ断言することはできない状況である。以下の表IIに調査結果をまとめる。

【表II】『人民日報』にみる“VP/V(O)试试”の使用状況

	1946~1949	1950~1959	1960~1969	1970~1979	1980~1989	1990~1999	2000~2009	2010~2013
VP 试试	7例	14例	6例	4例	11例	13例	7例	7例
V(O)试试	1例	3例	0例	1例	5例	5例	7例	5例
合計	8例	17例	6例	5例	16例	18例	14例	12例

表IIの調査結果に基づき1950年から2009年までを10年単位で比較した場合、E類の

¹⁶ 実際の用例は以下の三つである：“你倒算算这笔帐看（この帳簿の勘定をしてみれば）。”“吃吃狗肉看（犬の肉を食べてみて）！”“吃吃我做的油饼看（私が作った揚げパンを食べてみて）！”。

¹⁷ “VP 试试”は口語的表現であるため、新聞のような書き言葉より、話し言葉のデータが望ましいが、通時的な話し言葉のデータが入手困難な現状では、書き言葉でもある程度“VP 试试”の用法の変化が確認できると考えられる。

“VP 试试”の用例数だけ見ても、“V(O)试试”の用例を合わせての数字を見ても、期間によっては用例数の増減があるものの、顕著な変化は認められない。このことから、“VP 试试”の“试试”はまだ〈試み〉を表すための義務的なマーカーになり得ていないことが伺えよう。

一方、“V(O)试试”の用例数は微増する傾向にある。5.3.2 で詳しく論述したが、本稿では“V(O)试试”はE類の“VP 试试”の用法がさらに文法化したものであると分析している。“V(O)试试”の用例に以下の(17)の“报名试试(申し込んでみる)”のようなものがある。

(17) 老歪挥着手让大家住嘴：“现在先报名，能不能入团，明天小组会上再评。”

李虎还站在东墙边。他捉摸着：咱也 报名试试，…(略)…。”

おれも申し込む 試す 試す

(〈李虎入团〉《人民日报》1949/12/4)

(歪さんは手を振ってみんなを黙らせてこう言った：「今はまず申し込んでください。入れるかどうかは、明日のチーム会議で選定することになります」。李虎はまだ東側の壁ぎわに立っている。彼は「おれも申し込んでみよう。…(略)…」と考えている。)

(17)の内容から分かるように、“报名试试”は「申し込んでみる」という意味で、“试试”は“报名”全体にかかっている。“试试”の動詞性がまだ強い“穿上这件衣服试试(この服を着て、(この服)を試してみる)”において“试试”は“这件衣服(この服)”を目的語に取れるが、このような意味関係は、(17)の“试试”と“名”には見られない。“试试”は“报名”という動作行為を意味的に指向し、“报名”に〈試み〉の意味を付け加えるため、具体的な「試す」という動作行為より助詞に近い性質を有している。なお、“报名”において“名”は単独で使いにくい、以下の(18)の“打电话(電話をかける)”でもやはり“电话”は“试试”の対象にはならない。

(18) 有一天下午，我带着提货单赶到武汉重型机床厂供销科去，请他们把我厂等着急用的电机订货在当天下午运到航空站去。可是工厂的汽车都出去运货去了，工厂同志又马上就要下班，怎么办呢？忽然我想起给民航局武汉站营业部 打电话试试，

かける 電話 試す 試す

看他们能不能派汽车支援一下。果然，他们一听要运工
見る 彼ら できる NEG できる 派遣する 車 サポートする 少し

厂急用的订货，马上就答应了。(〈为了空运一批订货〉《人民日报》1959/12/10)

(ある日の午後、貨物引換証を持って急いで武漢大型工作機械工場の供給販売課に行き、我々の工場で取り急ぎ必要のある電機の注文品をその日の午後うちに空港へ運送するように依頼した。しかし、工場の車はすべて貨物の運搬で出払ってしまっており、さらにその工場の工員はもうすぐ退社する時間だった。どうすればよいかと苦慮している時に、「民用航空局の武漢支店の営業部に車を出して手伝ってもらえないか、電話してみよう」ということを決意した。案の定、工場が一刻も早く必要としている注文品を運搬してほしいということを知り、彼らはすぐに要請に応じてくれた。)

(18)の“打电话试试”は「電話をかけてみる」ことであるが、そのすぐ後ろの読点に電話をかけることで確かめたい未知の事柄が後続している。このように前方の動詞句に〈試み〉の意味を付与する“试试”は、動作量や時間量を表す数量表現を伴わない動詞句と共起できるようになったことがきっかけで、以下の(19)や(20)のように否定詞や動作に対するより具体的な描写とも共起することが可能になったと思われる。

(19) “你走走看看。”“不拄拐杖我是走不动的。”“你 现在 不 拄 试试。”

あなた 今 NEG (杖を)つく 試す 試す

他试着站了起来，试着向前挪步，一步，两步，三步……“啊！我能走了！”

(〈山不在高〉《人民日报》1992/12/21)

(「歩いてみてください。」「杖をつかないと歩けないのです。」「今は杖を使わないでみてください。」「彼は試しに立ち上がり、試しに前へ足を動かしてみた。一步、二歩、三歩…「あっ！歩けるようになった。」)

(20) 海明威说他写小说时习惯站着写，这样就不会随意地把小说拉长。这样的对文学创作的严谨的态度，难道因为书写工具的变化就可以丢弃？请网络写手也学学海明威，站着写试试？也许，这样可以写得短些，更好些。

立つ ASP 書く 試す 試す (〈勿吃“注水肉”〉《人民日报》2010/4/7)

(ヘミングウェイは小説を書くときに立ったまま執筆する習慣があると述べていた。そうすると小説をやたらに長くすることが避けられるとのこと。文学創作に対するこのように慎重な態度は、書くツールの変化によって、捨て去られてよいものだろうか。ネット小説の書き手にもヘミングウェイを見習って、立ったまま書いてみることをおすすめしたい。もしかすると、そうすることでもっと短くてよい作品が書けるかもしれない。)

数量表現は否定詞と共起しにくいいため、数量表現を伴う“VP 试试”は反語表現や二重否

定といった特殊な構文でしか否定詞と共起しない¹⁸。数量表現が伴わない“V(O)试试”はこのような制限を受けない。(19)の“不拄试试”は「杖をつかないでみる」ことを意味するが、否定詞“不”は“拄”だけを否定のスコープとする。これは中国語の連動構造 VP₁VP₂の VP₁に否定詞が前置されるとき解釈と異なる¹⁹。このことから、“V(O)试试”の“试试”は動詞ではなく、助詞であることが分かる。また、(20)については、数量表現が伴わないことにより、“站着写试试”のように“写”という動作行為に関する様態描写が可能になったと思われる²⁰。

“V(O)试试”の用例の増加には、〈試み〉のマーカ―としての“试试”の使用範囲が拡大している傾向が見られる。複数の方言における〈試み〉のマーカ―“看”の用法を考察した張伯江・方梅 1996:147では、重要な結論を示している。すなわち、動詞変形がない場合（つまり動詞は裸のまま、数量表現がついていない場合）、〈試み〉のマーカ―の使用が必須となるということである。“试试”に関する以上の用例で言うと、“报名试试”“打电话试试”“不拄试试”“站着写试试”などから“试试”を取り除くと、当然ながら〈試み〉の意味がなくなる。一方、動詞に変形がある“尝尝看（味わってみる）”から“看”を取り除いた場合、〈試み〉の意味が保証されなくなるが、“尝”という動詞に本来探究義が備わっているため、“尝尝（少し味わう）”はVVの形でも派生的に〈試み〉が読み取れる。

もう一つ重要な指摘は、〈試み〉のマーカ―が強制的に必要な方言では、〈試み〉のマーカ―と共起できる動詞の種類が多く、マーカ―が強制的ではない方言では、共起する動詞も限定的になることである（張伯江・方梅 1996:147）。“试试”に関しては、(19)の否定詞や(20)の連用修飾語の用例にみられるように、様態まで〈試み〉にできるということから、“试试”の使用範囲が広がっていることが分かる。

以上の論点をまとめると、『人民日報』のデータに基づいていけば、〈試み〉のマーカ―としての“试试”の用例に量的変化は見られなかったが、質的变化は確認できる。すなわち、“V(O)试试”の用法が定着しつつある、ということである。“V(O)试试”が広く使用さ

¹⁸ 反語表現として、“太极拳对身体很好，你怎么不学学试试？（太极拳は体にいいのに、なぜ習おうとしないのか。）”のような例があげられる。読点以降の文は質問ではなく、伝達したい真意は「習ってみるべきだ」ということにある。

¹⁹ 通常、「否定詞+VP₁VP₂」の場合、VP₂までを否定のスコープとする。例えば、“小王不用筷子吃饭（王さんは箸でご飯を食べない。）”の場合、“不”のスコープは“用筷子吃饭”である。

²⁰ なお、5.3.2では単音節の“V 试试”の使用が広く容認されれば、それは“试试”が完全な〈試み〉マーカ―になったと判断する根拠になると述べた。音節数のバランスの関係で単音節の“V 试试”が単独では容認されにくくても、(20)のようになんらかの連用修飾語が前置される場合、単音節の“V 试试”が成立しやすくなることは興味深い言語事実である。

れるようになれば、“试试”はより強力な〈試み〉のマーカーになると考えられるが、現時点では用例数が少ないため、今後いっそう文法化が進むか否かは、まだ断言できない。

前述したように、“试试”の文法化の出発点は数量表現を伴っても〈試み〉の読みが生じにくい動詞句に後続し、明確な〈試み〉の意味を表すことにあった。しかし、日常的な動作行為で〈試み〉に関わるものの多くは、“看（見る）”“听（聞く）”“尝（味わう）”“闻（嗅ぐ）”“摸（触る）”“算（数える）”のように、すでに動詞の語彙的意味として探究義が含まれているため、“试试”を後続させなくても、VVの形で〈試み〉を表すことが可能である。“试试”が〈試み〉のマーカーとして、急速な広がりを見せないのはこのことに起因すると考えられる。その点において“试试”は《試みの“看”》と対照的である。

6.3 台湾国語の“看看”

最後に、方言の影響を受けて形成された台湾国語の〈試み〉マーカー“看看”の用法を考察する。台湾国語とは、中国大陸で共通語として使用される“普通话”に類似した音韻、語彙、文法体系を有しながらも、閩南方言の一つである台湾語からの影響により“普通话”と異なる用法が生じた台湾の共通語のことである。台湾国語において“看看”は〈試み〉を表す際に文法的なマーカーとしてよく使用される。

6.3.1 台湾語における〈試み〉に関連する“看”の用法

閩方言において〈試み〉を表すときには、動詞変化を伴わない「V+“看”類動詞」構造を使うことが多い。《動詞的體（『動詞のアスペクト』）》（1996年、張雙慶編集）に収録されている研究論文に基づくと、閩方言の〈試み〉表現の構造は表Ⅲのようにまとめられる²¹。

【表Ⅲ】閩方言の〈試み〉表現⁴

方言名 ⁴	福州方言 ⁴	泉州方言 ⁴	汕頭方言 ⁴
方言地域 ⁴	閩東方言 ⁴	閩南方言 ⁴	閩南方言 ⁴
〈試み〉の構造 ⁴	原形 V+“看” ⁴	原形 V+“迈” ⁴	原形 V+“睇” ⁴
用例 ⁴	“汝做看。” ⁴ (やってみて。) ⁴	“汝估迈，这是什么。” ⁴ (これは何か、当ててみて。) ⁴	“你约睇，者个是乜个。” ⁴ (これは何か、当ててみて。) ⁴

なお、閩東方言の〈試み〉の構造について「原形 V+“看”」のほかに、「原形 V+“看看”

²¹ 漢字の表記（簡体字か繁体字）は参考文献の表記に従う。

も〈試み〉を表す際に使用されると説明しているが、用例はすべて「原形V+“看”」であるため、表Ⅲでは「原形V+“看”」だけを取り上げた。

〈試み〉の構造に使用される“看”“迈”“睇”は、本来それぞれの方言で「見る」動作に関わる動詞であるが、〈試み〉の構造においては実際の「見る」という動作行為ではなく、前方の動詞に〈試み〉の意味を付け加えるマーカーとして機能する²²。

「V+“看”類動詞」は表Ⅲの用例にみられるように、その多くはそれ自体で文が終わるか、もしくは読点が後続する。単文レベルで考えると「V+“看”類動詞」は文末に置かれている。そのため、この用法における「“看”類動詞」は〈試み〉を表す語気助詞だと分析されている。Vこそ変形しないものの、この用法において閩方言の「V+“看”類動詞」は共通語の“VV看”に類似している。しかし一方で、閩方言の「V+“看”類動詞」には共通語の“VV看”にない用法もある。すなわち、疑問形式の文が後続するという用法である。表Ⅲの方言のうち、福州方言と汕頭方言にそれぞれ以下の(21)と(22)のような用例があげられている。

(21) 先 食 两 贴 看 会 差 [勿会]²³。 (陈泽平 1996:247)

まず (薬を) 飲む 2 CL 見る 可能性あり 違う 可能性なし

(何か違いが出るかどうか[→よくなるかどうか]、まず薬を2包ほど飲んでみましょう。)

(22) 者 药丸 是 去 风湿 个, 你 食 睇 有 用

これ 丸薬 である 取り除く リューマチ PART あなた (薬を) 飲む 見る ある 用途

阿 无。 (施其生 1996:188)

あるいはなし

(この丸薬はリューマチを治すものです、効き目があるかどうか飲んでみてください。)

以上にあげた二つの用法は閩南方言である台湾語にも見られる。

(23) 食 看 咧。 / 講 看 覓。 / 試 看 覓 咧。 (鄭良偉 1997:111)

食べる 見る SF / 言う 見る ~してみる / 試す 見る ~してみる SF

(食べてみる。 / 言ってみる。 / 試してみる。)

(24) 食 看 有 好食 無。 (鄭良偉 1997:113)

²² 李如龙 1996:214によると、“迈”は本来「訪ねる」という意味である。単純な「見る」動作ではないが、用例の“迈病人 (患者の見舞いをする)”や“迈脉 (脈を診る)”からは、やはり「見る」と関わっていることが分かる。

²³ [勿会]で一つの漢字を表す。

食べる 見る ある おいしい NEG

(おいしいかどうか、食べてみる。)

表Ⅲにまとめたほかの閩方言と同様に、台湾語では〈試み〉を表す際に「V+“看”類動詞」構造が使用され、V自体も変形しない。また、(24)のように「V+“看”類動詞」に疑問形式の文が後続することも可能である。

ただし、(23)についてはその他の方言と異なる点が存在することに注意されたい。台湾語の場合、“食看”だけでは座りが悪いため、後ろに命令や懇願を表す文末助詞“咧”、もしくは「～してみる」を意味する“覓”をつける必要がある。“覓”と“咧”が共起するときは“V看覓咧”という語順になる。なお、漢字表記は異なるが、“覓”は泉州方言の“迈”と同じ語を指していると思われる。そのほかに、“覓”は“卖”や“[目卖]”と表記されることもある²⁴。

“覓”は台湾語において単独で動詞として使用されず、つねに“看覓”という形で現れる。“看覓”は「見てみる」を意味し、共通語で表現すると“看看”になる²⁵。台湾語で〈試み〉を表す際に“看覓”はよく使用され、“看覓”の前方の動詞は裸の形(すなわち動詞の原形)のほかに、動作量や時間量が共起することもある。動詞は一音節に限らず、二音節の動詞も使用できる。以下、順番に二音節の動詞、動作量が伴う動詞句、そして時間量が伴う動詞句の用例をあげていく。

(25) 逐家 参考 看 覓²⁶。

みんな 参考する 見る ～してみる

(みなさん、参考にしてみてください。)

(26) 你 食 一嘴 看 覓。

あなた 食べる 1 口 見る ～してみる

(一口食べてみて。)

(27) 你 復 等 兩工 看 覓。

あなた さらに 待つ 2 日間 見る ～してみる

²⁴ 例えば、厦門語では“卖”と表記されることがある。《汉语方言语法类编(『漢語方言文法類編』)》では以下の用例があげられている(黄伯荣編集 1996:200)。“我吃看卖(私が食べてみる)。”、“跟伊商量看卖(彼と相談してみる)。”と“我摸一下看卖(私がちょっとさわってみる)。”。これらの用例における“看卖”の用法は台湾語の“看覓”に共通している。

²⁵ “看覓”のような、二音節の〈試み〉マーカーは、ほかの方言にも見られる。広東語の一つである廉江方言では“睇过”に〈試み〉マーカーとしての用法が報告されている(林华勇 2007)。

²⁶ (25)~(27)の作例の漢字表記は『東方台湾語辞典』(村上嘉英編著 2007)に準拠する。

(さらに二日間待ってみてください。)

なお、動作量を含む構造として、“V—V”とVVは含まれていないことに注意されたい。台湾語において“V—V”の構造は発達しておらず、VVに関しては一般的に「VV+補語」で使用され、迅速に補語で表される結果が達成することを意味する。共通語と異なり、VVは単独では使用されない(鄭良偉 1988:439,444)。

〈試み〉を表す際に、台湾語では「V(P)+“看覓”」構造をよく使用する。台湾国語ではこの用法の影響を受けて、次節で考察する“V(P)看看”のような構造が現れたのである。

6.3.2 台湾語の影響を受けた台湾国語の“V(P)看看”

台湾語の「V(P)+“看覓”」、動詞は原形のまま(=“V看覓”)で〈試み〉の意味が表現できる。動詞が原形である“V看覓”では、「少量」の意味から〈試み〉の意味が派生する可能性がないため、もっぱら“看覓”が〈試み〉のマーカ―として機能する。この影響を受けて、台湾国語では、規範的な構造である“VV看”のほかに、〈試み〉の構造として“V看看”も存在する。先行研究の多くは台湾国語において“V看看”は“VV看”と同じ意味機能を持つ構造である、という指摘に留まっているが、曾心怡 2003:107-110では実例に基づき、“V看看”の用法を具体的に記述している。この論文における重要な指摘は以下の二点にまとめることができる：a)Vは単音節に限らず、二音節の用例もある；b)疑問形式の文が後続する用例がある²⁷。曾心怡 2003で取り上げられたa)とb)の用例は以下の通りである。

(28) 你 跟他 聯絡 看看 嘛。

あなた と 彼 連絡する 見る 見る SF

(彼と連絡してみよ。)

(29) 我 想 先 摸 看看 那個 質料 怎麼樣 再 決定。

私 ~したい 先に 触る 見る 見る それ 生地 どう それから 決める

(あの生地はどうであるか、先に触ってみてから決めることにしたい。)

(28)を台湾語の用例(25)と、そして(29)を台湾語の用例(24)とそれぞれ比較すれば、台湾国語と台湾語の構造は極めて近いことが分かる。ただし、台湾語において“V看覓”と

²⁷ そのほかに、「単音節のVの目的語が現れるときに、目的語が短ければ“VO看看”と“V看看O”の二通りの語順がある」という指摘も重要と思われるが、名詞目的語が入る“VO看看”と“V看看O”の使用は生産的とは言えないため、本稿では今回の議論から外す。

“V看”には使い分けがあり、前者は文末に使われ、そして後者は疑問形式の文が後続する場合に使われるが、台湾国語では両方とも“V看看”が使用されることには注意が必要である。

なお、(28)と(29)に関する曾心怡 2003 の説明については、まだ検討すべき点がある。まず一つ目に、Vが二音節の場合、曾心怡 2003:108-109 では規範的な用法として“VV看”が存在するとしている。しかし、実際に台湾中央研究院の「現代漢語語料庫（『現代中国語コーパス』）」で検索してみると、“打聽打聽（少し尋ねる）”、“參考參考（少し参考する）”、“研究研究（少し研究する）”などの二音節のVVの用例は検出されるものの、“打聽打聽看”のような二音節動詞からなる“VV看”の用例は1例も見つからなかった。Vが二音節の“VV看”は理論上、存在可能ではあるが、実際の使用頻度は低いと言えよう。その一方、Vが二音節の“V看看”は『現代中国語コーパス』において、“檢查看看（検査してみる）”、“參考看看（参考してみる）”、“測驗看看（テストしてみる）”などの用例が検出され、生産性の高い構造であることが分かる²⁸。

二つ目に、曾心怡 2003:108-109 では、(29)の“摸摸看”は規範的には“摸摸”と言うべきであるとしている。この説明自体に問題はないが、方言の影響が色濃い“V看看”ではなく、規範的な構造とされる“VV看”にも疑問形式の文が後続する用例があることに留意されたい。例えば、CCLコーパスの検索結果に基づくと、“算算看”では21例のうちの3例、“摸摸看”では14例のうちの2例において疑問形式の文が後続している。以下の(30)と(31)を見られたい。

(30) 振廷回头就喊：“长贵！你快去安排船票，算 算 看 有 多少 人去？”

数える 数える 見る いる どれほど 人 行く

(振廷は振り返って叫んだ「長貴！はやく船のチケットを手配してきて。どれぐらいの人が行くかを数えてみて。)

(31) 让 我 摸 摸 看 还 有 没有 烧……。

させる 私 触る 触る 見る まだ ある なし 熱

(まだ熱があるかどうか、ちょっと触らせてみて。)

(30)と(31)の例は、最も規範的には“VV”を使い、“算算有多少人去”や“摸摸还有没有烧”と言うべきところであるが、〈試み〉のマーカ―として“看”類動詞が優先的に使用さ

²⁸ なお、これらの用例から分かるように、二音節の動詞と言っても内部関係が並列構造である動詞に限る。“評理看看”のような動目構造の用例はコーパスでは見つかっていない。

れる方言では、(21)や(22)、(24)のように、「看」類動詞の後ろに疑問形式の文が後続することが可能であり、その影響で共通語を使用する際にも“VV 看”に疑問形式の文を後続させてしまう。語気助詞と見なされている《試み の“看”》に疑問形式の文が後続することは規範的ではないとされるが、実際の言語使用においてはしばしば見られることに注意されたい。このことから、助詞になったとはいえ、“看”には少なからず動詞性が残っていることが分かる。

前述したように、“V 看看”においてVは音節の制限を受けず、単音節の動詞も二音節の動詞も使用できる。また、(26)と(27)の内容を台湾国語に言い換えると、それぞれ“你吃一口看看”“你再等两天看看”となるように、“看看”の前方の動詞に動作量や時間を伴わせることができる（動作量に関しては台湾語と同様、“V—V”やVVと共起する用例は見当たらない）。一方、6.2.2で考察したように、現代中国語において《試み の“看”》と共起できるのは、単音節の動詞の重ね型に限られ、動作量や時間を伴う用法も限定的と言わざるをえない。方言の影響を受けているとはいえ、このように台湾国語の“看看”が〈試み〉のマーカースとして、様々な動詞や動詞句と共起でき、生産性が高いことは興味深い。

6.3.3 “V(P)看看”と“VP 试试”について

以上で考察したように、台湾語の影響を受けたことにより、台湾国語では“看看”が〈試み〉のマーカースとして用いられている。マーカースとしての“看看”と共起できる動詞は音節数の制限を受けず、さらに動詞の原形に加えて、動作量や時間量といった数量表現を伴うことも可能である。こうしてみると、台湾国語の“看看”は共通語の《試みの“看”》より使用範囲が広い。

台湾国語の“看看”に対し、前章と本章の1節や2節で考察したように、共通語のほうには“试试”の使用範囲が広まる傾向にある。“看看”と“试试”は、文法化のきっかけこそ異なるが、両方とも単音節のVVからなるもので、構造的には類似している。しかしながら、“看看”と“试试”では共起する動詞の形に相違点が見られる。“看看”の用例として最も多いのは“V 看看”のように原形の動詞と共起するものである。一方、“试试”に関しては“VO 试试”の容認度こそ高くなっているものの、“V 试试”はまだ広く容認される表現ではない。また、“试试”が最も現れやすいのは“VV 试试”構造であるが、“看看”に関しては“VV 看看”の構造は存在しない。

“看看”と“试试”の用法から、一つ重要な傾向を見出すことができる。すなわち、現代中国語において〈試み〉のマーカ―は二音節のものの方が定着しやすいということである。

6.4 まとめ

本章の考察は簡単に以下のようにまとめられる。〈試み〉のマーカ―として機能する“看”とその機能を獲得しつつある“试试”は、共起可能な動詞の意味という点において、文法化の拡張方向が正反対になっている。“试试”は、数量表現を伴っても探究義が読み取れない動詞句に後続することから文法化が始まったと考えられるが、探究義の薄い動詞はそもそも〈試み〉として使用されることが少ないため、“试试”の用法はなかなか広がっていかないという状況にある。また、“试试”には脅迫の語気を帯びる用法が見られる。

次に、〈試み〉表現全体を見渡してみると、〈試み〉の意味を明示的に表すことができるのは、やはりマーカ―である“看”と“试试”だということになる。現代中国語において“看”は一定の制限を受けており、主に“VV看”という形で使用され、動詞はほぼ単音節に限られる。一方で“试试”の用法は広がりを見せてはいるものの、現時点ではまだ強力なマーカ―になっているとは言えない。動詞の重ね型VVに関しては、語彙的意味に探究義が含まれている動詞ならVVの形だけで〈試み〉の意味を表すことが可能であるが、そうでない動詞に関してはVVの形だけでは〈試み〉の意味が付与されにくい。「少量」の意味から常に派生的に「探究」の意味が生じるわけではないのである。

最後に、方言の影響を受けて〈試み〉のマーカ―として定着した、台湾国語の“看看”の用法を考察したが、典型的な構造である“V看看”において動詞は原形のままで使われる。単音節に限らず、二音節の動詞とも共起するため、生産性が高い。このような“看看”の用法と“试试”の用法から考えると、現代中国語において〈試み〉のマーカ―は二音節化する傾向があると結論づけられる。

第7章 本研究のまとめと今後の課題

本研究は、主に中国語共通語の視覚動詞に見られる文法化について考察をおこなったものである。本研究ではまず、“看（みる）”“見（見える）”“看见（見える）”“看到（見える）”といった視覚表現の複文における意味機能について、先行研究の指摘を踏まえつつ、さらに考察を深めた。本研究の考察で明らかになったのは、視覚表現が後件に使われる場合は主に「単一視点の維持」という意味機能を持ち、前件に用いられる場合は、「原因マーカ―」とも言える接続詞的な機能を獲得しているということである。小説などで登場人物の目に映った物事、もしくは判断した事柄が次の行動を引き起こす原因となる場合、中国語ではその因果関係を表すのに“因为（だから）”や“所以（したがって）”といった論理関係を表す接続詞ではなく、視覚表現のほうを多く用いる傾向が強い。“因为”は出来事に対して話し手が自らの判断に基づいて認定した論理関係を表すための接続詞であり、実況中継的に物語が進行する小説の記述には適さない。そのため、“因为”などの接続詞よりも視覚表現が多用されるのだと考えられる。

次に、本研究では〈看见〉と“只见”の複文における意味機能の差異を明らかにした。両者の比較を通じて、同じ視覚感知にかかわる動詞表現でも、注視点を前景化する“只见”は〈看见〉とは異なる接続機能を持つようになったことを証明した。“只见”は、前件で示された時間や空間をよりどころにし、“只见”に後続する事象をその時空軸上に明確に位置づけることによって、事象の実存性を確立させ、かつ焦点を与える、という接続機能を果たすマーカ―である。

最後に、本研究では動詞から〈試み〉のマーカ―へと文法化した“看”と、それと意味的に深く関連する〈見究め〉を表す動詞の“看”との比較を通じて、形式が異なれば、意味においても必ず差異が現れることを指摘した。さらに、《試みの“看”》と同様に〈試み〉のマーカ―の機能を持つとされながらも、まだ広く認められていない“试试”の用法を記述し、その一部の用法が〈試み〉のマーカ―の性質を有することを突き止めた。また、これまで指摘されることがなかった《試みの“看”》と“试试”の文法化過程にみられる拡張の方向の違いを明らかにした。同じく〈試み〉のマーカ―へと文法化したとはいえ、本来の語彙的意味の違いにより、両者は異なる拡張の方向を見せている。また、前方の動詞（句）に〈試み〉の意味を付与する語気助詞“看”と“试试”、そして「少量」という意味から〈試み〉の意味が派生することのある動詞の重ね型は、現代中国語の共通語において〈試み〉

表現として共存しているが、通時的にみると、動詞の重ね型が〈試み〉の意味を表しうるようになったことが原因で“看”の用法は衰退していったとされる。一方、すべての動詞は重ね型にすれば未然の場合に必ず〈試み〉の意味が付与される、というわけではなく、語彙的意味に探求義がある動詞なら〈試み〉の意味が明瞭になるが、そうでない場合は〈試み〉の意味が読み取りにくい。このような探求義の薄い動詞句に〈試み〉の意味を付与するために、〈試み〉のマーカ―としての“试试”が使用されるようになったと考えられる。〈試み〉表現は時代とともに変化を遂げているが、新しい形式や文法的マーカ―がすぐにそれ以前の形式やマーカ―に取って代わるのではなく、新しい表現と古い表現が共存しつつ、緩やかに変化していると考えられる。

本研究の主な貢献は、以下の2点にまとめられる。まず、本研究では複文の前件における視覚動詞の文法化について詳しく考察した。それによって、視覚動詞が〈原因〉を表すマーカ―に文法化しやすいという通言語的な傾向について、現代中国語の実例を通じて一つのバリエーションを示すことができた。もう一つは、〈試み〉のマーカ―“看”の用法や特徴、そして〈試み〉に関する表現について、通時的な観点と共時的な観点の双方から考察を進めたことにより、〈試み〉の表現に関するより多くの知見を得ることができた。

しかしながら、今回の考察で取り上げることができず、未解決のまま残された問題も少なくない。

第一に、第3章で取り上げた“只见”は書き言葉に用いられる表現であり、話し言葉ではほとんど使われない。しかし、前方の出来事の場所や時間を時空軸として用い、後続の出来事を実存化させるという表現方法は、話し言葉でもあり得るものであると思われる。話し言葉では主にどのような手段を使い、ある出来事を実存化させるか、という点は興味深い問題である。このような、前件と後件の相対的時間関係を明確するために用いられる手段として、3.3.1ではアスペクト助詞や副詞などの使用を取り上げたが、それ以外に構文的な手段も考えられる。この点については今後の課題としたい。

第二に、“VP 试试”の分析において、本稿でいうD類の構造は「V+数量詞+名詞+“试试”」の形をとるものであり、この構造で表す意味は「V+数量詞+名詞」を手段として何かを試す、もしくは「V+数量詞+名詞」自体を試す、という意味が読み取れると述べた。典型的な用例として、以下の(1)を取り上げたが、実際には(2)のような、「V+数量詞+名詞」自体を試す、という意味にしか取れない用例も存在する。

(1) 装 一 个 防 毒 软 件 试 试

取り付ける 1 CL ウイルス防御 ソフト 試す 試す

(ウイルス対策ソフトを一つインストールしてみる)

(2) 卖 点 画 试 试

売る 少し 絵 試す 試す

(絵を少し売ってみる)

(1)の場合はソフトをインストールして、そのソフトの性能を試す(=“试试这个软件”)という意味に取れるため、“试试”はまだ動詞性が強いと考えられる。それゆえ、“装一个防毒软件来试试”のように、ソフトをインストールすることとソフトを試すことを2段階に分けることができる。同時にまた“装一个防毒软件试试”は「試しにソフトをインストールしてみる」という意味にも取れる。一方、(2)のようにその動作によってモノが失われる場合、そのモノを試すという意味が生じえないため、“?卖点画来试试”は不適格な表現となる。“卖点画试试”は「試しに絵を売ってみる」という意味にしか取れない。つまり、D類の構造をしながらも、意味的にE類の構造に近い用例が存在するということである。このことから、D類とE類は連続的なものであることが予測できる。その連続性の実態を究明することは、動詞表現“试试”が〈試み〉のマーカ―に文法化する最初のきっかけを見つけることにつながるとも考えられる。今後さらに考察を深めるべき問題の1つである。

第三に、〈試み〉を表すときにマーカ―の“看”を強制的に必要とする方言では、一部の用法において意味的に〈試み〉が弱まってしまい、そのため「時間の短さや動作量の少なさ」を表す形式とほぼ同様な表現になることが報告されている(石汝杰 1996:371)。〈試み〉のマーカ―の“看”を使いながらも、その〈手段〉動作の実行が具体的に何か未知の事柄を解明することにつながるのではなく、単なる聞き手への働きかけを表す、というのは動詞の重ね型に相通じる用法である。このように、マーカ―の“看”を多用する方言で〈試み〉の意味が弱くなる場合があるという現象は興味深い。今後さらに詳しく調査していく必要がある。

本研究は、個別言語である現代中国語を考察対象とするものであるが、考察に際しては一般言語学とのつながりを心がけたつもりである。この研究成果が、中国語学の分野のみならず、動詞の文法化や形式と意味の関係などのテーマにおいて、他言語の研究者にとっても参考価値のある論考になれば幸いである。

謝辞

博士論文の執筆にあたり、指導教授である木村英樹先生には数多くの有益なアドバイスをいただきました。留学生である私を指導することは通常より手間がかかるにもかかわらず、博士論文の完成まで熱心に指導して下さったことに心より感謝申し上げます。また、楊凱榮先生・西村義樹先生・大西克也先生・小野秀樹先生には、博士論文の副査として論文の修正点や今後の課題について、貴重なアドバイスをいただきました。この場を借りて、深く御礼を申し上げます。

なお、この博士論文の完成は仲間の助けがなければ到底成し遂げられませんでした。日頃、木村ゼミの仲間と切磋琢磨し、互いに刺激しあうことからこの論文のいくつもの論点が形成されました。このように共通のテーマで議論を交わすことができる仲間たちに恵まれたことに感謝しております。なかでも私が特に感謝したい方は、木村ゼミの先輩であり、現在筑波大学で教鞭を執る池田晋さんです。池田さんは論文の全体的な内容を校正してくださいました。また、例文の和訳を逐一校正して下さった立命館大学の島津幸子さんにも感謝を申し上げます。

最後に、長い間支えてくれた台湾と日本の家族に感謝いたします。今後、専門分野での研鑽を重ね、よりよい研究成果を上げることが、これまでにお世話になった方々への恩返しになると考えております。

張佩茹

参考文献一覧

〈日本語〉

- 荒川清秀 1977.「中国語における「命令」の間接化について」,『中国語研究』第 16 号:41-64。
復刻版『中国語研究』下巻<第十二号~第二十三号>1988 年,東京:白帝社
- 池田晋 2005.「“来”の代動詞的用法とダイクシス」,『中国語学』252 号:144-163
- 大河内康憲 1967.「複句における分句の接続関係」,『中国語学』176 号:1-12
- 木村英樹 2000.「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」,『中国語学』247 号:19-39
- 木村英樹 2004.「中国語における無テンス性と実存化の問題」,2004 年度日本中国語学会
関東支部第 5 回例会レジュメ
- 木村英樹 2012.『中国語文法の意味とカタチ——「虚」的意味の形態化と構造化に関する
研究——』,東京:白帝社
- 佐藤富士雄 2000.「主語、主題研究と中国語教育」,『中央大学論集』第 21 号:1-20。中国
関係論説資料 43-2 (下) :306-315
- 白川博之 1995.「理由を表さない「カラ」」,仁田義雄編『複文の研究(上)』,東京:くろ
しお出版
- 張佩茹 2005.「複文と視点—中国語の複文における視覚表現の「視点明確化機能」—」,『東
京大学中国語中国文学研究室紀要』第 8 号:1-26,東京大学文学部
- 張佩茹 2006.「“只见”の接続機能」,『中国語学』253 号:353-372
- 張佩茹 2008.「《見究めの“看”》と《試みの“看”》」,『中国語学』255 号:197-216
- 張佩茹 2013.「〈試み〉表現“VP 试试”について」,『木村英樹教授還暦記念中国語文法論
叢』,東京:白帝社
- 豊田豊子 1979.「発見の「と」」,『日本語教育』36 号:91-105
- 中川裕志 1997.「複文における因果性と視点—計算機で処理できるもの、できないもの—」,
田窪行則編『視点と言語行動』,東京:くろしお出版
- 西山武一・熊代幸雄訳註 1984.『齊民要術:校訂譯註』第四版,東京:アジア経済出版会
- 仁田義雄 1995.「シテ形接続をめぐって」,仁田義雄編『複文の研究(上)』,東京:くろし
お出版
- 野田尚史 1996.『「は」と「が」』,東京:くろしお出版

- 原田寿美子 1997a. 「“只见”の機能について」, 『名古屋学院大学外国語学部論集』第8巻
第2号:51-65頁。
- 原田寿美子 1997b. 「小説内に見られる“見”“看见”“只见”等の用法について—日本語と
の対応の観点から—」, 『中国語学』244号:124-131
- 費燕 2000. 「中国語の「看」と「見」に関する一考察」, 『大妻女子大学大学院文学研究科
論集』10:1-12。中国関係論説資料42-2(上):280-285
- 松木正恵 1992. 「「見ること」と文法研究」, 『日本語学』vol. 11, 8月号:57-71
- 三上章 1970. 『文法小論集』, 東京:くろしお出版
- 宮崎清孝・上野直樹 1985. 『認知科学選書I 視点』, 東京:東京大学出版会
- 宮田一郎 1971. 「《~看》について」, 『人文研究』22(11):884-895
- 山田孝雄 1936. 『日本文法學概論』, 寶文館
- 渡邊亜子 2000. 「「視点」再考—中国語の「視点」を表す言語形式—」, 『調布日本文化』10:
224-212。中国関係論説資料44-2(下):170-176

〈中国語〉

- 蔡镜浩 1990. 「重谈语助词“看”的起源」, 『中国语文』1990年第1期:75-76
- 曹逢甫著, 谢天蔚译 1995. 『主题在汉语中的功能研究—迈向语段分析的第一步』。语文出
版社。
- 陈泽平 1996. 「福州方言动词的体和貌」, 『動詞的體—中國東南方言比較研究叢書第二輯』
張雙慶主編:225-253
- 町田茂 2003. 「关于汉语复句里的动词语法化现象」, 『语法化与语法研究(一)』:108-124,
吴福祥、洪波主编, 北京:商务印书馆
- 董秀芳 2007. 「汉语书面语中的话语标记“只见”」, 『南开语言学刊』第2期:74-78
- 范方莲 1964. 「试论所谓“动词重叠”」, 『中国语文』1964年第4期:264-278
- 符淮青 1993. 「“看”和“看见”等词义的同异和制约」, 『汉语学习』第5期(总第77期):1-5
- 高增霞 2005. 「连动结构的隐喻层面」, 『世界汉语教学』2005年第1期:22-31
- 郭春贵 2003. 「从“看”与“看看”探讨动词重叠的用法」, 『中国語教育』創刊号:1-13
- 黄伯荣主编 1996. 『汉语方言语法类编』, 青岛出版社
- 李人鉴 1964. 「关于动词重叠」, 『中国语文』1964年第4期:255-263

- 李如龙 1996.「泉州方言的体」,『動詞的體—中國東南方言比較研究叢書第二輯』張雙慶主編:195-224
- 李珊 2003.『动词重叠式研究』,北京:语文出版社
- 李宇明 2000.「动词重叠与动词带数量补语」,『语法研究和探索(九)』:18-37,商务印书馆
- 林华勇 2007.「廉江方言中表尝试与猜测的助词“睇过”——“看”义动词语法化的一项考察」,『中國語文研究』2007年第1期:51-59
- 刘坚·曹广顺·吴福祥 1995.「论诱发汉语词汇语法化的若干因素」,『中国语文』1995年第3期,吴福祥主编『汉语语法化研究』2005:101-119,北京:商务印书馆
- 刘月华 1983.「动词重叠的表达功能及可重叠动词的范围」,『中国语文』1983年第1期:9-19
- 刘月华 1986.「对话中“说”“想”“看”的一种特殊用法」,『中国语文』1986年第3期:168-172
- 劉月華·潘文娛·故韡 1996.『實用現代漢語語法』(繁体字版),台北:師大書苑
- 陆俭明 1959.「现代汉语中一个新的语助词“看”」,『中国语文』1959年10月号:490-492
- 吕叔湘 1956.『中国语法要略』,『吕叔湘文集第一卷』1990北京:商务印书馆
- 吕叔湘主编 1999.『现代汉语八百词(增订本)』,北京:商务印书馆
- 繆啟愉校釋 1998.『齊民要術校釋』第二版,北京:中國農業出版社
- 施其生 1996.「汕头方言的体」,『動詞的體—中國東南方言比較研究叢書第二輯』張雙慶主編:161-194
- 石汝杰 1996.「苏州方言的体」,『動詞的體—中國東南方言比較研究叢書第二輯』張雙慶主編:349-375
- 石聲漢校釋 1958.『齊民要術今釋』第三分冊,上海:科學出版社
- 王还 1963.「动词重叠」,『中国语文』1963年第1期:23-25
- 王力 1944.『中国现代语法』,1985北京:商务印书馆
- 吴福祥 1995.「尝试态助词“看”的历史考察」,『语言研究』1995年第2期:161-166
- 邢福义 2001.『汉语复句研究』,北京:商务印书馆
- 许惠玲·马诗帆 2007.「从动词到子句结构标记:潮州方言和台湾闽南话“说”和“看”的虚化过程」,『中國語文研究』2007年第1期:61-71
- 徐连祥 2002.「动词重叠式VV与V—V的语用差别」,『中国语文』2002年第2期:118-121
- 曾心怡 2003.『當代台灣國語的句法研究』,國立台灣師範大學華語文教學研究所碩士論文
- 邹韶华·张俊萍 2000.「试论动词连用的中心」,『语法研究和探索(九)』:122-128,商务印书馆

- 张伯江·方梅 1996.『汉语功能语法研究』, 南昌: 江西教育出版社
- 張雙慶主編 1996.『動詞的體—中國東南方言比較研究叢書第二輯』, 香港中文大學中國文化研究所吳多泰中國語文研究中心
- 赵淑华 1990.「连动式中动态助词“了”的位置」,『语言教学与研究』1990年第1期:4-10
- 郑贵友 1998.「“视觉感知类”句子中动宾双系形容词状语—汉语状位形容词思考之一」,『汉语学习』第1期(总第103期):24-26
- 郑良伟 1988.「台湾话动词重叠式的语义和语法特点」,『中国语文』1988年第6期:439-444
- 鄭良偉編著 1997.『台、華語的接觸與同義語的互動』, 台北: 遠流出版事業股份有限公司
- 朱景松 1998.「动词重叠式的语法意义」,『中国语文』1998年第5期:378-386

〈英語〉

- Chao, Yuen-ren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*,『赵元任全集 第3卷』2004: 1-855, 北京: 商务印书馆
- Dixon, Robert M.W. 2006. Serial Verb Constructions: Conspectus and Coda, *Serial Verb Constructions: A Cross-Linguistic Typology*, pp.338-350, edited by Alexandra Y. Aikhenvald and Robert M.W. Dixon, Oxford University Press
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*, Chicago: the University of Chicago Press
- Hopper, J. Hopper and Traugott, Elizabeth Closs. 1993/2003. *Grammaticalization (Second Edition)*, Cambridge University Press
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Vol.1*, Stanford University Press.
- Li, N. Charles & Thompson, A. Sandra. 1981. *Mandarin Chinese*(漢語語法)1982 台北: 文鶴出版有限公司
- Tai, James H-Y.1985. Temporal Sequence and Chinese Word Order, *Iconicity in Syntax*, pp.49-72, edited by John Haiman, John Benjamins Publishing Company

〈工具書〉

『大正新脩大藏經』第 22 卷，東京：大正新脩大藏經刊行會，大正十五年發行，昭和三十
八年再刊印刷

村上嘉英編著 2007. 『東方台灣語辭典』，東京：東方書店

《现代汉语词典(第 6 版)》2012 北京：商务印书馆

《汉语动词用法词典》1999 北京：商务印书馆

Chalker, Sylvia. 2000. 『Collins Cobuild 英语语法系列：9.连词』，北京：商务印书馆

Quirk, Randolph. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*,
London; New York: Longman